

反復を表すスルとシテイルの使い分け

峯 布由紀

要 旨

反復を表すスルとシテイルは同じ客観的意味を表し、置き換えが可能となる場合もあるが、時の副詞句の共起制限など統語的なふるまいに違いが見られる。本稿では、Langacker(2001)の認知文法におけるアスペクトのとらえ方を応用して次のような違いを説明した。

反復のスルには二種類あり、一つは反復事象全体を開始点および終了点をもつ連続する一つの出来事とみなして完成相的にとらえたもので、未来時の反復を表す。もう一つは、反復事象全体ではなく、反復される個の出来事をとらえたもので、現在の反復を表す。一方のシテイルは、反復事象全体を連続する一つの出来事とみなして継続相的にとらえたもので、背景の意味として事象全体の開始点および終了点が含意される。そして、このような出来事のとらえ方を想定することにより時の副詞句や従属節との共起関係の違いが説明可能となることを示した。

【キーワード】反復、完成相、継続相、認知文法、仮想空間

1. はじめに

現在の反復¹を表すスルとシテイルは、表される客観的意味には差が無く、置き換えが可能となるということがこれまでの研究で指摘されている(金水 2000, 工藤 1995, 寺村 1984)。例えば、「朝、起きて、何をしますか。」という質問に答える場合、次の(1)のようにスルでもシテイルでも意味は変わらない。

(1) a. 毎朝ジョギングをします。

b. 毎朝ジョギングをしています。

しかしながら、この二形式が常に置き換え可能というわけではない。例えば、次の(2a)のように「二年前から」という時の副詞句を挿入した場合は、スルでは不自然な文となる。

(2) a. *二年前から毎朝ジョギングをします。

b. 二年前から毎朝ジョギングをしています。

また、次の(3)のような継起的な文脈ではスルのほうが自然であり、(4)のように従属節との同時性を示すためにはシテイルの使用が義務的となる。

(3) 待ちあわせをすると、最初に来るのは花子です。
次に太郎が来ます。いつも最後に太郎が遅れて来ます。

(4) 朝、(私が)学校に行くと、いつも校庭で太郎が走っています。

本稿では、このような反復の意味におけるスルとシテイルの使い分けについて、未来時の反復の用法

も含めて考察する。

2. 先行研究

現在の反復を表すスルとシテイルの異同についてはこれまでも指摘がされてきた。

寺村(1984)は、反復のシテイルは反復される動作を連続体である「線」とみなした表現で、「発話時以前のあるときに始まり、それが発話時に終わらずに続いている(が、いずれ終わる)」というふうに理解される」。これに対し、反復のスルは点としてとらえられる動作が繰り返されることを表したもので、「『ある以前に始まった』という意識もないし、また『いずれそのうち終わる』という感じもしない、ただあることが規則的に繰り返し行われることを述べているにすぎない」としている。さらに、金水(2000)は、シテイルのほうが一時的・偶発的な傾向を表しやすいのに対し、スルはより本質的・恒常的な特性を表すのに適している。辞書的な属性記述(例、蛙は昆虫を舌で捕らえて食べる)をシテイルにすると、特定の固体の一時的な観察のように読めると指摘している。

また、工藤(1995)は、反復を表すスルとシテイルが置き換え可能となる理由について、反復は一つ一つの出来事を点としてとらえる完成的把握と、その集合としての継続的把握が複合化されているがゆえ

に、統語的にはアスペクト対立が中和するためであると説明している。

このように、反復のスルとシテイルの意味やニュアンスの違い、そして置き換えが可能になることについては以前より指摘がなされてきた。しかし、冒頭の例(2)(3)(4)の例に見られるような統語的なふるまいの違い、置き換えができない場合については十分に吟味されてきたとは言いがたい。

そこで、本稿では、Langacker(2001)の認知文法を用いた英語のアスペクトの説明を応用して日本語のアスペクトをとらえなおし、それをもとに反復を表すスルとシテイルの統語的なふるまいの違いについて説明を試みたいと思う。

認知文法では、人間が外界の事態や出来事をどのようにとらえて概念化するかに目を向けて言語構造をとらえる(Langacker 1987, 1991ab, 1999, 2001 参照)。例えば、図1に示す同じ客観的事実を表す a の「女の子がりんごを食べた」という能動文と b の「りんごが食べられた」という受動文の違いは次のように説明される²。図1の MS(Maximal Scope)というのは発話者あるいは聞き手がイメージする事態や出来事の全体像を表し、IS (Immediate Scope)は文が直接とらえている部分を示す。喩えて言うと、MS は演劇の舞台であり、IS はスポットライトで照らされた部分である。舞台上でりんごを持って食べる女の子にスポットライトを当てて描いた文が図 1a の「女の子がりんごを食べた」という文であり、女の子が手に持つりんごだけにスポットライトを当てて表現した文が図 1b の「りんごが食べられた」である。このように言語形式には人間の事態や出来事の把握の仕方が反映される。同じ客観的事実を表していても、出来事の把握の仕方が異なれば、それを表現する言語形式も異なるのである。そして、言語形式が表す出来事の把握の仕方をもとに

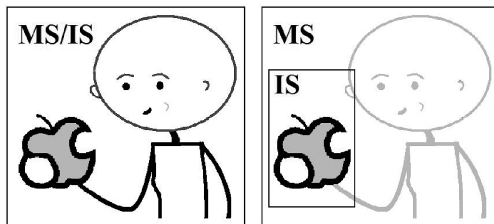


図 1. a. 能動文 (女の子がりんごを食べた) b. 受動文 (りんごが食べられた)

注. MS(Maximal Scope)は出来事全体、IS(Immediate Scope)は抜き出して表現される出来事の一部を示す。

統語的なふるまいの違いの説明を試みるのが認知文法である。

以下の本稿の構成であるが、まず3節で、認知文法を用いて、日本語のアスペクト体系と、反復ではない1回限りの出来事を表すスルとシテイルの特徴をとらえる。そして、これをもとに4節で反復を表すスルとシテイルの違いを提示し、時の副詞句や従属節との共起関係の違いを説明する。最後に5節でまとめ、今後の課題について述べる。

3. スルとシテイルの特徴

この節ではスルとシテイルの特徴をとらえる。まず3.1で日本語の基本的なアスペクト体系をとらえ、3.2で1回限りの出来事を表すスルとシテイルのそれぞれの基本的な用法、未来時を表すスルと現在時を表すシテイルの主な特徴をとらえる。次に、3.3で未来時を表していないスル、3.4で現在時を表していないシテイルについて考察し、そして、3.5でスルとシテイルの特徴をまとめる。

3.1. 日本語のアスペクトの体系

日本語は基本的にはスル・シタ・シテイル・シテイタの4形式で出来事のとらえ方(アスペクト)と出来事の時間軸上の位置づけを表す(工藤 1995 参照)。ここでは日本語の基本的なアスペクト体系とそれを表す形式についてみていく。

文のアスペクトは、動詞の意味に含まれる内在アスペクト(状態を表すか、瞬間的な変化を表すか等)とスル・シタ・シテイル・シテイタという形式の相関で決まる。日本語の動詞は大きく静態動詞と運動動詞に分けられる³。静態動詞とは、存在を表す「いる」「ある」や可能動詞など、状態を表す動詞である。一方の運動動詞とは動きや変化を表す動詞で、「食べる」「落ちる」など、ほとんどの動詞がここに分類される。そして、それぞれのスル/シタの形で状態相と完成相が表される。

スル vs.シテイルというアスペクト対立を持つのは運動動詞である(以下、断りが無い限り、運動動詞のスル/シタを、スル/シタと呼ぶ)。運動動詞はスル/シタの形式で完成相を表し、そして、シテイル/シテイタの形式で継続相を表す。完成相というのは次の(5)(6)のような出来事の開始点から終了点まで丸ごととらえた表現をいう。一方、継続相というのは、出来事の開始点および終了点を除いた部分をとらえた表現で、大きく次の二つに分けられる。(7)

のように開始点と終了点の間の運動のプロセスを表す「進行」と、(8)のように終了点の後の状態を表す「結果」である。この「結果」には(9)のような実際には出来事の結果は残存していないが、経験として残存しているという場合も含まれる⁴。

- (5) 幕が下りる。 [完成相]
 (6) 幕が下りた。 [完成相]
 (7) 幕がゆっくりと下りていた。 [継続相進行]
 (8) 既に幕が下りていた。 [継続相結果]
 (9) 彼はその前にも中国に一度行っていた。 [継続相結果]

下の表 1 はスル・シタ・シテイル・シテイタの 4 形式によって表される出来事のとりえ方についてまとめたものである。そして、この表の図 2~5 は Langacker(2001)の認知文法で示される英語のアスペクトのとりえ方を日本語に援用したものである。以下、この図を用いて先に述べた出来事のとりえ方を確認したいと思う。

図 2~5 のそれぞれの四角の枠内の右向きの矢印の線は時間の流れを意味し、上の線は出来事を表している。図中の MS(Maximal Scope)というは表現される出来事全体を示し、IS(Immediate Scope)は文がスポットライトを当てて表現している部分を示す。

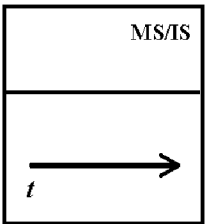
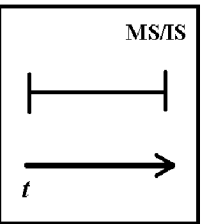
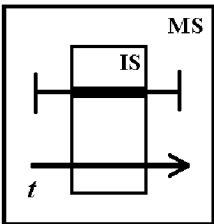
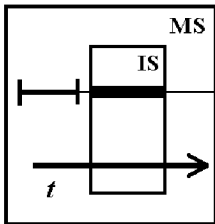
図 2 は静態動詞のスル/シタで表される状態相を表し、図 3 は運動動詞のスル/シタで表される完成

相を表している。完成相の表す出来事というのは図 3 に示されるように出来事の両端には開始点と終了点をもつ。そして、その出来事の開始点、運動のプロセス、終了点、全てにスポットライトを当てて、出来事を丸ごととらえた表現を完成相と呼ぶ。一方、状態相というのは図 2 に示されるように開始点と終了点を持たない出来事を表現したものである。

次に、図 4 と図 5 に示される継続相の「進行」と「結果」を見られたい。「進行」も「結果」も出来事自体は図 3 の完成相と同じように開始点と終了点をもつ運動動詞で表される出来事である。そして、その出来事の開始点と終了点を除いた運動のプロセス部分にスポットライトを当て、そのプロセス部分をとりえた表現が「進行」である。一方の「結果」は、出来事の終了点のあとの状態にスポットライトを当て、その終了後の状態をとりえた表現である。つまり、完成相も、継続相の「進行」と「結果」も、開始点と終了点を持つ運動動詞の出来事を表しているのであるが、出来事のとりえ方、表現の仕方が違うのである。

先の(6)~(8)で表される出来事であるが、これらは過去に起きた同じ出来事と考えることも可能であろう。この 3 文の違いはスポットライトの当て方、つまり、出来事のとりえ方、アスペクトの違いである。一方、(5)は異なる時間(この場合は、未来時)に起こった異なる出来事と解釈するのが自然であろう。

表 1. アスペクトと形式

動詞の種類	静態動詞 (ある、いる等)	運動動詞 (見る、落ちる等)		
形式	スル/シタ	スル/シタ	シテイル/シテイタ	
アスペクト	状態相	完成相	継続相	
			進行	結果
				
	図 2. 状態相	図 3. 完成相	図 4. 進行	図 5. 結果

注1. 図 2~4 は Langacker (2001)より引用したもので、図 5 は、筆者が作図したものである。

注2. MS(Maximal Scope)は出来事全体、IS(Immediate Scope)は抜き出して表現される出来事の一部を示す。

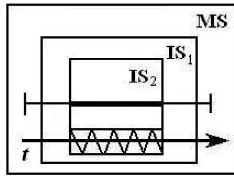


図 6. 現在進行(シテイル)

注 1. 波線の箱は発話時を表す。
注 2. Langacker(2001)より引用

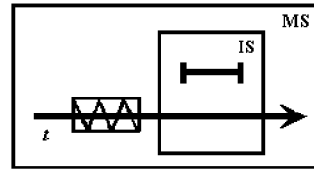


図 7. 未来完成相(スル)

注 1. 波線の箱は発話時を表す。
注 2. 筆者作図

3.2. 未来時を表すスルと現在時を表すシテイル

表 1 の図 4 と図 5 を見て分かるように、継続相は IS の部分に出来事の開始点、終了点といった状態が変化する切れ目を含まず、その点で図 2 に示す状態相に共通する性格をもつ。しかし、継続相の場合には背景的な意味として、つまり、MS には開始点および終了点があり、完成相の出来事であるという意味が含まれる。したがって、開始点および終了点の無い状態相を次の(10)のようにシテイル形式にすると非文となる。

(10) *机の上に本があっています。

全ての動詞が表 1 のように静態動詞か運動動詞のどちらかに分類できるわけではない。例えば「違う」は次の(11)のようにスルでもシテイルでも現在の状態を表す。しかし、形式の違うこの二つが全く同じというわけではない。(11b)のシテイルの場合、背景の意味に出来事の開始点や終了点が含まれるため、時間的限界性、つまり、入力ミスした結果生じた「違い」、あるいは後で訂正される一時的な「違い」といった解釈や、部分的に「違う」といった解釈を含みうる。したがって、(12)のように恒常的かつ全体的に「違う」と言う場合には、シテイルで表すと不自然な文となる。

(11) a. この漢字、こちらの文書のと違いますね。

b. この漢字、こちらの文書のと違っていますね。

(12) a. ワシントン DC とワシントン州は違います。

b.*ワシントン DC とワシントン州は違っています。

(「全く異なる州である」という意味)

以上のことから、状態相とは異なり、シテイルには、出来事の開始点、終了点といった状態が変化する切れ目が背景的な意味として含まれると言えるであろう。

では、次に、完成相スルと継続相シテイルの違いについてみていく。スルとシテイルは次の(13)のよ

うに文脈や共起する時の副詞句など何ものなければ、通常、シテイルは発話時の状態を表し、スルはこれから起こる出来事を表していると解釈される。

(13) a. メモを書いています。

b. メモを書きます。

(13a)のシテイルは出来事の運動プロセスの部分を取り取った表現であり、現在進行のシテイルを図示すると図 6 のようになる。波線の箱は発話時を表し、発話時現在に継続する出来事の状態 IS₂ をとらえて表現するのが、現在進行のシテイルである。次の(14)のように「朝から」という過去の開始点が明示されている場合も、過去の開始点は背景的なもので、発話時現在の状態について述べる場合はシテイルで表現される。

(14) このおでんは朝からずっと煮込んでいます。

進行のシテイルと完成相スルの使い分けは、視点と出来事の遠近でしばしば説明される(金水 2000 等)。発話時に起こっている出来事は、近すぎて全体をとらえることができないため、開始点と終了点を含まない目前のプロセス部分しか表現できず、図 6 に示す進行で表される。しかし、図 7 に示すように、一旦、出来事が発話時から離れ、出来事の継続時間の長短に関わらず、開始点と終了点を含めた出来事全体がとらえられるようになれば、(13b)のように完成相で表されるのである。したがって、次の(15)のように同じ時の副詞「今」と共起していても、シテイルと共起する「今」は発話時現在を表し、スルと共起する「今」は「今すぐ」と同義に解釈される。

(15) a. 今、メモを書いています。

b. 今、メモを書きます。

また、日本語の場合、次の(16)のように発話時に開始点が重なっていても、未来完成相スルで表される。

(16) これから 3 年間、僕はここに住みます。

次の(17)のように未来における終了点が明示される場合については、現在の延長として継続中の状態を述べるのであればシテイルで表現され、発話時以

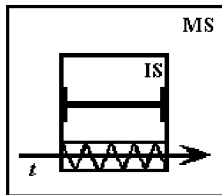


図 8. 現在完成相(スル)

注 1. 波線の箱は発話時を表す。
注 2. Langacker(2001)より引用

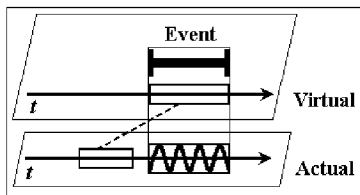


図 9. 歴史的現在の完成相(スル)

注1. 波線の箱は発話時を表す。
注2. 筆者作図

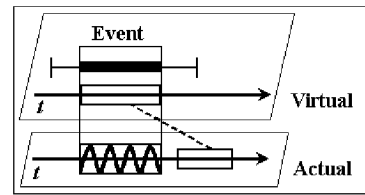


図 10. 未来進行(シテイル)

注1. 波線の箱は発話時を表す。
注2. 筆者作図

降の動作として叙述する場合はスルで表現される。

(17) a. 三時までこのまま図書館で勉強しています。

b. 三時までこのまま図書館で勉強します。

3.3. 未来時を表していないスル

3.2 でみたように 1 回限りの出来事を表すスルは、通常、未来時を表す。しかし、場面が限られてくるが、スルで表現される現在の出来事もある。例えば、「宣言します」「お願いします」のような遂行を表す言葉や、料理番組での話しながらの手順の説明など、出来事と発話時が同時に起こる場合である。

これは英語の場合も同様であり、Langacker (2001)は上の図 8 を用いて現在完成相は発話時と出来事時が一致することを使用条件としていると説明する。上に挙げたスルで表される現在の出来事の例は出来事時と発話時が一致するため現在完成相のスルで表されるのである。

さらに、英語同様、日本語も次の(18)の下線部のように、過去の出来事を、臨場感をもたせるために現在形で表現することが多々ある。

(18) 昨日、いつもの飲み屋に行ったら、見慣れない女性がいた。亭主に聞くと、彼の妹だという。彼女は、店の中を動き回り、注文をとる。そして、料理を運んでくる。

この用法について、Langacker(2001)は、過去の出来事を仮想空間において再生し、その順に述べているのだと説明する。そして、ここで現在完成相が用いられる理由について、発話と同時に出来事が仮想空間において再生され、発話の終了と同時に終了するからと説明する。これを図示したものが上の図 9 である。仮想空間での出来事時の開始点および終了点が発話時と一致し、現在完成相スルの使用条件が満たされている。また、聞き手は話者の発話と同時に出来事の再生を仮想空間で行うため、臨場感を感じる。そして、図中の点線が示すように時の副詞句や文脈等によって当該の出来事現実世界の時間軸

上に位置づけられるのである。

3.4. 現在時を表していないシテイル

3.2 でみたようにシテイルは基本的には発話時の状態を表す。しかし、次の(19)のように視点が未来のある時点に設定された場合、シテイルが使用される。これも上の図 10 のように仮想空間において描写される出来事が発話時に継続中であると考えられることができる。そして、この仮想空間は「来年の今頃」という時の副詞句により、現実世界の時間軸上に位置づけられるのである。

(19) 来年の今頃は、弟も東京で生活していますよ。

通常、時間の流れに沿って文は並んでおり、時間設定は、時の副詞句だけでなく、前文や従属節などでも行われる。例えば、次の(20)のシテイルであらわされる出来事は、前文で設定された時間に位置づけられた空間での継続する出来事を表したものであることができる。

(20) 明日、空港に到着したら、息子の携帯に電話してください。息子が空港で待っています。

このようにシテイル/シテイタは基本的に先行する出来事との同時性や時間的後退性を表し、スル/シタは継起性を示す。スル/シタの場合は、先へ先へと出来事の配列の順に時間が流れる。このようなテキストの流れについて、工藤(1995)は、スル/シタ、シテイル/シテイタのもつテキスト的機能として説明している。

3.5. まとめ

以下、1 回限りの出来事を表すスルとシテイルの特徴についてまとめる。

- ① 完成相スルも継続相シテイルも出来事の開始点と終了点をもつ。
- ② 通常、発話時に継続中の出来事はシテイルで表現され、発話時に降に起こる出来事はスルで表現される。
- ③ スルが発話時現在を表すときは、出来事の開始

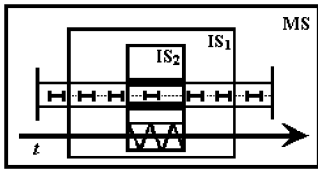


図 11. 現在反復(シテイル)

注 1. 波線の箱は発話時を表す。

注 2. 筆者作図

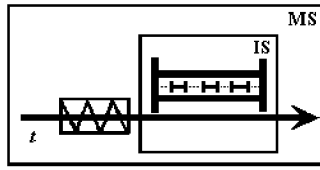


図 12. 未来反復(スル)

注 1. 波線の箱は発話時を表す。

注 2. 筆者作図

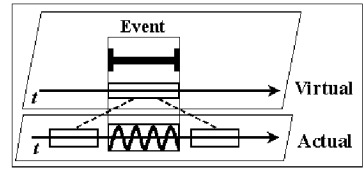


図 13. 現在反復(スル)

注 1. 波線の箱は発話時を表す。

注 2. 筆者作図

点および終了点が発話時と時間的に一致することを条件としている。

- ④ 歴史的現在の用法におけるスルや未来時の出来事を表すシテイルの用法は仮想空間を想定することで説明される。
- ⑤ 文脈の時間的流れをみると、スルでは継起的に時間は流れ、シテイルでは時間の流れが留まる。

4. 反復を表すスルとシテイル

ここでは反復を表すスルとシテイルの違いについてみていく⁵。

まず初めに、4.1 で 1 回限りの出来事を表すスル、シテイルそれぞれの基本的な用法の拡張と考えられる未来反復を表すスルと現在反復を表すシテイルについてみる。次に、4.2 で現在反復を表すスルについてみていく。そして、4.3 で反復を表すスル、シテイルと共起可能な時の表現を整理し、4.4 で複数の出来事により構成される反復事象について考察する。

4.1. 未来反復スルと現在反復シテイル

3 節で見た 1 回限りの出来事を表すスル、シテイルと同様に、反復する出来事の場合も基本的にはスルは未来時、シテイルは発話時現在の反復を表す。したがって、共起可能な時の表現をみてみると、(21)のように発話時現在を表す「今」⁶、そして(22)のように反復事象全体の過去の開始点を表す時の表現と共起するのはシテイル、(23)のように発話時以降の開始点を表す時の表現と共起するのはスルである。さらに、一回限りの出来事を表すスル、シテイルと同様に(例(17)参照)、(24)のように未来における反復事象全体の終了点「～まで」とはスルもシテイルも共起可能である。

- (21) a. 今、毎朝ジョギングをしています。
- b.*今、毎朝ジョギングをします。
- (22) a. 去年から毎朝ジョギングをしています。
- b.*去年から毎朝ジョギングをします。

- (23) a. これから毎朝ジョギングをします。

b.*これから毎朝ジョギングをしています。

- (24) a. パレードは駅前広場で来週の日曜日まで毎日行われます。

b. パレードは駅前広場で来週の日曜日まで毎日行われています。

この現在反復を表すシテイル、未来反復を表すスルそれぞれを図示したものが図 11、図 12 である。どちらも反復事象全体を開始点と終了点をもつ連続する一つの出来事とみなし、スルは完成相的に、そして、シテイルは継続相的にとらえているのである。

また、3.4 でみたシテイルと同様に(例(19)参照)、仮想空間を想定することで、次の(25)のような未来時の反復を表すシテイルの用法も説明可能となる。

- (25) 来年の今頃は、週 1 ぐらいは勉強していますよ。

以上、未来反復スルと現在反復シテイルはどちらも反復事象全体を開始点および終了点を持つ一つの連続する出来事とみなし、3 節でみた 1 回限りの出来事を表すスル、シテイルと同様の出来事のとりえ方をしていることをみた。では、次に、現在反復を表すスルについてみていく。

4.2. 現在反復スル

スルは、未来反復だけでなく、現在繰り返される反復も表す。これは先行研究においても指摘されているように、反復事象全体の開始点および終了点を感じさせない反復である(工藤 1995, 金水 2000, 寺村 1984 参照)。例として、次の(26)のような辞書における属性記述や、(27)のような習慣を表す。

- (26) 蛙は昆虫を舌で捕らえて食べる。

- (27) 私は毎朝 1 キロ走ります。

このような現在の反復を表すスルは、3.3 で見た歴史的現在を表す現在完成相スル同様、上の図 13 のように仮想空間における生起としてとらえることにより説明が可能となる。図 13 の点線は、仮想空間で生じる出来事が文脈や、「今年」「最近」や「いつも」「毎日」などの時 や頻度の副詞句によって現実世

界の時間軸に位置付けがなされることを示す。また、(26)の例のように現実世界への時間的位置付けが無いものは、恒常的に生起するものとして解釈される。そして、図 11、図 12 で示される反復とは異なり、仮想空間で想起される出来事は 1 回だけの出来事で、連続する複数の出来事ではない。つまり、反復事象全体をとらえたものではないため、現在反復を表すスルは反復事象全体の開始点や終了点とは共起できないのである。本稿の冒頭で挙げた次の例(2)(再掲)のように、反復事象全体の過去の開始点と共起する場合、スルが不自然となるのはこのためである。

(2) a. *二年前から毎朝ジョギングをします。

b. 二年前から毎朝ジョギングをしています。

4.3.反復を表すスル・シテイルと時の表現との関係

4.1 では、未来反復スルと現在反復シテイルの表すテンスの違いから、反復事象全体の開始点および終了点を表す共起可能な時の表現の違いをみた。そして、4.2 では現在反復スルは反復事象全体の開始点および終了点を表す時の表現とは共起しないということを確認した。

では、次に、反復される個の出来事の開始点および終了点を表す時の表現との共起についてみていく。

次の(28)から(30)の例からもわかるように、反復される個の出来事の開始点および終了点を表す時の表現は、現在反復シテイル、現在反復スル、未来反復スル、どの種の反復においても共起可能である。

(28) 今、毎朝 6 時から 7 時までジョギングをしています。

(29) いつも、毎朝 6 時から 7 時までジョギングをします。

(30) これから、毎朝 6 時から 7 時までジョギングをします。

また、次の(31)から(33)の例文に見られるように、反復される個の出来事の開始、生起時、終了を示す従属節と共起する場合も、どの種の反復も共起可能である。

(31) a. いつも父が帰って来てから食事をしています。

b. いつも父が帰って来てから食事をします。

c. これからは、いつも父が帰って来てから食事をします。

(32) a. 太郎が来た時はいつもみんなでカラオケに行っています。

b. 太郎が来た時はいつもみんなでカラオケに行

きます。

c. これからは、太郎が来た時はいつもみんなでカラオケに行きます。

(33) a. 毎日、日が暮れるまで、外で遊んでいます。

b. 毎日、日が暮れるまで、外で遊びます。

c. これからは、毎日、日が暮れるまで、外で遊びます。

ここで、以上見てきた反復を表すスルとシテイルと時の表現との共起についてまとめると、次のようになる。

① 未来反復スルおよび現在反復シテイルは反復事象全体の開始点や終了点を表す時の表現と共起する。

② 現在反復スルは反復事象全体の開始点や終了点を表す時の表現とは共起しない。

③ 反復される個の出来事の開始点および終了点を表す時の表現とは、未来反復スル、現在反復スル、現在反復シテイル、どの種の反復も共起する。

そして、このような反復を表すスルとシテイルの特徴をとらえることによって次の(34)に見られるようなテンスの違いも説明が可能となる。

(34) a. ケンがアメリカに帰ってから、私は毎日英語を勉強しています。 [現在]

b. ケンがアメリカに帰ってから、私は毎日英語を勉強します。 [未来]

反復事象全体の開始点示す従属節と共起する場合、シテイルは現在の反復と解釈される((34a)参照)が、スルは未来の反復と解釈される((34b)参照)。これは、スルは、現在反復を表すスルは反復事象全体の開始点をもちえないため、反復事象全体の開始点示す従属節と共起する場合には反復事象全体の開始点をもつ未来反復を表すスルと解釈されるのである。

また、次の(35)のように「3 キロ減量するために」というような具体的な到達目標と共起する場合も、シテイルは現在の反復を表すが((35a)参照)、スルは「これから毎日走るつもりだ」というような未来の反復と解される((35b)参照)。これも、上の①から③に示す反復を表すスルとシテイルの特徴をとらえることによって説明可能である。

(35) a. 3 キロ減量するために、毎朝ジョギングをしています。 [現在]

b. 3 キロ減量するために、毎朝ジョギングをします。 [未来]

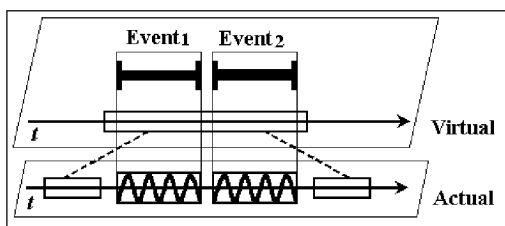


図 14. 継起(スル-スル)

注 1. 波線の箱は発話時を表す。
注 2. 筆者作図

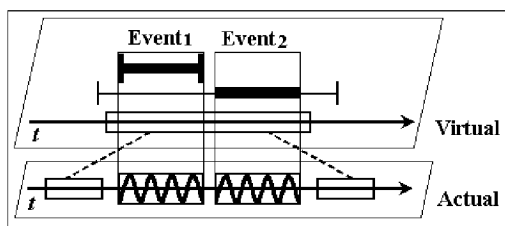


図 15. 同時(スル-シテイル)

注 1. 波線の箱は発話時を表す。
注 2. 筆者作図

この場合も、「到達目標＝終了点」ととらえられるため、スルの場合には反復事象全体の開始点および終了点をもつ未来反復と解釈されるのである。

そして、上記③に示す時の表現と同様、次の(36)の「健康のために」のような、反復される個の出来事の目的とも解釈可能な目的の場合は、スルでも現在の反復という解釈が可能となる。

(36) 毎朝、健康のためにジョギングをします。

4.4. 複数の出来事で構成される反復事象

最後に、複数の異なる出来事で構成される反復事象を表すスルとシテイルについて簡単に述べる。

次は、冒頭にあげた例(3)(4)(再掲)である。(3)は継起的に出来事が起こり、それが毎回繰り返されることを意味する。これは図 14 に示すように仮想空間において出来事が継起的に生起することをセットでとらえたものと考えられる。そして、このような継起的な関係は、通常、完成相の連続によって形成される。

(3) 待ちあわせをすると、最初に来るのは花子です。次に太郎が来ます。いつも最後に次郎が遅れて来ます。

(4) 朝、学校に行くと、いつも校庭で太郎が走っています。

一方、(4)は前件と後件が重なる同時的な関係にあり、これは図 15 に示される。後件、つまりシテイルで表される Event2 は背景の意味に開始点を持ち、その開始点は Event1 よりも前にあるため、結果的に Event1 と Event2 の同時性が示されるのである。

しかしながら、上の(4)の後件を次のようにスルにしてしまうと、図 15 に示される前件と後件が重なる同時性の読みは失われ、図 14 に示される継起的な読みとなってしまう。

(4) 朝、学校に行くと、いつも校庭で太郎が走ります。

以上のことから、反復を表すスルとシテイルは、複数の出来事で構成される反復事象の場合、出来事間の時間的流れと相関して使い分けられると言えよう。

5. まとめと今後の課題

本稿では、Langacker(2001)の認知文法を用いた英語のアスペクトのとらえ方を応用し、日本語の反復を表すスルとシテイルの統語的なふるまいの違いについて考察を試みた。そして、次のような統語上の違いが浮き彫りになった。

まず、反復のスルには二種類ある。一つは、反復事象全体を一つの連続する出来事として完成相的にとらえるもので、全体の開始点および終了点を持ち、未来時の反復を表す。もう一つは、仮想空間における 1 回だけの出来事をとらえるもので、反復事象全体の開始点も終了点ももたない現在の反復を表す。一方のシテイルも現在の反復を表すが、シテイルでとらえている現在の反復は、スルとは異なり、反復事象全体を連続する一つの出来事とみなしてとらえたもので、背景の意味に事象全体の開始点および終了点をもつ。

そして、これらの基本的な意味の違いが共起可能な時の副詞句や従属節の違いに反映されていることが明らかとなった。

さらに、複数の異なる出来事で構成される反復事象の場合はその出来事間の時間的流れがスルとシテイルの使い分けに関わっていることをみた。

以上、本稿では反復を表すスルとシテイルに焦点を当てて論じてきたが、シタやシテイタで表される反復については今後の課題とし、稿を改めて考察したいと考えている。また、森山(本報告書)が試みているような、教材化を目的とするわかりやすい図式化についても今後の課題としたい。

注

1. 吉川(1976)及び仁田(2002)では「くりかえし」、寺村(1984)では「現在の習慣」「集団としての現象の継続」と呼ばれているが、本稿では工藤(1995)、金水(2000)にならない、「反復」と呼ぶ。以下、混乱を避けるため「反復」に統一する。
2. 認知文法を用いた能動文および受動文の説明については森山(本報告書)を参照のこと。
3. 本稿では金水(2000)にならない、「静態動詞」「運動動詞」「完成相」「継続相」「進行」「結果」「反復」と言う用語を使用している。「完成相」は、英語の *perfective* に相当し、「完結相」と呼ばれることもある。
4. 工藤(1995)では、目前に残存する結果状態を描くシテイル(例.窓が開いている)と、結果状態が残存していない、過去の経験を表すシテイル(例.彼は中国に一度行っている)とは、別に扱っている。しかし、工藤(1995)も述べているが、両者は連続的であり、分類の難しいものもある。どちらも出来事が終了した後の状態を述べているということで共通しているため、本研究ではどちらも「結果」の用法として扱う。
5. シテイルで表される反復には、次の(a)のように継続相の結果の用法の派生と考えられる反復もある。この反復は、(b) (c)からわかるように、スルではなく、シタと置き換え可能な反復である。
 - (a). 今まで彼には何度も注意している。
 - (b). *今まで彼には何度も注意する。
 - (c). 今まで彼には何度も注意した。本稿では、反復を表すスルとシテイルの違いに焦点を当てるため、このタイプの反復についてはふれていない。しかし、この結果の用法の派生の反復も、本稿で扱っている進行の用法からの派生の反復同様、背景の意味に反復事象全体の開始点と終了点をもつ反復である。
6. 「今」という時の副詞句の場合、発話時という限られた時点との結びつきが極めて強く、シテイル形式と共起するのが一般的である。一方、「最近」のように発話時を囲む前後の時間を含む表現や「今は」のように過去と対比させた現在を表す表現との共起は、後述する現在反復を表すスルも許容される。

(例) 最近、電車で学校に行きます。

引用文献

- 金水敏(2000)「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子著『時・否定と取立て』岩波書店 1-92.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- 森山新(2008, 本報告書)「認知日本語文法(Cognitive Japanese Grammar)—日本語の教材開発のために—」平成 17～19 年度科学研究費補助金研究 基盤研究(C)課題番号 17520253 研究代表 森山新 最終報告書『認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究』
- 吉川武時(1976)「現代日本語のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 155-327.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I, Theoretical Prerequisites*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1991a). *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1991b). *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II, Descriptive Application*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1999). *Grammar and Conceptualization*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2001) Cognitive linguistics, language pedagogy, and the English present tense. In M. Pütz, S. Niemeier, and R. Dirven (eds.) *Applied Cognitive Linguistics I: Theory and Language Acquisition*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter. 3-39.

みね ふゆき／東洋学園大学
mine_fuyuki@yahoo.co.jp

中国語を母語とする日本語学習者の「きっと」の意味知識

—日本語教育のために—

王 冲

要 旨

陳述副詞「きっと」は学習の初級段階で学習される項目であるが、多様な用法をもち様々な文脈に用いられ、類義語との使い分けが困難であると考えられる。また中国語を母語とする日本語学習者の母語における相当語「一定」との間に用法のズレがあり、十全な習得は難しいと推測され、決して初級で習得できる語彙であるとは言えない。したがって、本研究では認知言語学のアプローチを取り入れ、中国語を母語とする日本語学習者の「きっと」の意味知識を分析し、以下の結果がわかった。①日本語母語話者は「きっと」の推量用法をプロトタイプとしているのに対し、学習者は意志的用法をプロトタイプとしている。②学習者は「きっと」とその類義語「必ず」との意味の境界が不安定である。③学習者の「きっと」の意味知識の形成には母語中国語の転移を受けている可能性がある。最後に、教科書の「きっと」の解釈及び教師の指導の観点から、これらの結果が中国語母語話者を対象とした日本語教育へどのように応用できるかを探ってみた。

【キーワード】 習得、プロトタイプ、意味知識、母語の転移、日本語教育

1. はじめに

副詞習得の難しさは、「日常会話ではさほど不自由しない中上級学習者でも、副詞があまり習得されていない」とこれまででも多くの先行研究で指摘されてきた(北條 1982)。しかしながら、学習者がどのようなプロセスを経てその副詞に関する知識を習得するか、学習者がもっている副詞の知識はどのようなものであるか、また副詞の習得はどんな影響を受けているかなどはまだ明らかになっていないところが多い。例えば、「きっと」に関して、市川(2000)によれば、学習者は以下のような誤用をするという(括弧内のものは市川による訂正である)。

①あしたきっと (→必ず) 来ますので、この本をここにおいてΦ (→おいて) ください。

②来なくて (→来ないのなら)、きっと (→必ず) 先

生に話してください。

「きっと」は学習の初級段階で学習される項目である。先行研究によれば、「きっと」には推量、意志、依頼、確率のような多様な用法があるとされている(工藤 1982; 兪 1999; 石神 1987 など)。また、中国で一般的に使われている日本語の教科書『新編日語』『大学日語』『標準日本語』と、学習者がよく使う日中辞書『新日漢辞典』『日中辞典』における「きっと」の解釈を調べてみると、これらでは「きっと」はほとんど「一定」で訳されていることがわかった。『現代汉语八百詞』、香坂(1988)、卢(2000)などによれば中国の「一定」にも推量、意志、依頼のような多様な用法があるという。「きっと」と「一定」の多様な用法の例文をあげてみると以下の表1のようになる。

表1 「きっと」「一定」の多様な用法

用法	「きっと」	一定
推量	明日 <u>きっと</u> 雨が降るでしょう。	他 <u>一定会</u> 来。(彼は <u>きっと</u> ／ <u>必ず</u> 来るはずだ。)
意志	晩くなるかもしれないけれど、 <u>きっと</u> 行くわ。(川端康成『雪国』)	我 <u>一定</u> 照办。(私は <u>必ず</u> 決められた通りにいたします。)
依頼	私のここにいる間は、一年に一度、 <u>きっと</u> いらっしやいね。(川端康成『雪国』)	你 <u>一定要</u> 按时吃药。(必ず時間通りに薬を飲んでください。)
確率	悪いことをしていると、 <u>きっと</u> その報いはこの世で受け取るのですからね。(丹羽文雄『南国抄』)	

表1の「きっと」と「一定」の例文を見ると、中国語の「一定」の意志用法は1人称、2人称、3人称の文ともに用いられるのに対し、日本語の「きっと」の意志用法は1人称の文にしか用いられない。「一定」は否定の依頼文に用いられるのに対し、「きっと」は肯定の依頼文にしか用いられない。また王(2004)によれば、「きっと」のプロトタイプは推量用法であるのに対し、「一定」のプロトタイプは意志的用法(意志用法と依頼用法)であるという。このように、「きっと」は多様な用法をもち様々な文脈に用いられ、意味的に関連した類義語との使い分けが困難なことがあり、また学習者の母語における相当語との間に意味のズレがあることなども考えられ、十全な習得は難しいと推測される。そこで本研究では、中国語母語話者を対象に「きっと」について実験調査を行い、中国語を母語とする日本語学習者の「きっと」の意味知識を明らかにした上で、彼らを対象とした日本語教育へどのように応用できるかを探ってみることにする。

2. 調査 1: 中国語を母語とする日本語学習者は「きっと」の各用法の使用率

2.1 調査目的と調査対象

調査1では、中国語を母語とする日本語学習者(以下、学習者と省略する)の「きっと」のプロトタイプは日本語母語話者(以下、母語話者と省略する)の「きっと」のプロトタイプと相違があるかを見る。

調査対象は母語話者30名と学習者60名である。母語話者は北海道から九州までの出身で20代から60代の男女30名である。学習者は中国の各地の出身で、天津の大学で日本語を専攻している2年生、3年生の19歳から21歳の男女である。そのうち、上級者は30名(3年生)で、中級者は30名(2年生)である¹⁾。

2.2 調査方法

菅谷(2004)によれば、「自由産出法は、あるカテゴリーに属する例を産出させる方法である。プロトタイプ性は、産出の速さと頻度によって測定される。より先に想起された例、より多くの人が挙げた例ほどプロトタイプ性が高いということになる」という。そこで、本研究では自由産出法を使用し、被験者に「きっと」について「すぐに思いつく例文を10個書いてください。」という指示を与えて、調査を行った。そして、被験者によって産出された「きっと」の900個の例文を「推量」「意志」「依頼」用法に分類し、「きっと」の各用法の使用割合をパーセンテージで表した。さらに、母語話者、学習者にとって「きっと」のどの用法が最初に想起されやすいかを知るために、10個の「きっと」のうち最初に書かれた1つについて、どの用法かを調べた。

2.3 調査結果と考察

図1のグラフは母語話者、学習者の「きっと」の各用法の使用割合と「きっと」について最初に書かれた1つの用法の使用割合を示すものである。

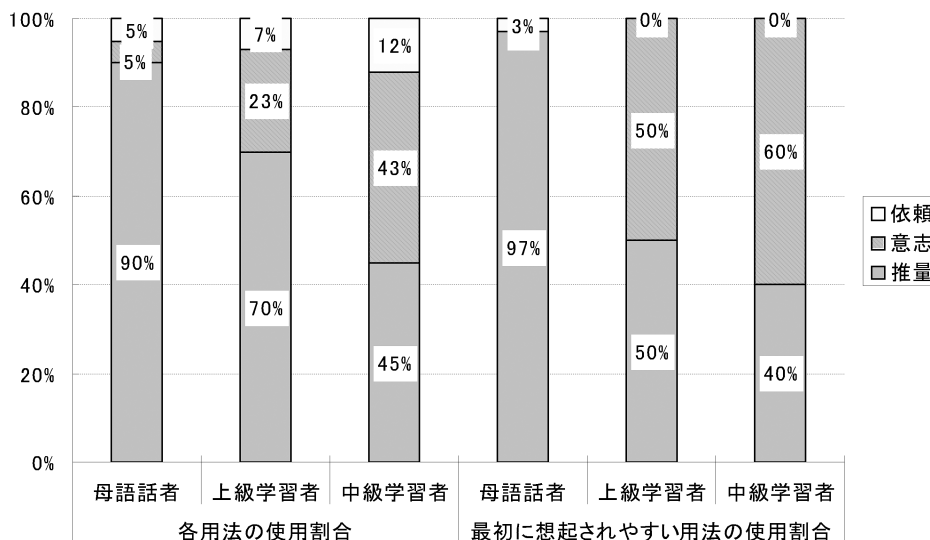


図1「きっと」の文の産出結果²⁾

図1からは、「きっと」の「各用法の使用割合」(図左)と「最初に書かれた1つの用法の使用割合」(図右)の傾向は、母語話者、上級学習者、中級学習者のそれぞれにおいてほぼ一致している。また母語話者と学習者とは「きっと」の各用法の使用割合が異なっていることがわかる。母語話者は、「きっと」に対して推量用法を90%使用しており、最初に想起される用法にも推量用法が97%を占めており、母語話者の「きっと」に対するプロトタイプは推量用法であることを示している。それに対して、学習者は推量用法を最初に想起する人と意志的用法を最初に想起する人に分かれ、プロトタイプは一定していない。上級者でも、推量用法を最初に想起する人(15人)と意志的用法を最初に想起する人(15人)の数は同じである。また、学習者は上級に進むにつれ、母語話者の各用法の使用割合に近づいていくようにも見えるが、依然として母語話者より意志的用法をかなり多く使用している。特に中級者では、意志的用法55%も使用しており、最初に想起する用法では意志的用法が60%と過半数を占めている。

以上の結果より、母語話者は「きっと」の推量用法を多く使用しているのに対し、学習者は「きっと」の意志的用法を多く使用しているということが明らかになった。また、学習者の産出した「きっと」の意志的用法の例文には、「私はきっと勉強しなければなりません」「きっと復習しなさい」のような多くの誤用が見られた。これらの誤用は中国語に訳すと、「我一定要学习」「你一定要复习」のようにほとんど「一定」を用いることができる。

学習者の単語の知識が足りない段階では、日本語に対する語感もそれほど発達していないため、日本語を学習する際、母語の翻訳で学習する癖があると予想できる。したがって、学習者は「きっと」=「一定」と捉えてしまい、「きっと」を使用する際、無意識のうちに中国語の「一定」を思い浮かべてしまうと考えられる。このように学習者が「きっと」を使用する際、中国語の「一定」を考えて、意志的用法を過剰に使用している理由としては、第1言語でプロトタイプ性が高いものが、第2言語に転移した可能性を考えることができる³。また、学習者の「きっと」の意志的用法の誤用文はほとんどの場合「必ず」とすると正しくなる。そこで次に、「きっと」の意志的用法に関連して類義語との使い分けができるかを見ることにする。

3. 調査 2: 中国語を母語とする日本語学習者は「きっと」とその類義語の使い分けができるか

3.1 調査目的と調査対象

調査2では、母語話者と学習者の意味の理解にズレがあると推測された「きっと」の意志的用法に着目し、学習者が「きっと」とその類義語「必ず」との使い分けができるかどうかを調べる。母語話者は調査1のうちの15名であり、北海道から九州までの出身で20代から60代の男女である。学習者は調査1と同じ大学で日本語を専攻している2年生、3年生の19歳から21歳の男女である。そのうち、上級者は15名(3年生)、中級者は15名(2年生)である⁴。

3.2 調査文の作成と調査方法

「きっと」の類義語である「必ず」にも「この仕事、必ず最後までやり遂げて見せるぞ!」のような「意志」用法と「出かけるときは必ず火の元を確認してください。」のような依頼用法があるが、「きっと」と「必ず」には、次のような意味・用法上の使い分けがある。意志用法に関しては、「きっと」は「必ず」ほど強い責任感を感じない。依頼用法に関しては、「必ず」には、聞き手がそうする義務を負っている意図を感じるのに対し、「きっと」は、聞き手に対する信頼、お願いの気持ちを感じる(田1998)。

本調査では、このような「きっと」の意志、依頼用法に従う調査文を適切文、これらに反する調査文を不適切文と考え、「きっと」の意志用法の適切文3項目と不適切文2項目からなる計5項目の調査文(表2)と、「きっと」の依頼用法の適切文1項目と不適切文4項目からなる計5項目の調査文(表3)とを作成した(表2・表3では不適切文に「#」を付けた)。このうち、表2の「#」がついている調査文では話し手の強い責任や義務を含意するため、「きっと」を用いることができない。また、表3の「#」がついている調査文では「そうすべきだ」という話し手の強い要求を意図するため、「きっと」を用いることができない。

しかし、全ての不適切文は「きっと」の代わりに「必ず」を用いると適切文になる。表2と表3の「#」がついていない調査文はそれぞれ「話し手の意志」と「お願いするという話し手の期待」を表すため、「きっと」を用いることができる。この調査では、これらの調査文を容認するか否かを○×で判定するように被験者に求めた。

3.4 調査2の結果と考察

表2と表3はそれぞれ意志用法と依頼用法に関する調査の結果を示したものである。また図2、図3は表2、表3をグラフに表したものである。なお、 χ^2 検定は母語話者と中級学習者または上級学習者との判定の偏りについて見たものである。

表2「意志」用法に関する調査結果⁵ ()内は%

調査文	適切と判断した母語話者の人数	適切と判断した上級学習者の人数	χ^2 の値	適切と判断した中級学習者の人数	χ^2 の値
#1A:そのミーティングなんですけど、出席しますか。B:はい、きっと出席します。	0(0)	8(53)	10.9**	12(80)	20.0**
#2 今年の夏こそきっと旅行に行きたいです。	0(0)	5(33)	6.0*	12(80)	20.0**
#3 いつも私のことをバカにしている彼をきっといつか見返して見せます。	11(73)	9(60)	n. s.	10(67)	n. s.
#4 この前の試合では負けちゃったけど、今度こそきっと勝つからね。	9(60)	9(60)	n. s.	6(40)	n. s.
#5 医者私の私を信じて。いくら難病でもきっと助けて見せるから。	9(60)	10(67)	n. s.	8(53)	n. s.

(**p<.01, *<.05)

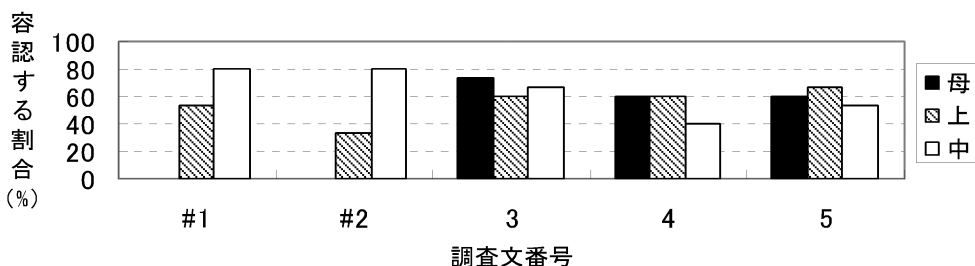


図2「きっと」の意志用法に関する調査結果

表3「依頼」用法に関する調査結果 ()内は%

調査文	適切と判断した母語話者の人数	適切と判断した上級学習者の人数	χ^2 の値	適切と判断した中級学習者の人数	χ^2 の値
#1 明日とても大切な会議があるので、きっと10時までに来てください。	0(0)	1(7)	n. s.	6(40)	7.5**
#2 使用後きっと返すこと。	0(0)	1(7)	n. s.	6(40)	7.5**
#3 会社を休む時はきっと連絡するようにしてください。	0(0)	4(27)	4.6*	6(40)	7.5**
#4 今日娘の誕生日だから、きっと早く帰ってきてね。	0(0)	8(53)	10.9**	7(47)	9.1**
#5 五時に映画館の前で待っているからね。きっと来てね。	2(13) ⁶	7(47)	4.0*	8(53)	10.2**

(**p<.01, *<.05)

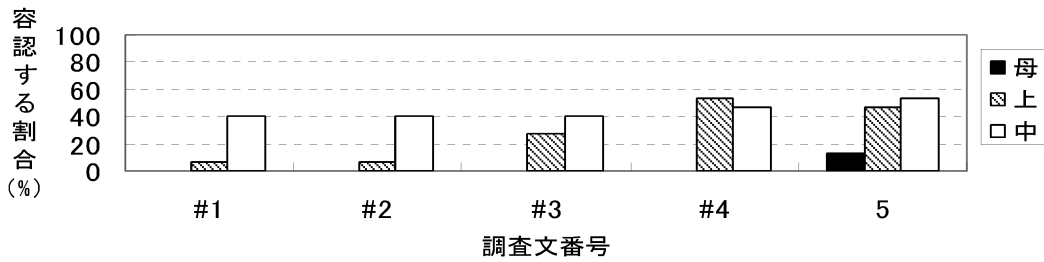


図3 「きっと」の依頼用法に関する調査結果

意志用法に関する調査文を適切文とするか非適切文とするかについて、母語話者と学習者の判定の偏りを見たところ(表2、図2)、 χ^2 検定の結果、「きっと」を用いることができる調査文3、4、5(χ^2 検定 n. s.)には有意な差が見られなかった。しかし、学習者は「きっと」を用いることができない調査文1、2を適切文と判定し(特に、中級学習者と母語話者の差は1%水準で有意)、学習者の「きっと」の容認範囲は広いことがわかる。

また、依頼用法に関する調査文を適切文とするか非適切文とするかの母語話者と学習者の判定の偏りを見たところ(表3、図3)、 χ^2 検定の結果、上級者の調査文1、2の2項目(χ^2 検定 n. s.)を除いたすべての項目で有意な差が見られた。さらに、中級学習者のすべての結果は母語話者と1%水準で有意な差が見られた。

表2、表3の結果から学習者の「きっと」の意志、依頼用法の容認範囲は母語話者より広いことがわかる。また、母語話者が不適切と判断した項目を、中級学習者はすべて適切と判断した。これは、学習者は「きっと」という言葉を知っていて、かつその用法に意志、依頼用法があることを知っていても、「きっと」と「必ず」の意味の境界は不安定であることを示している。さらに、教科書や辞書で「必ず」が「きっと」と同様に中国語の「一定」と訳されていることが多いことなどを考えると、学習者は「きっと」=「一定」=「必ず」と捉えている可能性がある。このように、学習者は「きっと」も「必ず」も「一定」と理解してしまうと、「必ず」との使い分けが難しくなり、結果として意志、依頼用法の過剰般化を起こしてしまうことになる。このように、学習者が「きっと」のプロトタイプ理解形成にあつては母語を借用した可能性を考慮することができる。

しかし、表2、と表3を項目ごとに見ると、同じ

意志や依頼の用法でも、意志用法の調査文1、2や依頼用法の調査文1、2のように学習が進むにつれて母語話者に近づいている項目もある一方、依頼用法の調査文3、4、5のように学習者レベルによる差の小さい項目もあることがわかる。このことから学習者の「きっと」の意志、依頼用法に対する理解は上級レベルでも不完全であると言える。また、「必ず」は「きっと」より義務、責任を感じるというルールは学習者にとって習得ができるかもしれないが、実際には意志、依頼用法においては「きっと」より「必ず」が使われやすいこと、つまり「必ず」と「きっと」はそれぞれ意志、依頼用法と推量用法を分担していることは学習者には気づかれていないと言えるだろう。

4. 調査3: 中国語を母語とする日本語学習者における「きっと」の意味知識の形成にはどんな要因があるか

4.1 調査目的と調査対象者

「きっと」の調査3では、中国語を母語とする日本語学習者が「きっと」を習得する際、どんな要因があるかについて詳しく調べてみる。調査対象者は「きっと」の調査2と同一である。

4.2 調査文の作成と調査方法

王(2004)によれば、「きっと」の意志用法は現在肯定形を表す1人称の文脈にのみ用いることができ、「否定」「過去」「2人称」「3人称」を表す文脈には用いることができないのに対し、中国語の「一定」は使用範囲が広く、人称、時制、述語のタイプなどには制約がないことを示した。これに従い、この制約に関する理解を調べるため、「否定」「過去」「2人称」「3人称」の文における「意志」用法の調査文4項目と「否定」的な「依頼」用法の調査文1項目の計5項目で調査文を作成した。これらの調査文はす

べて「きっと」を用いることができないが、中国語に訳すと、以下のようにそれぞれ「一定」を用いることができる。

#1 昨日私はきっと動物園に行きたかったが、彼は一緒に行ってくれなかったです。

昨天我一定要去动物园，可是他不陪我一起去。

#2 君がもしきっとその本が読みたいのなら、借りてきてあげよう。

如果你一定要看那本书，我可以替你去借。

#3 私はきっと行かない。君がこれ以上言っても無理だ。

我一定不去，你再说也没用。

#4 彼がきっと歌おうとしなかったら、無理やりさせないでよ。

他一定不唱，就不要勉强了。

#5 このボタンを押すと、機械が全部とまります。きっと触らないでください。

一按这个按钮所有的机器就会停了，一定不要碰。

そして、これらの調査文を容認するか否かを○×で判定するように被験者に求めた。

4.3 調査3の結果と考察

表4と図4は母語の転移があるかに関する調査結果である。

表4 母語の転移があるかに関する調査結果

() 内は%

調査文	適切と判断した母語話者の人数	適切と判断した上級学習者の人数	χ^2 の値	適切と判断した中級学習者の人数	χ^2 の値
#1 昨日私は <u>きっと</u> 動物園に行きたかったが、彼は一緒に行ってくれなかったです。	0 (0)	4 (27)	4.6*	8 (53)	10.9**
#2 君がもし <u>きっと</u> その本が読みたいのなら、借りてきてあげよう。	0 (0)	6 (40)	7.5**	10 (67)	15.0**
#3 私は <u>きっと</u> 行かない。君がこれ以上言っても無理だ。	0 (0)	8 (53)	10.9**	9 (60)	12.9**
#4 彼が <u>きっと</u> 歌おうとしなかったら、無理やりさせないでよ。	0 (0)	5 (33)	6.0*	10 (67)	15.0**
#5 このボタンを押すと、機械が全部とまります。 <u>きっと</u> 触らないでください。	0 (0)	4 (27)	4.6*	4 (27)	4.6*

(**p<.01, *p<.05)

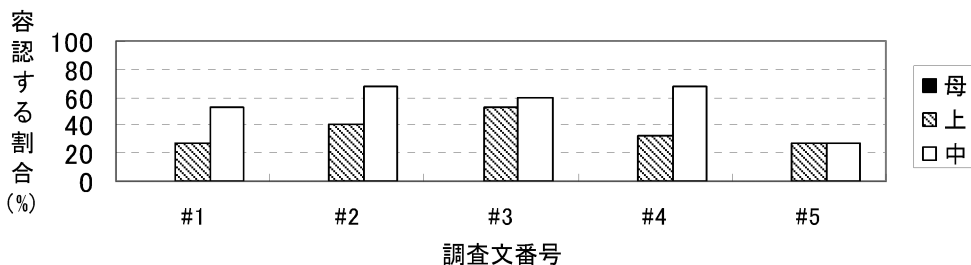


図4 母語の転移があるかに関する調査結果

「きっと」の調査3では母語話者はすべての項目を非適切文と判定したにもかかわらず、学習者はほとんどの項目において容認度が高かった。母語話者と学習者の判定の偏りを見たところ、 χ^2 検定の結果、

すべての項目において有意な差が見られた。

調査3の各項目は日本語では「きっと」を用いることができないが、中国語に訳すとすべて「一定」を用いることができることから、学習者は中国語の

「一定」を頭に浮かべて、これらの項目を容認している可能性がある。このことから、学習者は「きっと」に意志、依頼用法があることについては知っているが、細かい制約があることは十分に理解しておらず、中国語の「一定」の転移を受けている可能性が考えられる。母語話者の場合は日常生活の中で自然に語感を身につけていくが、中国にいる学習者の場合、自然な日本語と接する機会が少なく、これらの用法の習得を促すには、自然な会話などによって具体的な場면을提示しながら説明するというような、何らかの指導が必要であると思われる。

5. まとめ

以上では、中国語を母語とする日本語学習者における「きっと」の意味知識に関する理解形成について分析した。その結果をまとめると、次のようになる。

①学習者の「きっと」の習得は学習の進展に伴って進んでいくにもかかわらず、日本語母語話者にとっては推量用法が「きっと」のプロトタイプであるのに対し、多くの学習者にとっては意志的用法が「きっと」のプロトタイプとみなされている。

②学習者は「きっと」と「必ず」の役割分担を知らず、どちらも中国語の「一定」と同じと考えているため、「きっと」の意志、依頼用法の適用範囲に関する知識が不足、あるいは類義語「必ず」との意味の境界が不安定である。

③「きっと」の依頼、意志用法の習得には母語中国語の「一定」からの負の転移を受けている可能性がある。

しかし、母語中国語の「一定」からの転移があるという可能性を裏付けるためには、他言語を母語とする日本語学習者の「きっと」の使用状況を調査する必要がある。しかし、このことは中国語を母語とする日本語学習者である筆者自身の経験にもよく当てはまっており、母語の転移の可能性があると考えられる。この点については今後さらに検討していきたい。

6. 日本語教育への示唆

このような結果はどうか日本語教育に取り入れるべきかを考えてみたい。まず学習者が使用している日本語教科書『新編日語』⁷を見てみる。

『新編日語』は中国語母語話者を対象にした教材

であるため、説明は中国語でなされている。「きっと」は第1冊第12課(p.212)で初めて導入され(一年生前期)、「元旦は大変な人出で、バスがきっと混むでしょう。」という推量用法を表す文が挙げられている。筆者はそれぞれ二つのクラスで『きっと』について例文の一つ書いてくださいと宿題を出した。クラス1(20人)では「きっと」の説明を何もしていない。クラス2(20人)では「きっと」は推量を表し、よく「だろう」「と思う」など推量を表す文末表現と一緒に使うと強調して説明した。翌日に回収した宿題を見てみると、クラス1の20個の「きっと」の例文には推量用法は4個があり、意志的用法は16個もあるのに対し、クラス2の20個の例文は全て推量用法である。教科書では「きっと」の推量用法の例文が提示されているにもかかわらず、クラス1の学習者は意志的用法を多く使用している。このため、教科書の導入方法は学習者の「きっと」の意味知識の形成に対する決定的な要因とはなっていないと思える。しかし、教科書の単語表に書かれている「きっと」を見ると、中国語の「一定」という訳語が与えられている。王(2004)によれば、中国語の「一定」には推量用法、意志用法、依頼用法がある。中国語母語話者は「一定」の意志的用法を多く使用しているという。学習者の単語の知識が足りない段階では、日本語に対する語感もそれほど発達していないため、日本語を学習する際、母語の翻訳で学習する癖があると予想できる。したがって、クラス1の学習者は「きっと」=「一定」と捉えてしまい、「きっと」を使用する際、無意識のうちに中国語の「一定」を思い浮かべてしまうと考えられる。これが事実であるとする、中国人学習者向けの教科書には、中国語の訳「一定」だけではなく、さらに「きっと」は推量を表すというような説明および「きっと」に関する例文をいくつか書いたほうが学習者の「きっと」への理解の誤解はすくなくなることに繋がるだろう。

次は教師の指導を見てみよう。クラス2では「きっと」は推量を表すことと、文末の共起について説明した。その翌日の学習効果はよかったとわかった。しかし、この効果はいつまで続くか、あるいは、この説明で学習者は「きっと」についての正しい理解を定着できるだろうか。また、筆者はクラス1の宿題を回収した日に、「きっと」について例文を挙げながら以下のように改めて説明した。

- ①「きっと」はよく中国語の「一定」と訳されること
- ②「きっと」は中国語の「一定」とプロトタイプが違うこと
- ③「きっと」の各用法と「一定」の相違
- ④「きっと」と「必ず」は役割分担をすること

そして、一年後、この二つのクラスの学習者は2年生の前期の時、授業で「期末テストの復習方法」というテーマについてみんなで30分のディスカッションをした。クラス1では「よく暗誦すればきっと大丈夫でしょう」「普段の授業でちゃんと聞けばきっと心配ないと思います」「テストの前の1週間から頑張ればきっと合格すると思います」のような「きっと」の推量用法の例文が6つ使用されていた。クラス2では、「自信があればきっと合格すると思います」のような推量用法の例文が1つと「普段からきっと真面目に勉強しなければなりません」「私はきっと90点以上を取りたいです」「テストの前の最後の授業をきっとサボらないでください」のような意志的用法が6つ使用されていた。このことから、クラス2は「きっと」の共起表現に関する説明を受けて、最初は覚えていたが、時間が経つにつれて定着できなかったことがわかる。なぜクラス2は「きっと」の意味用法の理解を定着できなかっただろう。

第二言語習得においては2つのプロセスがあると考えられる。最初のプロセスでは学習者は学習した言語知識をモニターとして用いて、自分の発話や作文をチェックする。この段階での目標言語表出は「母語から目標言語への言語的な変換作業」が中心である(森山 2001)。次のプロセスでは学習者は学習した言語知識が自動化される。このプロセスでの目標言語表出は「認知から言語への直接の変換作業」となる(森山 2001)。最初のプロセスにおいては、母語から目標言語への言語的な変換過程であるため、目標言語の特徴を学習し、それをモニターとして用いることができれば、母語の転移により起きる誤用を減らすことができる。しかし、次のプロセスに入ると、両言語間の変換ではなく、学習者のカテゴリー体系がそのまま第2言語の表出に用いられることになり、もし母語「一定」の意味構造がそのまま用いられてしまえば、それがそのまま目標言語に変換されることになる。学習者は「きっと」を学習した際、母語「一定」との意味構造の違いを注意すれば、正しく使用できるかもしれないが、その「きっと」

の意味構造が学習者の中で定着化しないまま、自動化が進むと母語の「一定」の意味構造からの変換が行われ、その結果、クラス2の学習者は2年生になったにもかかわらず、正しく「きっと」を使用できなくなっていたと考えられる。クラス1での追加の説明は学習者に「きっと」の意味構造が母語の「一定」とは異なっていることを気づかせたため、学習者は正しく「きっと」を使用することができたと考えられる。

したがって、第二言語習得にあたっては、新しい言語体系と共に新しい認知的体系を習得しなければならない。「きっと」の場合、これまで母語の「一定」の中で慣習的に意志用法が活性化されて多く用いていたのを、推量用法が活性化されるように慣習化しなければならない。このことが遅れてしまい、「認知→目標言語」という習得プロセスに入ってしまうと、母語の認知体系から変換が行われ、その結果、「きっと」の意志用法が多く使われ、学習者も持っている「きっと」の言語知識は化石化を引き起こすこととなる。このような化石化を防ぐには、学習の最初の段階から、「きっと」という言葉の背景にある認知体系、いわゆる「きっと」の認知的な意味構造を習得させなければならない。しかし、どのように「きっと」の認知的な意味構造を提示したほうがいいのか。スキーマは、人間の生活経験などに基づいて抽出された共通する意味であるため、「きっと」の習得にあたって、「きっと」の様々な言語的事例に触れることがまず最も大切なことであろう。それらの具体的事例に対し、構造を持った全体として見つめ、そこからスキーマを抽出し、この抽象的なスキーマはどのような経路を経て、具体化されたのかを理解させること、具体的な用法の中の最も活性化されやすい用法を理解して慣習化を通じて定着させることも重要である。また、日本語の「きっと」のスキーマと中国語の「一定」が似ているため、母語スキーマが借用されてしまう危険性があり、注意すべきである。具体的に言うと、「きっと」の指導において、

- ①「きっと」と中国語の「一定」のプロトタイプの違いを示すこと
- ②「きっと」と中国語の「一定」の用法の違い及び使用範囲を示すこと
- ③「きっと」と「必ず」の役割分担を説明すること
- ④「きっと」の具体的な例文を示した上で、文脈を

理解させ、さらに「きっと」の共起条件、共起しない条件を説明すること

などに注意して指導すれば、より一層の学習効果が期待される。

本研究では中国語を母語とする日本語学習者の「きっと」の意味知識を明らかにし、教科書の「きっと」に関する解釈の必要性と、教師は指導する際、「きっと」と中国語の「一定」の意味構造の違いを明示したほうがより効果的であるという二点を主張した。今後、さらに、中国にいる日本語学習者に「きっと」と「一定」の違いを明示する際に、ボトムアップ式のほうがいいか、それともトップダウン式のほうがいいかを追求したい。

注

1. 本研究での上級学習者は、3年生で日本語能力試験1級の取得者である。中級者は2年生で日本語能力試験2級の未取得者である。
 2. 本研究の調査1の日本語母語話者と中国人学習者の「きっと」の産出文にも「確率」用法は現れなかった。
 3. このようなプロトタイプ性とL1転移、L2習得との関係がKellweman (1979)、Kellerman (1986)、Shirai (1995)などで議論されている。
 4. この被験者は調査1とは異なる。本調査の調査時期は調査先の大学の期末テストと重なり、被験者を集めるのが困難であった。また、被験者の負担を減らすため、調査2、3は調査1とは異なる15人の学習者で行った。しかし、いずれも大学、学年、専攻に関しては同じである。また、調査結果の統計学的分析からは、学習者と母語話者の間には明らかな有意差も見られた。これらのことから、サンプルとしては問題がないものと考えられる。また、調査2、3では、中国人日本語学習者と人数を揃えるため、日本語母語話者も15人に絞った。
 5. 表2、3、4の「**p<.01, *p<.05」は、それぞれ χ^2 検定の結果で母語話者と学習者の判定の偏りが1%水準または5%水準で有意な差があることを表す。「n. s.」は、 χ^2 検定の結果では母語話者と学習者の判定の偏りには有意差が見られなかったことを表す。
 6. 「五時に映画館の前で待っているからね。きっと来てね。」という文に関して、母語話者15人中13人が不適切と判断していた。これはこの文を「お願い、来てね、という話し手の期待」ではなく、「来るべきだという話し手の要求」として読み取ったためであると考えられる。あるいは、時代の変化で最近の人は不適切と考えるためであると考えられる。本調査では本文中に述べた理由からこの文を適切文として扱った。
 7. 中国では、いくつかの有力大学がシラバス準拠の教材をそれぞれ作成しており、その他の大学はそれを利用することが多い。日本語専攻で広く使われている教材として
- は、『新編日語』全4冊(上海外国語大学)、『新編基礎日語』(北京大学)などがある(国際交流基金のホームページより)。本研究の調査対象である学習者は使用している教科書が『新編日語』であることから、本研究ではこの教科書を調べることにした。

参考文献

- 石神照雄(1987)「陳述副詞の修飾」寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人(編)『ケーススタディ日本文法』おうふう96-101
- 市川保子(2000)『続・日本語誤用例文小辞典—接続詞・副詞—』凡人社
- 兪曉明(1999)『現代日本語副詞研究』大連理工大学出版社
- 王冲(2004)「日本語陳述副詞「きっと」と中国語語気副詞“一定”との対照研究—日本語教育における陳述副詞「きっと」の指導のために—」『お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢』7 325-334
- 北條淳子(1982)「日本語学習の中級段階における副詞の問題」『木村宗男先生記念論文集』早稲田大学語学教育研究所165-181
- 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所報告71 研究報告集3』45-92 秀英出版
- 香坂順一(1988)『初学者も使える中国語虚詞辞典』光生館
- 小林典子(1992)「「必ず・確かに・確か・きっと・ぜひ」の意味分析」『筑波大学留学生センター—日本語教育論集』7 1-17
- 菅谷奈津恵(2004)「プロトタイプ理論と第二言語としての日本語の習得」『第二言語としての日本語の習得研究』7 121-140
- 田忠魁・泉原省二・金相順(1998)『類義語使い分け辞典』研究社出版
- 松本曜(2003)『認知意味論 シリーズ認知言語学入門(第3巻)』大修館書店
- 森山新(2001)「中間言語の化石化と第二言語習得のメカニズム」『世界の日本語教育』11 55-68
- 卢福波(2000)《对外汉语常用词与对比例释》北京语言文化大学出版社
- 吕叔湘(1980)《现代汉语八百词》北京商务印书馆
- Kellerman E. (1979) Transfer and non-transfer: where are we now? *Studies in Second Language Acquisition* 2 37-57
- Kellerman, E. (1986) An eye for an eye: crosslinguistic constraints on the development of the L2 lexicon. In E. Kellerman & M. Sharwood Smith. (eds), *Cross-linguistic influence in second language*

acquisition. Oxford: Pergamon.

Shirai, Y. (1995) The acquisition of the basic verb PUT
by Japanese EFL learners: Prototype and Transfer

『語学教育研究論集』12:61-92 大東文化大学語学教育研究所

ワン チョン / 大連理工大学外国語学院日本語学科
wangchdlut@gmail.com

プロトタイプ理論を用いた多義語分析と語彙習得 —韓国語母語話者の「～出す」習得を中心に—

白 以然

要 旨

認知言語学では、多義語を成す意味は、プロトタイプの意味から周辺的な意味へと拡張され、一連の意味の間にはなんらかの関係があるという。こういった言葉の内部構造が第2言語習得にどのように影響を与えるかに関しても様々な研究がなされてきた。Kellerman(1979)は母語でプロトタイプに近いものは目標言語にそのまま転移される可能性が高いことを明らかにしている。Shirai(1995)は「put」のように基本的な英語動詞に関する学習者の認識を調査し、様々な項目において母語話者とは違うことを明らかにしているが、ここで大きい変数となったのが母語の語彙と目標言語の当該語のプロトタイプ性であった。本稿では、複合動詞「～出す」を対象にして韓国語母語話者の意識を調査した。その結果、学習者は母語の対応語の意味を「～出す」に適用する傾向が見られた。しかし、学習者が母語直訳のみを頼りに、母語の概念をそのまま目標言語に適用して判断を下したのではなかった。「～出す」の様々な意味の中で母語のプロトタイプに近いと思われる項目の場合、学習者の受容度はより高くなっていたが、ここには母語の「プロトタイプ性」と「～出す」の意味構造という2つの要因が絡んでいると思われる。母語で拡張された特別な意味として考えられる項目の受容度はそこまで高くなかった。学習者の判断は母語知識の選択的な使用、日本語に対する不完全な知識、またその語彙に関する学習経験に影響され、このように様々な要素が介入するので、母語話者とは違う意味領域を持つようになると思う。

【キーワード】意味分析、プロトタイプ、第2言語習得、複合動詞「～出す」

1. はじめに

上級の学習者においても複合動詞(前項動詞の連用形+後項動詞)は難しい項目として挙げられる。前項動詞(以下 V1)と後項動詞(以下 V2)の結合様式や意味の派生が一律ではないからである。例えば、「飛び上がる」は「飛んで上がる」としてそのまま解釈できるが、「言い忘れる」は「言うことを忘れる」になる等、「複合動詞」といっても V1 と V2 の関係と構造は異なる。また、本動詞としては使われなかった新しい意味が複合動詞の用法としては派生、使われることもある。本稿では複合動詞のうち、頻度の高い「～出す」を認知言語学的な観点から意味分析をして、それが韓国語を母語とする学習者の意味習得にどのように影響するかを見る。

2. プロトタイプ理論と「～出す」の意味構造

2.1 プロトタイプ理論と習得

2.1.1 プロトタイプ理論、多義語分析

プロトタイプ理論は、1つのカテゴリーの成員間の均質的な位置づけとカテゴリー間の絶対的な境界を想定する古典的カテゴリー理論への反作用として

出発した。1つのカテゴリーは明確な境界と各成員間の同等な位置づけを持つことではなく、典型的な例を中心として拡張される内部構造を成しているということである。

このような理論は多義語分析にも有用な示唆を与える。辞書のように多義語の様々な意味を羅列するだけではなく、プロトタイプの意味を中心とした意味間のつながりを分析し、多義語の意味構造を究明することである。レイコフ(1987)などはこのような多義語の意味拡張は恣意的に行われることではなく、人間の認知能力、人間が世界を把握する様々な仕組みと関連があるという。レイコフがあげた代表的な意味拡張の原理は3つある。類似性に基づいたメタファー(比喩)、隣接しているものを持つてあるものを指すメトニミー、人間の繰り返された経験に基づいたイメージ・スキーマである。

① 彼女は職場の花だ。

② 遠い昔

①の場合、「目に付く美しいもの」という意味が植物の「花」と「彼女」の共通点をなしているメタファーの例である。②の場合、空間的な距離を表わす

言葉が時間を表わすことに使われている。より認知しやすい空間的な概念を借りて、目には見えない時間概念を表わすのは様々な言語で見られる現象でもある。

③ 漱石を読む。(著者⇒本)

ここでは「漱石」という人間が彼の書いた「本」を表わしている。このように「共通した要素」を持っているわけではないが、隣接性に基づいたメトニミー表現は日常の言語生活でよく見かけられる。

④ He is in a living room. (物理的な空間)

⑤ He is in a good mood. (心理的な空間)

in は、もともと何か物理的な空間の中にある状態を表わす。この容器のようなものが繰り返された体験によって抽象的な「イメージ」を形成し、心理的な概念まで表現するようになったのである。

このように人間の心の作用によって、言葉は意味を拡張してゆき、多義語を形成するようになる。では、多義語の内部構造およびプロトタイプ性は第2言語(以下 L2)の語彙習得とどのような関連があるかをみよう。

2.1.2 プロトタイプ理論、L2 習得

Kellerman(1979)はオランダの英語学習者に母語 breken (英語の break にあたる)の入った様々な文を見せ、それが英語の break に翻訳できるかを聞いた。その結果、被験者たちは比較的典型的な例に関しては直訳できると答えた。即ち、母語のプロトタイプに近い「He broke his leg」「She broke his heart」のような項目(無標)は転移可能性が高いことがわかったのである。反面、「Some workers have broken the strike」のような文は翻訳できないという答えが多かったので、転移可能性が低いと思われる。このように Kellerman(1979)は母語文を対象に多義語の内部構造が L2 の語彙の意味習得に影響を与えられる可能性を探求した。

これに対して、Shirai(1995)は被験者の L2 に当たる英語文を用いて実験を行った。被験者は日本語を母語とする英語学習者で、「put」を使った英文 20 項目を見てその文が適切かどうかを判定した。その結果、L1・L2 共にプロトタイプの高受容度が高かった。これに対し、L1・L2 でプロトタイプではないものは受容度が低かった。また、母語の「置く」にはない項目の場合、L2 のプロトタイプに近い項目の場合は習得が早く、L2 の非プロトタイプ的な項目は習得しにくいことがわかった。これを整

理すれば、L1 のプロトタイプ性は転移可能性と関連し、L2 のプロトタイプ性は習得可能性と関連することとなる。

2.2 「～出す」意味

姫野(1999)によると、「～出す」の意味は大きく3つに分けられる。①具体的なモノの「外部への移動」(ex. 追い出す、取り出す)、②隠れていたものが姿を現す、無から有が生み出される「顕在化」(ex. 思い出す、作り出す)、③アスペクトとして、動作や作用の「開始」(ex. 雨が降り出す)がその3つである。

このうち、具体的で物理的な移動の意味を表す①がプロトタイプであると思われる。そして、何かの中から外のほうに出る物理的な移動がイメージ・スキーマ変換によって、なかったものが生じた、できたという「顕在化」の意味になることが想定できる。これがさらに抽象化されると、文文化して「開始」のアスペクトになることである。なかった事態の出現がものごとの「始まり」という意味を持つようになったのである。これは、空間的な概念を借りて目には見えない時間を表わす例でもある。

一方、日本語と同じく膠着語として分類される韓国語にも2つの動詞の結合による複合動詞があり、「～出す」に当たる、外への移動を表す複合動詞「～내다(～naida)」が存在する。李(1996)は日本語の「～出す」と韓国語の「～내다」の意味の対照分析を行い、姫野(1999)と同じく両語の意味を3つに分けて対照している。両語の共通点はまず、基本義が「ものの移動」であり、それに加え「表出」の意味も持つことが挙げられる。ここで「表出」とは姫野(1999)の「顕在化」とほとんど同じ概念である。即ち、両語共に、「外への移動」という具体的に物理的な動作を、目に見えない抽象的なものごとの出現・創出にまで拡張して使っているのである。しかし、3番目の意味になると両語の差が出る。文文化したアスペクト用法として日本語の「～出す」が「開始」を表すのに対して、韓国語の「～내다」はその反対とも言える「完遂」を表わす。

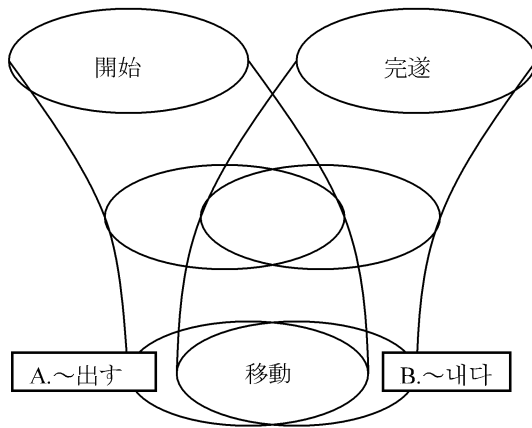


図1 「~出す」と「~내다」

このような差は基本的に同様の現象を異なった心的視点から眺めているから起こることだと思われる。もし、「外への移動」をその移動が向かっている外部から眺めるなら、その移動によってなかった事態が発生(開始)したと把握できる。これに対し、何かを外に移動することを中側から眺めるなら、ある事態が自分の領域から除去される、「完遂」・「終わり」となる。では、このような両語の差は学習者の認識にどのような影響を与えられるか。

3. 韓国語を母語とする学習者の「~出す」認識

3.1 調査の概要

白(2007)は韓国語を母語とする日本語学習者が持っている「~出す」の受容範囲を調査した。調査は文判断テストで、その文を読んだ自分の感じを「自然である—まあまあ自然である—あまり自然ではない—不自然である」の4段階にチェックしてもらった。調査の対象となった文は、「~出す」を使うことが自然な文と不自然な文が混ざっていた。自然な11項目は「移動」「顕在化」など両言語の共通の意味である。不自然な11項目は、韓国語の「~내다」のみが使われる「完遂」の意味であるので、全項目が韓国語の直訳では自然な文となる。調査は日本語上級の韓国人学習者64名を対象に行い、参考として日本語母語話者36名にも同じ内容の調査をした。

まず、被験者の答えを、自然(+2)、まあまあ自然(+1)、あまり自然ではない(-1)、不自然(-2)で数値化し、母語話者・学習者の平均を出してみた。「自然」予想11項目と「不自然」予想11項目を分

けて母語話者と学習者の平均値をグラフ化するとく図2>のようになる。

<図2>が示すように母語話者の場合、自然な文と不自然な文が明確に分けられているのに対して、学習者は自然と不自然の判断がそれほどはっきりしていない。特に不自然が予想された項目についての抵抗感はそのままで目立たず、むしろ「自然」だと解していることがわかる。これは、今井(1993)と松田(2004)の学習者を対象にした受容度実験でも同様であったが、聞いたことのない間違っただとしても、学習者はその段階で自分が持っている語彙知識から自分なりに意味の拡張を行って判断するためだと思われる。特に今回の調査の場合、不自然な項目がすべて母語直訳では自然な範疇に入るの自然と受け入れた可能性が高い。

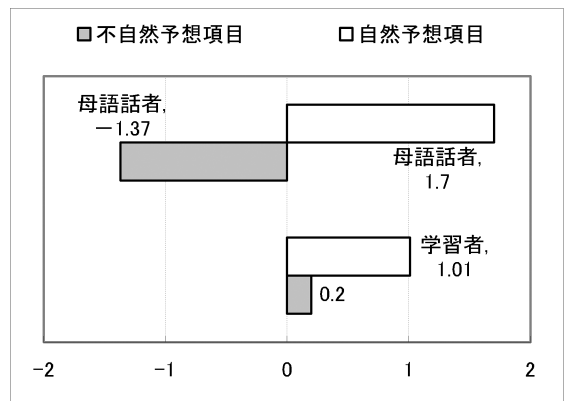


図2 母語話者と学習者の平均

しかし、学習者は母語のみを頼りに判断を下したのではなかった。項目によって母語話者に近い判断を下すものもあった。では、どのような項目で学習者と母語話者の差が目立つかをみるため、4つの答えを2分割し、「自然」と「まあまあ自然」は「受容」、「あまり自然ではない」、「不自然」は「非受容」として、それぞれ被験者の割合を百分率で表してみた。

3.2 項目別の考察

まず、「非受容」が予想された11項目をみると、母語話者はほとんど受容していないが、学習者は平均52.4%、項目によって21%から90%までの受容度を示した。

(1) 「10年もその秘密を守り出した。」(21%受容)

(2) 「大変な仕事だったが、一人で済み出した。」
(48%受容)

(3) 「これで庭の雑草は全部抜き出したね。」
(90%受容)

同じく日本語では不自然であるとしても、(1)は(3)より受容度が低く、母語話者に近い判断を下している。これは、日本語では「10年もその秘密を守り通した」というべき文であるが、韓国語ではこういった場合、強い意志を伴った「完遂」の意味として「(지켜)내다」が用いられ、正文となる。この文を正しいと答えた被験者は、このような母語の「完遂」の意味を「～出す」で表現することを自然と感じていたと思われる。しかし、母語の直訳としては成立するといっても、より多くの学習者は「非受容」を選んでいった。母語で可能な表現がすべて日本語に直訳できるわけではないという意識を持っていると解釈することができる。すなわち、母語でプロトタイプではない有標な項目は直訳できないと意識しているのである。(2)の場合、強い「意志」がある上、ある事態に対する心的「突破」のイメージが強く感じられたので、静的な(1)よりは「～出す」との関連性が見出されたのではないかと思われる。

学習者の受容度が90%に及んだ(3)は「雑草を抜く」動作と「庭の雑草を抜く動作が終わった」の2つの意味が重なっており、韓国語においては、この「移動」と「完遂」の結合が自然である(뽑아내다)。「～내다」の場合、自分の領域から何か「出す」、または「なくす」行動と、その行動が完全に終わったことを同時に示す場合が多く、その際、「～내다」が「移動」か「完遂」かは曖昧である。

このように純粋な動作の「完遂」のみを表す意味で用いられた「～出す」に比べ、「外に出す動作を完遂する」という、移動と完遂の両方の意味を含んだ意味で用いられた「～出す」のほうが、学習者の受容度は高かった。これはL1の「完遂」の意味は、いわゆる「有標」として意識されるが、「移動」の意味が入ることで、プロトタイプの意味として捉えられ、有標性が緩和されたからだと推測される。

一方、「移動」と「顕在化」の「～出す」を含んだ正文の場合、学習者の平均も母語話者より低いものの、79.5%でかなり高いが、項目によってばらつきがあった。

(4) 「『ちょっと失礼します』と言うなり会議室を飛び出した。」(92%)

(5) 「口座から必要なお金を引き出す。」(89%)

(6) 「その作戦を考え出したのは花子だった。」
(75%)

(7) 「やっと実の親を探し出すことができた。」
(75%)

(4)、(5)のような「具体的なものの移動」が「顕在化」の意味をもっている文より相対的に高い受容度を示す傾向があった。これは、日本語そのままでも、韓国語直訳でも、物理的な動力による具体的な対象の移動が想定されている基本的な意味ともいえる。このようなプロトタイプの意味は何の違和感もなく、そのまま第2言語に転移させたと思われる。また、日本語の「～出す」の意味から考えても、こうした「～出す」は「具体的な移動」の意味が含まれ、「V1して外に出した」の意味である。したがって、V1とV2の意味をそのまま解釈しても、全体の意味の推測が困難ではなかったと思われる。

これが「顕在化」の意味になると少し受容度が下がっていた。もちろん、「顕在化」のすべて受容度が低かったわけではない。「つらかった時のことは思い出したくもない」(95%受容)の場合、「よく使われる表現である」、「熟語だから」自然であるという答えが見受けられた。即ち、母語直訳「생각해내다(思う+出す)」を思い浮かべたり、「思う+出す」として意味を推測するよりは、1つの言葉として覚えていたのである。これは「思い出す」が普段、初級のテキストより導入される言葉で、「～出す」のうち、もっとも学習者が接した可能性の高い項目であることがその原因であると思われる。

4. まとめ

語彙を習得するという事は、その語が含む様々な意味を1つのカテゴリーとして把握し、他の語彙(カテゴリー)と適切に使い分けできるようになることであると言える。母語話者の場合、長い間、その言語に接した経験から自然にその語彙のプロトタイプの意味から周辺的なところまで意味の拡張が行われるが、学習者には、そのような自然な拡張が行われにくく、すでに形成されている母語の意味領域の影響を受ける。実際、学習者は判断において、母語知識を頼りにすることがあった。受容の理由を「韓国語(直訳)で自然だから」と答えた人がいれば、

「~내다」の意味領域をそのまま「~出す」に転移して、「『完遂』と『可能』の意味だから『~出す』は自然」と答えた被験者もいた。また、不自然の理由においても「無理やり韓国語を訳した感じだから不自然」と言って、母語の意味を意識しながら答えたことが窺える。

しかし、学習者の判断には母語直訳以外にも様々な要因が絡んでいた。母語において基本的で、具体的な意味(移動)を含んでいる場合、学習者の受容度は高くなる傾向があったのである。Kellerman(1979)は言語間の距離が近いほど、母語で無標な(プロトタイプ的な)項目のほど、L2への転移可能性が高いといった。Shirai(1995)は、母語でプロトタイプに近い意味は転移可能性が高く、L2でプロトタイプに近い意味は習得しやすい傾向があるという。母語の「プロトタイプ性」とL2である日本語の意味構造によって習得の難易度と母語転移の度合いが決められるということである。今回の実験の結果はそのような見地から解釈できる。

また、このような受容度実験においては学習者の個別例に対する親密度も重要な変数となる。Tanaka & Abe(1984)が「言葉の意味転移は根強い現象」と言いながらも、学習者の判断は学習経験、インプットなど個別のケースによって制限される場合が多いと述べているのもそのためである。しかし、学習者は見たことのない表現であっても、自分なりの基準によって判断を下して受け入れることがあった。「済み出す」など学習者が接した経験のないはずの表現であるにもかかわらず、半分くらいの学習者がこれら項目を受容していたのである。学習者の判断基準はL1知識の選択的な使用、L2に対する不

完全な知識、その語彙に関する学習経験から形成され、このように様々な要素が介入するので、母語話者とは違う意味領域を持つようになると思われる。

参考文献

- 李 暉洙 (1996) 「日韓両語における複合動詞「-出す」と「-내다」の対照研究—本動詞との関連を中心に—」『日本語教育』89 pp.76-78
- 今井むつみ (1993) 「外国語学習者の語彙学習における問題点」『教育心理学研究』41 pp.243-252
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究』ひつじ書房
- 白以然 (2007) 「韓国語母語話者の複合動詞『~出す』の習得」『世界の日本語教育』17号 pp.79-92
- Kellerman, E. 1979 Transfer and non-transfer: where we are now. *Studies in second language acquisition*2, pp.37-59
- Lakoff, G. 1987 *Women, fire, and dangerous things—What categories reveal about mind, the University of Chicago* (『認知意味論』(1993)池上、河上 他訳紀伊国屋書店)
- Shirai, Y. 1995 the acquisition of the basic verb Put by Japanese EFL learners: prototype and transfer, 『語学教育研究』12 pp.61-92, 大東文化大学
- Tanaka, S. and Abe, H. 1984 Conditions on interlingual semantic transfer. *On TESOL '84. A Brave New World for TESOL*, Larson, P. Judd, E.L. and Messerschmitt, D.S. (eds.), pp.101-120

べく いよん／お茶の水女子大学大学院 国際日本学専攻
baekiyun@yahoo.co.jp

メタファーとメトニミーの定義および メトニミーとシネクドキについての一考察

大澤 理英

要 旨

本論文では、メトニミーとメタファーの定義と、生産者・生産物および全体・部分、類・種それぞれの関係に基づく表現について新たな考察を述べる。まず、生産者と生産物の関係に基づく表現には、メトニミーだけでなくシネクドキ的な用法もある。また、全体と部分の関係に基づく比喩表現はメトニミーに含まれると考えられるが、シネクドキと呼ばれる類と種の関係はそれらと区別される。しかし、全体と部分の関係が「現実世界における包含関係」であり、これに対して類と種の関係は「概念体系における包含関係」であるという従来の説明だけでは納得が得られない。そこで、本考察では類と種の関係がプロトタイプ理論で説明されることを再確認し、語用論的な発話動機についての説明を加え、類と種の関係に基づく表現がメトニミー的比喩表現とは異なる概念レベルに基づくものであり、認知的な前提も異なっているものであることを改めて主張する。

【キーワード】メトニミー、 パートニミー、 シネクドキ、 全体と部分、 生産者と生産物

1. メトニミーとメタファー

1.1. メトニミーとメタファーの研究

本研究で用いるメトニミー(換喩、metonymy)・メタファー(隠喩、比喩、metaphor)とは、アリストテレスの「修辞学(rethoric、弁論術)」に由来するような文体論にまつわる比喩的な言語表現のことでなく、現代の認知意味論においてメトニミー・メタファー研究として発展している日常言語の意味付けにおいて中心的な役割を担う比喩のことである。そのため、本稿における「メトニミー」「メタファー」という用語は、概念レベルでメトニミーやメタファーによって捉えられ言語として具現化したメトニミー表現(metonymical expression)やメタファー表現(metaphorical expression)のことを指す。

本章では認知意味論によるメトニミーとメタファーの研究について紹介し、本研究におけるメトニミーとメタファーの定義を明らかにする。

認知意味論への先駆けとなった主要な研究には、Ullmann(1962)、Williams(1976)、Black(1979)、Grice(1975)、Reddy(1979)などがある。

Ullmann(1962)は、(1) 形や機能が似ている物の名で、ある物を表すようになったり、(2) 具体的な物で抽象的な概念を表すようになった語の意味変化の例を挙げている。

日本語で考えてみると、「日の丸弁当」は(1)の例

である。日の丸弁当とは四角いお弁当箱に白いご飯を詰めて中央に梅干しをひとつ置いただけの弁当で、まるで日の丸の旗のように見えるため「日の丸弁当」と名づけられた。また、「口がうまい」「口が減らない」「口を出す」などの表現は、「ことば」という目に見えない人間の活動を、ことばを発する具体的な「口」という器官で表しており、(2)の例であると言えよう。「口に蓋をする」と言えば《何も話さないようにする》という意味で、これも具体的なもので更に抽象的な概念を表していると言える。

このような例からも、メタファーというものが、それが指し示す抽象的な物事を、より基本的で具体的なもので表す性質をもっていることがうかがえる。

また、語の多義性については、そこにメトニミーによる比喩表現が働いているためであることが指摘されている。メトニミーによる比喩表現には、(1) 空間的な近接関係によるもの、(2) 時間的な近接関係によるもの、(3) 部分・全体の提喩(synecdoche)による近接関係によるものが示されている。たとえば、本当は机の前にある椅子に座る場合でも「机に座る」という言い方をする。このような例は(1)の空間的な近接関係に基づくメトニミー表現である。また、「今月で店を閉めることになりました」と言う場合、「店を閉める」という表現で《店の営業を終わりにする》という意味を表す。これは、店を閉めて二度

と開けないということ(2)の時間的接関係に基づくメトニミー表現だと言えるだろう。最後にここではシネクドキと呼ばれているが¹、(3)の部分と全体関係によるメトニミーとしては、「一皿全部平らげたら無料!」「頭を剃った」のように、「皿」という《全体》でその「皿に盛ってある食べ物」という《部分》を表したり、「頭」という《全体》でそこにある「頭の毛(髪の毛)」という《部分》を表したり、反対に、「顔を出す」のように「顔」という《部分》で「その人自身、全身」という《全体》を表す例などが挙げられる。

本研究でも深く関わりのある「経験基盤主義」について Lakoff and Johnson(1980:117)は、人間の経験のうちでもっとも基本的で自然である要因は次のものに関わると述べている。

- a. 身体(知覚・運動装置、心的能力、感情的気質など)
- b. 身体的・物理的環境との相互作用(移動、物体の操作、食物摂取など)
- c. 文化内における他者との相互作用(政治的・経済的・宗教的制度に関して)

また、Lakoff and Johnson(1999)は、特に身体性が人間の経験の中でもっとも直接的で基本的であるとしている。身体性は、具体的には身体で把握する「空間的経験」などと結びついている。

1.2. メタファーの性質

ここでは本稿が前提とするメタファーの性質として Johnson(1987)による「イメージ・スキーマ」、Lakoff(1987, 1993)による「メタファー写像」について確認する。

まず、Lakoff and Johnson(1980)で打ち出された「概念メタファー(conceptual metaphor)」について紹介する。彼らは 1980 年に、次の3種類の「概念メタファー」を提唱した。

- ・構造のメタファー (structural metaphor)
- ・方向性のメタファー(orientational metaphor)
- ・存在のメタファー (ontological metaphor)

「構造のメタファー」とは、抽象的な概念を持つ語を言い表すのに、同様の意味の構造を持つとされる具体的で身近な物事に使う表現を用いるというも

のである。例えば TIME IS MONEY などの例が挙げられている。You're wasting my time.(あなたは私の時間を浪費している)、The gadget will save your hours.(この装置を使えば、何時間も節約できる)のように、私たちは、抽象的な TIME(時)という概念を表すとき、より具体的な MONEY(お金)に関わる表現(waste や save など)を用いる。このような表現を用いるのは、私たちの頭の中に「TIME IS MONEY(時は金なり)」という概念メタファーがあるためであると説明される。

次に、「方向性メタファー」とは本来は非空間的な経験を「上下」などの位置関係としての具体的な表現を用いることによって概念化するものである。一種の空間化メタファー(spatialization metaphor)である。例えば I'm feeling up/down.(気分は上々だ/落ち込んでいる)、My spirits sank.(気分が沈んだ)、「天にも昇る気分だ」、「気分はどん底だ」、「気分上々」などの表現がある。それらについて、私たちの頭の中に HAPPY IS UP; SAD IS DOWN(楽しいことは上、悲しいことは下)という概念メタファーがあると説明される。

「存在のメタファー」とは、実体のない抽象的なものを物体や物質といった実体のある具象物としてそこに存在すると捉えるものである。Are you in the race on Sunday? では、レースに参加するという「行為」(action)がレースという「容器」(container)の中に入ることにように表現されており、He's in love. では、恋をしているという「状態」(state)を「容器」(container)に見立てていると説明される。これは容器のメタファーと呼ばれるものだが、「状態」を容器に見たてるメタファーは、後に STATES ARE LOCATION という「空間化メタファー」として説明されるようになり、動詞や構文などの意味拡張の分析に大きな役割を果たすようになる。

また、以上のような「概念メタファー」には、構造のメタファーのように「経験的類似性」(experiential similarity)に基づく場合と、方向性のメタファーのように「経験的共起性」(co-occurrence)に基づく場合があると指摘されている(Lakoff and Johnson 1980:154-155)。そして、後者の経験的共起性とは実際にはメトニミー的であると Radden(2000)は述べている。

以上のような「概念メタファー」を提示した後、Lakoff(1987)はメタファーをイメージ・スキーマの

写像であると定義付けた。これは「メタファー写像、metaphorical mapping」と呼ばれる。Lakoff (1987)による定義は次の通りである。

メタファーは、起点領域(source domain)から目標領域(target domain)へとイメージ・スキーマを写像する。

ここでの「写像」とは、二つの領域の構造間を一對一に「対応づける」ことである。

イメージ・スキーマとは、Johnson(1987)で次のように定義されている(谷口 2003 の訳より)。

人間の身体的運動や物体の操作、知覚的相互作用の中には、繰り返し生じるパターンがある。そのパターンがなければ、私たちの経験は混沌とし、理解不能なものとなるだろう。こうしたパターンのことを「イメージ・スキーマ」と呼ぶが、これは、イメージの抽象的構造として主要な働きをするためである。イメージ・スキーマとは、その部分同士がある関係性を持ちながら、統一した全体に組織化されたゲシュタルト構造であり、それによって、認識可能な秩序が私たちの経験に表出するのである。

(1987:xix, The Body in the Mind)

「メタファー写像の本質」は、Lakoff and Johnson(1980)、Lakoff(1987)を受けて Lakoff(1993)にて提示されている(谷口 2003 の訳より)。

I. メタファーの性質

- (a) メタファーは、抽象的概念を理解し、抽象的推論(abstract reasoning)を遂行するための主要なメカニズムである。
- (b) 世俗的なものから深遠な科学理論に至るまで、多くの事柄はメタファーを介してのみ理解される。
- (c) 基本的にメタファーは概念的なものであり、言語的なものではない。
- (d) メタファーの言語表現は、概念メタファーが表出したものである。
- (e) 概念体系の多くはメタファー的であるが、その重要な部分是非メタファー的である。メタファー的理解は、非メタファー的理解

に基づく。

- (f) メタファーによって、比較的抽象的な、あるいは本来十分な構造を持たない事柄を、より具体的で構造化された事柄によって理解することができる。

II. メタファーの構造

- (a) メタファーは、概念領域間の写像である。
- (b) 写像は部分的であり、非対称的である。
- (c) 写像はすべて、起点領域にある要素と、目標領域にある要素の間の対応関係(correspondence)が集まった、定まった集合である。
- (d) 定まった対応関係が活性化された場合、写像によって、起点領域の推論パターン(inference patterns)を目標領域の推論パターンに投射することができる。
- (e) メタファー写像は、「起点領域のイメージ・スキーマ構造を、目標領域の本来の構造と矛盾のないよう投射する」という「不変性原理」(Invariance Principle)に従う。
- (f) 写像は恣意的なものではなく、身体および日常的な経験・知識に根ざしている。
- (g) 概念体系には、数多くの慣例的なメタファー写像があり、それらは高度に構造化された下位体系を形成している。
- (h) 写像には2種類ある。1つは概念的な写像で、もう1つはイメージの写像(image mapping)である。ただし、双方とも不変性原理に従う。

III. メタファーの諸側面

- (a) 慣例的な概念メタファーの大部分は無意識的で、自動的であり、労力をかけずに使用される。それは、私たちの言語体系やその他の概念体系と同様である。
- (b) 慣例的メタファーの体系は、自動的に、意識にのぼらないレベルでたえず使用されているという点では、文法・音韻の規則と同様に「生きて」いると言える。
- (c) メタファーの体系は、私たちの経験の理解にとって中心的であり、また、私たちがその理解を実行する方法にとっても中心的

である。

- (d) 慣例的メタファーは、静態的な対応関係であり、それ自体はアルゴリズム的な性質のものではない。しかし、だからと言って、静態的な対応関係が連続的な言語処理に用いられる可能性を排除しているわけではない。
- (e) メタファーは、類似性よりもむしろ、経験における対応関係に基づいている場合が多い。
- (f) メタファーの体系は、言語の文法および語彙において、主要な役割を担っている。
- (g) メタファー写像の持つ普遍性は、さまざまである。普遍的なもの、広範に行き渡ったものもあれば、文化特有のものもある。
- (h) 詩的メタファーは、大部分が日常的・慣例的なメタファー的思考の拡張である。

上のII(e)にある「不変性原理」(Lakoff, 1990)は特に重要な制約であり、II(b)にあるようなメタファーの非対称性もこの原則によって説明することができる。メタファーの非対称性については、谷口(2003)の説明を以下に引用する。()内の補足説明は筆者大澤による。

.....メタファーは類似性に基づく比喩として、伝統的に定義されてきた。類似関係とは、基本的に対称的な関係であり、「AがBに似ている」ならば「BがAに似ている」はずである。しかし、メタファーの場合、以下のようにAとBを入れ替えて、もともと同じ解釈を意図することはできない。いずれの場合も、特別な文脈や談話要因があつてはじめて、メタファーとして意味をなすだろう。

- (51) a. #オオカミは男だ。
(「男はオオカミだ。」という比喩表現に対する文)
- b. #鬼はA先生だ。
(「A先生は鬼だ。」という比喩表現に対する文)
- c. #お姫様はあの子だ。
(「あの子はお姫様だ。」という比喩表現

に対する文)

このように、メタファーの根底にある類似性は、非対称的な性質を持つ。それは、「具体的なもの、既知のもの」で「抽象的なもの、未知のもの」を理解するためにメタファーが用いられているためであり、その逆に、「抽象的なもの、未知のもの」で「具体的なもの、既知のもの」を理解するという可能性は、まずあり得ないためである(具体的に既知のものならば、他の概念などを頼りにせずに、それ自体で容易に理解できるはずである)。
(谷口2003)

Rudzka-Ostyn(1995)は、不変性原理の前にLakoff(1990)が提唱した不変性仮説の検討を行い、メタファー写像以前に、抽象化という作用があることを、動詞 answer の事例によって検証している。そこでRudzka-Ostyn(1995)は、イメージ・スキーマについて、それが目標領域に予め単独にあるものではなく、抽象化の作用が行われるときに、起点領域と目標領域間に共通の要素が抽出されるものと指摘している。

このような研究により、メタファーによる比喩的な表現は、先天的な抽象化という基本的認知能力²に支えられ、後天的な経験的基盤に基づいて生産されるものだと考えられる。

以来、認知言語学におけるメタファーの研究では、メタファーは領域間の写像であるという見方を取るようになる。これ以降は写像が持つ性質についての論が展開する。

1.3. メトニミーの性質

メトニミー(metonymy、換喩)は認知意味論においては一般的に「近接性に基づく比喩」であると定義される。メトニミーには、次に挙げるaからhの用例のように、近接性に基づく様々な関係がある³。例文の右の矢印(→)記号(X→Y)は、「XでYを意味する」という意味で用いる。

【空間・場所の近接関係】

(トポニミー、toponymy⁴)

【容器—中身】

a. 鍋が沸いている。

(「鍋」→「鍋の中の液体」)

b. 一升瓶を飲み干した。

- (「一升瓶」→「一升瓶の中のお酒」)
 【その他の空間・場所が近接し合うもの】
 c. 机に座る。(「机」→「机の前の椅子」)
 d. 筆を加える。
 (「筆」→「筆で書かれた修正箇所」)
 【全体と部分の関係】
 (パートニミー、partonymy)
 e. 山に登る。
 (「山」: 全体→「山頂」: 部分)
 f. 顔を出す。(「顔」: 部分→「人」: 全体)
 【その他の近接関係】
 (原因(始めの動きなど)→結果)
 g. 3時間寝た。(「寝た」→「眠った」)
 h. 少し横になった。
 (「横になる」→「休む」)

また、ここに挙げたメトニミーのパターンに加えて、メトニミーには、際立つ(salient)ものを参照点(reference point)として別の対象を指示するという認知的能力の働きがあることが、メトニミーという現象を理解し説明するために極めて重要となる。次にそのような認知能力について紹介する。

Langacker(1993)は、次の図1のような「参照点」(reference points)のモデルを示し、私たちの基本的な認知的能力の一つとして、さまざまな言語現象に「参照点構造」(reference point construction)という心的操作が働いていることを指摘した。

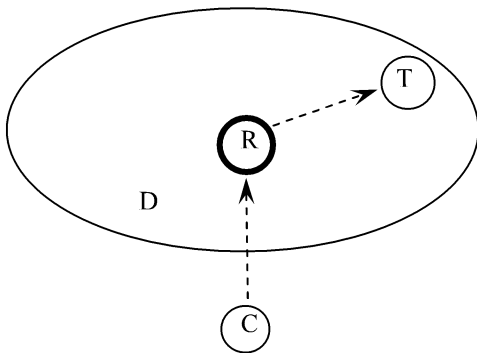


図1 参照点構造

(Langacker 1993:6 “Essential aspect of the reference-point ability”)

図1の記号は、C=conceptualizer(概念主体)、R=reference point(参照点)、T=target(ターゲット)、

D=dominion(支配領域)、---->=mental path(心的接触)を表している。

この参照点構造を表す図1は参照点能力を表しており、「それは2段階の心的接触から構成されている。第1段階では、概念主体(図1のC)は、目印となるアクセスしやすい事物、すなわち「参照点」(R)と心的接触をする。第2段階では、この参照点を手がかりにして、アクセスすることが可能な事物の集合体、すなわち支配領域(D)内から、目当ての比較的アクセスの難しい事物、すなわちターゲット(T)と心的接触を図る」(辻 2002:88、熊代敏行の説明より⁵⁾)と説明される。

そして、私たちは次のような「認知的際立ち」(cognitive salience)の原則を持っているということが示されている(Langacker 1993:30)。

Other things equal, various principles of relative salience generally hold: human>non-human; whole>part; concrete>abstract; visible>non-visible; etc.

(R.W.Langacker 1993:30)

(1)人間が非人間よりも際立つ、(2)全体が部分よりも際立つ、(3)具体的なものが抽象的なものよりも際立つ、(4)目に見えるものが見えないものよりも際立つ(など)、ということである。

Langacker(1993)では、Jhon's book/*the book's John.(「ジョンの本」とは言うが、「本のジョン」とは言わない)、John's leg/*the leg's John(「ジョンの足」とは言うが、「足のジョン」とは言わない)、John's mother/*the mother's John(「ジョンのお母さん」とは言うが、「お母さんのジョン」とは言わない)という例を挙げ、このように所有表現が非対照的な性質をもつのは、話者である人間の中に参照点構造のような心的操作があるためであり、それは更に認知的際立ちの原則に基づいていると説明される。そして、メトニミー表現もこれと同様であると述べ、

- (1) He's in the phone book.
- (2) He ate apples.
- (3) She ran out the clock.
- (4) That car doesn't know where he's going.

という例をメトニミー表現の例として挙げている。まず、(1)の例は、電話帳に載っているというのだから実際は his name であるものを he で表してい

るという例である。しかし、この例が果たして human>non human という認知的際立ちの原則に基づいたメトニミー的比喻表現であるかについては疑問の余地がある。そこで、この例については、従来メトニミーの例として挙げられてきた生産者と生産物の関係とともに改めて後の 2 節で考察したいと思う。(2)の例は apples(りんご)という全体でりんごの芯を除いた食べられる部分だけを指すという全体と部分の関係に基づく比喻表現である。(3)の例は clock(時計)という具体的なもので time(時間)という抽象的なものを表す例で、clock(時計)と time(時間)との空間的な近接関係に基づいた比喻表現であるとされる。しかし、この例は厳密に言えば、経験的な共起性に基づいたメトニミー的なメタファー的比喻表現ではないかと思われる。なぜなら、clock も時を示すという点で、time と類似した意味をもっており、単なる近接性に基づいているのではなく、time という目に見えない抽象的な概念を、それを表すという意味(役割)の上で類似している clock に見立てて表しているためである。clock と time が類似した意味をもっており、それに基づいて比喻が実現しているという点で、メトニミー的比喻の例としては疑問の余地がある。(4)の例は car(車)という乗り物で中で運転している人を表すという容器と中身の近接関係とも言える空間的近接関係に基づいた比喻表現である。ここでは human>non human ではなく whole>part や visible>non-visible といった認知的際立ちの原則がより強く働いていると考えられる。このとき、いくつか考えられる認知的際立ちのうち、どうしてそれが他よりも優先されたのかという興味深い疑問にぶつかる。なぜ、(4)のように乗り物で運転する人を表す場合には、human>non human よりも whole>part や visible>non-visible が適用されるのだろうか。そこにはたとえば乗り物であればその動きを外から捉える視点がある。乗り物のように具体的なもので、その動きや変化が見られるものについては、それを話者が目で捉えることや話者が聞き手に目で捉えさせることが表現の発話動機や目的となる。そのため、ものの動きや変化を目で捉える場面においては whole>part や visible>non-visible の認知的際立ちの原則が、human>non human の原則よりも

優先するのではないかと考えられる。

1.4. メトニミーとメタファーの定義

メトニミーを、先の認知言語学におけるメタファーの定義と対比させると、Lakoff(1987)、Lakoff and Turner(1989)は、メタファーが2つの領域間の写像であるのに対して、「メトニミーに関与する概念領域は1つだけであり、メトニミーの写像(つまり指示関係)は単一の領域内で起こる」(Lakoff and Turner 1989:102-103)と述べている。更にこの考えを受けて Croft(1993)はメトニミーを「同じ認知領域マトリックス内での写像」、つまり「領域焦点化」(domain-focusing)であると定義している。

また、Blank(1999)はメトニミーにおけるイメージ・スキーマについて論じている。メトニミーの場合は、イメージ・スキーマはメタファーのように保持されず、近接関係に基づいて変化すると述べ、これを「近接性のスキーマ」(contiguity schema)と呼ぶ(Blank 1999)。また、「メタファーの場合と同様、ある近接性のスキーマが経験的・身体的基盤をもつほど、具体的なメトニミー表現を産出し、また、メトニミー的意味自体が語彙化され、慣用化される」と指摘している(Blank 1999:183、訳;谷口 2003:143)。

更に、Warren(1999)はメトニミーとメタファーの違いの判断基準を、メタファーは複数の属性を写像することであり、一方メトニミーは単一の属性に注目することであるとし、そのことがもっとも広い範囲で両者を区別できるのではないかと提案している。以上のような認知言語学におけるメタファーとメトニミーの違いをまとめると次のようになる。

<u>メタファー</u>	
認知領域	〈異なる2つの領域間で交替が起こる〉
スキーマ	〈1つのイメージ・スキーマが保持される〉
(作用)	〈複数の属性に写像する〉 = 〈複数の要素と対応関係を持つ〉

<u>メトニミー</u>	
認知領域	〈単一の領域内〉
スキーマ	〈近接性に基づいて変化する〉
(作用)	〈近接関係を持つ単一の属性に注目する〉

鍋島(2002)ではメタファーの定義を「(認知言語

学における)メタファーとは離れた領域間の写像(構造的対応関係)である」(下線部筆者大澤)とし、定義に「領域が離れていることを明示」(鍋島弘治朗 2002:99)しているが、本研究では認知領域が2つであると言うことが別々の領域であることを示していると解釈できるため、あえて「離れた領域間」といった説明の仕方をしない。メトニミーの定義では近接関係のあるものどうしを一括りにして「単一の領域」と定義している。両者の定義を対比させるときに、「離れている」という捉え方を挿入すると心的な距離の問題になりむしろ両者の関係が不明確になると考えられる。

2. 生産者と生産物の関係

〈生産者—生産物 (作者—作品)〉

- i. 漱石を読んだ。(著者→著作物)
(「漱石」→「漱石が書いた小説」)
- j. モーツァルトを聴きに行った。
(作曲家→曲)

Langacker (1993) では(1) He's in the phone book. といった例がメトニミー表現として挙げられている。この例では he (彼) が his name (彼の名) を示しており、(1)human>non-human (人間が非人間よりも際立つ) の原則に則った参照点構造によって、非人間 (この例では his name) ではなく人間を表すことば (この例では he) が使われていると説明されている。同様に、「漱石を読む」のように、著者名でその著者の作品を表すものもメトニミー表現であるとされ、谷口 (2003:131) では「例えば『著者と著作物』のパターンにおいても、参照点となるのは人間である著者であり、human>non-human という際立ちの原則に則った自然な結果である⁶⁾」と指摘している。

しかし、筆者にとっては著者と著作物の関係のような生産者と生産物の関係に基づく表現の例は、他のメトニミーによる比喻表現とは事情が異なると思われ、これらが (1)human>non-human (人間が非人間よりも際立つ) という原則や参照点構造を反映した例だとは考えにくい。同時に Langacker (1993) が説明した所有表現とも性質が異なると思われる。

まず大切なことは、特定の比喻表現や省略表現などが自然に用いられているときというのは、慣用表現でなければ、必ずと言っていいほど特定の場面や文脈によって意味が限定されて類推することができるという点である。「漱石を読んだ」というときの「漱石」を私たちがそれほど無理なく《漱石が書いた小説などの文章》だと解釈できるのは、ここでの「漱石」が「読んだ」という動詞の対象語であるからだといえる。

さて、メトニミー表現についても非対称性という特徴が見られると、谷口 (2003) では述べられている。生産者と生産物の関係でいえば、例えば「漱石を読む」という表現が可能であっても、「漱石」という作者名が入る場面・文脈で漱石の作品名を代わりに使うことはほとんどできない。例えば、「漱石はイギリスに留学したんですよ」というところを、「『我輩は猫である』はイギリスに留学したんですよ」と言ったらどうだろうか。よく知られた作品と作者であるから、聞き手は解釈することはできるだろうが、そのような言い方をすることほとんどなく、なぜわざわざそのような言い方をしたのか疑問に思うだろう。あるいは話者が特別何かの効果をねらってこのような表現を意図的に使ったと解釈するだろう。「漱石を読んだ」とは言えるのに、なぜ『我輩は猫である』はイギリスに留学したんですよ」という言い方は不自然なのだろうか。生産者と生産物の関係をもつこのような表現を、メトニミー表現の一種として考える立場では、このような例もメトニミーの非対称性として扱われ、先の参照点構造と認知的際立ちの原則に照らして説明される。

しかし、実際にはもうひとつの説明が可能であり、特に生産者と生産物の関係に基づく表現については、次のような説明のほうが妥当であると考えられる。

「漱石を読んだ」「モーツァルトを聴いた」というとき、私たちは human>non-human という際立ちの原則に則ったのではなく、特定の小説名や曲名を明確に示す必要性がなかったり、示したくなかったりするのではないだろうか。「漱石を読んだ」というとき、「漱石」で表される対象は《不特定の漱石の文章作品》を示す。人によって、特定の作品である場合もあるが、場面によってはいろいろな作品を読んだ場合にもこのように言うこ

とができる。いわばあいまい表現でもある。仮にあいまい表現であった場合、わざとぼかして言うのであるから、参照点構造や認知的際立ちが働いているとは考えにくい。このような語用論的な原因のほうが、生産者で生産物を表す表現の場合には多いのではないだろうか。そのため、生産者と生産物の関係は表面上はメトニミー表現に類似していても、むしろその性質は、類と種の関係を表すシネクドキに近いと思われる。

さらに、生産者と生産物の関係では次のように生産物で生産者を表す例も見られる。

玉木宏、「「亜麻色の髪の人」との交際は順調？」の問いかけに無言貫く

俳優・玉木宏が 26 日（火）、都内でお菓子メーカーのキャドバリー・ジャパンの新商品リキッドガム『クロレッツアイス』発表会に出席した。10 月下旬に一部週刊誌で歌手・島谷ひとみとの交際が報じられた玉木は、報道陣から「「亜麻色の髪の人」とは順調？」さらにガムにちなんで飛んだ「さわやかな交際ですか？」という問いかけに、苦笑いしながらも無言を貫いた。（以下省略）（2007 年 12 月 27 日 06 時 00 分）

（インターネット記事 <http://www.oricon.co.jp/news/entertainment/50775/> より、下線は筆者大澤による）

「亜麻色の髪の人」というのは現代女性歌手がカバーした曲名「亜麻色の髪の乙女」にちなんでおり、質問をした報道陣のひとりがこの記事を書いた人は、この曲名を表に出すことによってその女性歌手を指し示している。この例から、曲名でその歌を歌う歌手名を示すこともあるということがわかる。歌手とその歌手が歌う曲（歌）の関係は、生産者と生産物の関係に類似していると思われる。なぜここではこのような表現が選択されたのだろうか。主な理由として次のふたつが考えられる。

(1) この女性歌手の名前よりもこのカバー曲の名

前のほうが知名度が高いと思われたため

(2) この女性歌手はこの歌を歌っている姿こそが典型的なイメージだと思われたため

場合によってはこのふたつの理由のどちらかを選ぶこともできるし、どちらも共存できると考えられる。そして、(1)については、メトニミー的表現の特徴である参照点構造に当てはまるが、(2)についてはプロトタイプ理論がちょうど当てはまると思われる。そのため、(1)の場合はメトニミー的表現であるが、(2)の場合は、代表的な歌でその歌手をあらわすという点で、代表的な種で類を表すというシネクドキの関係に類似しているという解釈が成り立つ。このように、メトニミー的表現はシネクドキ的表現と表現上は同じ場合があるということが、シネクドキをメトニミー的表現に含めようとする見方にもつながっていると考えられる。しかし、それはたまたま同じ表現について異なるふたつの認知的動機が共存しうるだけであり、メトニミー的表現とシネクドキを混同する理由にはならないと思われる。

また、メトニミー的表現であれ、シネクドキ的表現であれ、全体と部分や類と種の名を入れ替えたとき、同じ文脈を維持することができない。そのため、メトニミー的表現やシネクドキ表現についてメタファー的表現のような非対照性を問うことに意味を見出すことができず、非対照性を根拠にメトニミー的表現とシネクドキ的表現を同様に扱うことはできないとも考える。これについては次節で更に詳しく述べることにする。

ところで、書きことばである広告文や記事・番組などのタイトル名などでは一般会話よりも強い印象を与える表現が使われるため、一般会話では不自然な表現でも許容される傾向がある。例えば作家である夏目漱石の留学生時代を特集した番組で仮に「『我輩は猫である』のイギリス留学」、「『坊ちゃん』とイギリス」などというタイトルが現れたとしても、私たちは『我輩は猫である』や『坊ちゃん』という夏目漱石が書いた小説名が漱石のことを指していると解釈することができる。書き言葉であるタイトルなどには文字・表記という情報も加わるため、特に後の例では作品名を示す二重括弧の働きも大きい。また、あえて漱石の名を作品名で表したことに

ついて、その番組では彼と彼のイギリス留学とその有名な作品についてをも取り上げるのではないかと思う人もいるだろう。このように、広告文やタイトルなどは、それらに特徴的な性質が考慮される。広告文やタイトルなどには、より短くぱっと目に飛び込んでくる表現で、いっぺんに多くの情報やイメージを与えようとする発信者側の意図があり、受信側もそれに慣れている。このような用法は、私たちが一般的な会話などで使用していることばの性質とは異なるため区別する。しかし、先の「亜麻色の髪の人」の例は記者会見の場で報道陣から出たことばであり、実際の会話場面でも成立しそうな用例であると判断できる。

3. パートニミーとシネクドキ

パートニミー (partonymy) とは全体と部分の関係に基づく比喩のことであり、シネクドキ (synecdoche) とは類と種の関係に基づく比喩のことである。

まず、類と種の関係の中でも、後述のように一般化や特殊化のように特定の社会の中で皆で共通に繰り返し使われる慣用表現となったものと、1回の場面に依存して使われる場合とでは更に区別される必要があると考える。本節では次のように、それぞれ(1)社会慣習型(k, l, m)と(2)場面依存型(n, o)として区別しておく。後述するように場面依存型では、「白髪」を「白いもの」と言う場合など、語用論的な要素を含むことが多い。

【類と種の関係】

(全体と部分との関係とは区別する)
(提喩、シネクドキ、synecdoche、タクソノミー、taxonomy⁷⁾)

(1) 社会慣習型

- k. お花見に行く。
(「花」: 類 → 「桜」: 種)
- l. 今日のご飯はなんですか。
(「ご飯」: 種 → 「食事の献立」: 類)
- m. ようやく自分で食べていけるようになった。
(「食べていく」「食べていける」: 種 → 「生計をたてる」「自活する」: 類)

(2) 場面依存型

- n. 空から白いものが降ってきた。
(「白いもの」: 類 → 「雪」「灰」: 種)
- o. 最近、白いものが増えちゃって。年かな。
(「白いもの」: 類 → 「白髪」: 種)

全体と部分の関係に基づく比喩は種と類を表す関係とともにシネクドキ (提喩) に含めるという見方(Le groupe μ1970、山梨 1988)もあったが、佐藤(1978=1992)、瀬戸(1986)は、全体と部分の関係に基づく比喩はあくまでも現実世界における包含関係であり、必ずしも類と種の関係のように概念体系において包含関係を持っているとは言えないため、類と種の関係に基づくものだけをシネクドキ (提喩) とし、部分と全体の関係を表すものとは区別すべきであると主張した。例えば、シネクドキを全体と部分の関係を表すパートニミーと積極的に区別する根拠としては次のようなことが言われる。「お茶を飲みに行きませんか」というとき、「お茶」は種で、その上位概念である「飲み物」は類である。このときの「お茶」自体は「飲み物」でもあるが、「合会に顔を出します」という表現で「顔」が部分で「人」全体を表す例では、部分である「顔」自体が「人」という意味を表すことはできない。このことから部分と全体の関係による比喩と類と種の関係による比喩とは本質的に異なると説明される⁸⁾。しかし、このような説明だけでは両者の本質を積極的に区別することに疑問の余地が残るとされ、谷口(2003: 123-126)では次のように述べられている。

5.1.3 部分・全体関係とシネクドキ

Lakoff and Johnson (1980) では、メトニミーのパターンの中に(8)のように部分・全体関係を含めていたことからわかるように、この部分・全体関係は一種の近接関係であり、メトニミーとみなされる。その一方で、それらが「シネクドキ (提喩)」として伝統的に区別されてきたことにも、何らかの根拠があると思われる。この節では、部分・全体関係に焦点をあてて、その特徴を見ていく。

山梨 (1988) は、シネクドキに、いわゆる「部分・全体」の関係と「類・種」の関係があると述べている。

(14) 部分・全体

- a.手を貸す。(【部分】手→【全体】人)⁹
 b.赤鉛筆 (【全体】鉛筆→【部分】鉛筆の芯)

(15) 類・種

- a.花見 (【類】花→【種】桜)
 b.人はパンのみに生きるにあらず。
 (【種】パン→【類】食物)

この例が示すように、部分・全体の関係は、「部分で全体を指す」パターンと、その反対で「全体で部分を指す」パターンの2通りが見られることが、シネクドキの特徴である。後で見るように、「容器と内容」、「著者と著作物」などの近接関係のパターンではこうした反転が起こりにくいという事実とは、対照的である。部分・全体関係に関して、このように両方向のパターンが生じる理由については、5.2.2 節で扱うことにする。

また、瀬戸 (1997)、Seto (1999) は、「類と種」の関係に基づくもののみをシネクドキとして分類している。その主たる根拠は、部分と全体の関係が、実体 (Entity) の関係 (E 関係) であるのに対し、類と主の関係は、概念的な範疇 (Category) の関係 (C 関係) であるという、性質の違いである。前者の E 関係に基づくものは「パトノミー」 (partonomy)、後者の C 関係に基づくシネクドキは「タクソノミー」 (taxonomy) とも呼ばれる。

このような下位分類は可能であるが、実体の E 関係と範疇の C 関係の境界線は、必ずしも明確ではない。たとえば、「シェイクスピアを読んだ」のようなメトニミーは「著者と著作物」の関係に基づいているが、この関係が実体的であるか概念的であるかは、微妙である。「シェイクスピア」は特定の人物を指してはいるが、私たちにとってシェイクスピアは、「実体¹⁰」というよりはむしろ、16-17 世紀イギリスの作家であるという知識上の人物であり、概念的な存在である。

さらに、分類的なカテゴリーの概念自体が、「容器」のメタファーに基づいていると

考えられる。図 1 のように、「類」は「容器」、その要素である「種」は容器の「内容」とみなされ、それゆえに「類」と「種」の間に、全体・部分の内包関係が認識されるのである。したがって、メトニミーに属する「容器と内容」とそのメタファーである「類と種」の関係の間には、連続性が見出される。

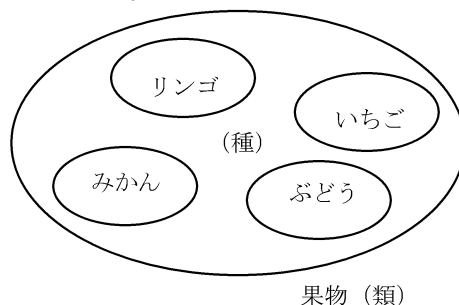


図 1

この点について瀬戸 (1997、163-164) は、図 1 のような表示手段が私たちに「空想的思考に陥らせ」、図示そのものが「幻想を生み、理論的混乱の原因になる」と指摘している。しかし、こうしたカテゴリー認識は単なる便宜上の表示ではなく、私たちのカテゴリー観そのものを反映している。逆に、「容器と内容」のような空間的内包関係なくしてカテゴリー関係について考えることは、非常に困難であり、それらはもはや (幻想ではなく) 不可分な関係にあると言えよう。

以上から、類と種を含む部分・全体関係に基づく表現をシネクドキとして分類することは可能であるが、部分・全体関係も近接関係の一種であることも確かである。したがって、シネクドキはメトニミーとの連続性の中で扱うのが妥当であり、本書でも以降はメトニミーの下位類として話を進めていきたい。

(谷口 2003 : 124-126、下線筆者大澤)

果たしてこの問題についてどのような説明が適しているだろうか。ここで今一度、類と種の関係と全体と部分の関係の違いについて筆者の立場を

明確にしておきたい。瀬戸(1986)は、全体・部分の関係が実体(Entity)の関係であるのに対して、類と種の関係は概念的な範疇(Category)の関係であるとして、前者を「パートノミー」(partonomy)、後者を「タクソノミー」(taxonomy)と呼んだ。結論から先に述べると、筆者は全体と部分との関係に基づいた比喩表現がメトニミー的比喩表現であることは認めるが、類と種の関係に基づいた比喩表現はメトニミー的比喩表現であるとは考えにくく、佐藤(1978)、瀬戸(1986)の論に賛同する。ただ、ここで注意したいのは、全体と部分の関係が「現実世界における包含関係」で、これに対して類と種の関係は「概念体系における包含関係」であるという説明だけでは、谷口(2003)のように納得が得られないということである。

まず、上記の谷口(2003)の説明では筆者大澤が波線を引いた箇所「内包」ということばが使われているが、これは「包含」関係の誤りであると考えられる。そこで、「内包」ではなく、瀬戸(1986)の説明にもあるように「包含」関係という観点で、全体と部分の関係と類と種の関係が類似していると捉えられたものとみて、そのような立場から考え直してみたい。

恐らく、谷口(2003)のように全体と部分の関係に基づく比喩表現と、類と種の関係に基づく比喩表現とを区別する必要がないという考え方の背景には、次のような捉え方があると考えられる。

全体と部分の関係による比喩と類と種の関係に基づく表現は、その「全体」やその「類」の枠内だけでそれぞれが包含関係をもっているという観点に終始すると、両者は同じような性質を持っているように捉えられる。例えば「会合に顔を出します¹⁾」と言うとき、その表現が実現している場面において「顔」は実際に「人」を意味するのである。先の「顔」という部分だけで「人」の意味を持つことはできないという説明は、比喩が実現している場面から離れて客観的に一般的な「顔」と「人」という単語を取り出し、それぞれに類と種の関係があるかどうか、つまり上位概念と下位概念の関係が当てはまるかどうかと考えているに過ぎない。それはそもそも「全体と部分」、「類と種」と呼んでいる呼び名の違いに帰ることである。両者を包含関係で説明しようとする、まず全体と部分の関係は切り離せないひとまとまりの関係

として説明される。「顔を出す」という表現では、部分を出せば全体も必ず含まれる。ここで「顔」が「人」を表すのは、人を認識するときに先ず顔を見るという経験的基盤に基づいており、人の中で実際にもっとも際立って見える「顔」という部分によって、それと一体化している「人」という全体の意味を表すのである。そして、全体と部分の関係と同じように、類と種の間を見ても、包含関係にあって一体化している両者において、概念上、より際立ちのある一方(部分や全体、類や種)で他方を表すという点で、全体と部分の関係に基づく比喩表現と、類と種を表す比喩表現とは類似性が認められる。そして、どちらも近接性に基づくメトニミー的表現であると考えられる。

しかし、共通性のある物事をひと括りにまとめようとすることは有意義だと思われるが、シネクドキに限っては分析的に捉えたほうがよいと思われる。もう一段高い観点に立ち帰って、両者の認知領域の違いを認めてはどうだろうか。類と種の間に基づく表現は、実は全体と部分の関係のように単一の領域内で行われるものではない。むしろ、その比喩表現が使われる社会や場面において類に代表される種や種に代表される類を表す関係である。例えば、「ご飯食べた？」のように、私たちは「ご飯」という種で《食事》という類を表すことが慣用になっている。これは米が主食だった時代の日本社会で生まれた表現であり、《食事》と言えば「ご飯《お米を炊いたもの》」が代表だったためである。次に、類と種の間に基づく表現が全体と部分の関係に基づく比喩表現のように近接性に基づいているかということ、そうとは言えない。そういうこともあるが、必須条件ではない。先にまとめたメトニミーの定義のスキーマは「近接性に基づいて変化する」ということであり、メトニミーの作用は「近接関係を持つ単一の属性に注目する」ことであるが、類と種の間に基づく表現はメトニミーを定義づけるもっとも大切な、認知領域という点からもスキーマや作用という点からも異なっている。

類と種の間に基づく表現を、まず上記のような全体と部分の間に基づく比喩表現とは別にし、更に包含関係という説明から離れて、どのような認知的な構造に基づいているかを考えてみよ

う。先にも触れたように、類と種の関係に基づく表現を適切に説明することができるのは、その場面で発話された特定の類と種を全体と見るような包含関係の有り様ではなく、認知言語学におけるプロトタイプ理論¹²に基づいているという説明が適切である。「お茶」は、「飲み物」という《類》の《種》に当たるが、単なる種ではなく、「お茶」は「飲み物」の代表であった。「飲み物」と言えば「お茶」を示した当時、「お茶」というと「飲み物」を類推させた。最近では様々な飲み物が日常的に嗜まれるため、コーヒー好きの人は「コーヒー」で「飲み物」を代表させる場合もあるだろう。勧誘表現「お茶を飲みに行きませんか」は、表面上は《お茶でも飲みに行きませんか》という意味として解釈される。これは、概念レベルで「飲み物」を《全体》として、「飲み物」という《全体》を、「飲み物」という《全体》に近接している《部分》としての「お茶」で示しているわけではないと思われる。そのように説明しようとすればできないことはないが、事実と異なるように思われる。むしろ、その社会慣習や場面によって、プロトタイプである種とその類の関係こそが、類で種を（例えば「花見」で「桜を見に行くこと」を）表したり、反対に種で類を（例えば「ご飯食べた？」で「食事した？」を）表すことを実現させていると考えられる。ここには「A《類》と言えばB《種》」「B《種》ということA《類》」という関係があり、それらの関係が場面に依存している場合、字義通りの意味で受け取られたとしてもコミュニケーション上は特に問題がない。その点、類と種の関係に基づく表現が比喻表現と呼べるかどうか疑わしい。

例えば、「空から白いものが降ってきた」と言ったとき、聞き手はその場面の中で話し手が言った「白いもの」を「雪」や「灰」だと解釈することもできるし、そのまま「白いもの」としてあいまいにしておくこともできる。また、例えば話者が「近頃、白いものが増えちゃって。もう年ね」と言ったとする。このときの「白いもの」は「雪」や「灰」ではなく「白髪」だと解釈される。このとき、話者には「白髪」とははっきり言いたくない心理作用が働いて「白いもの」という表現が選ばれたのであろう。このように、語用論的な発話意図によって、類で種を表したり、種で類を

表したりする場合もある。その場合、先述したメトニミーの特徴である Langacker(1993)の参照点構造や認知的際立ちとは関係がないことがわかる。

また、それらの関係が社会の慣習に依存しているいわば慣用表現である場合、例えば、「花見」で《桜の花を見に行くこと》を表したり、「ご飯」で《食事》を表したりすることは、その語用をいわゆる決まった単語や表現として覚えていなければ理解できず、特に文化的な背景をもった表現の場合、普遍的な比喻表現として類推を働かせることができないため、異文化社会の人にとっては理解できないであろう。この点からも、類と種の関係に基づく表現が比喻表現と呼べるかどうか、やはり疑わしいことになる。

言語学における意味論の歴史では、1870年代から1930年代の間に、歴史・比較言語学の隆盛とともに、意味変化を引き起こす原因、および意味変化の研究が高まった。Arsene Darmesteter、Michel Breal、Hermann Paul、Paul-Jules-Antoine Meilletらによって、意味変化の原因には(1)歴史的原因(2)言語的原因(3)社会的要因(4)心理的要因の4つが提起された。意味変化のパターンについて、従来よく行われていた分類には、意味の一般化(例:「瀬戸物」で《焼き物一般》を表すなど)、特殊化(「太閤」で《豊臣秀吉》を表し、「黄門」で《徳川光圀》を表すなど)などがある。類と種の関係に基づく表現はまさにこのような「意味の一般化」や「意味の特殊化」と呼ばれていたものを含んでいる。「瀬戸物」で《焼き物一般》を表すような「一般化」は、種で類を表しており、「太閤」で《豊臣秀吉》を表すような「特殊化」は、類で種を表している。いわば私たちの認知レベルにおける類と種の関係は、全体と部分のようにはっきりとした輪郭をもたず、Wittgenstein(1953)のいう家族的類似性をもった、種という横の成員が類を成しており、私たちはそれらを明確な境界線のある単一の領域として捉えているとは考えにくい。種は不特定多数で、現れては消えるものもある。例えば、「焼き物」と言えば、いろいろある中でも「瀬戸物」が代表的(プロトタイプ)で、その時代の「太閤」と言えば「秀吉」が理想的なプロトタイプであったのである。つまり、類と種の関係に基づく表現はプロトタイプ効果による表現であると言える。はつき

りとした輪郭をもち明確な近接関係に基づく全体と部分の関係とは、その性質だけでなく表現におけるプロセスが異なると言えるのではないだろうか。

以上のような理由から、類と種の関係に基づく表現はメトニミーやメタファーとは異なる概念レベルであるだけでなく、認知的な前提も異なっているものとして、今一度、瀬戸（1997）の指摘（上記引用箇所の下線部を含む）の明確さを再確認して区別したい。

注

1. 後述のようにシネクドキは種と類の関係であるとして部分と全体関係とは区別される（佐藤 1978[=1992]、瀬戸 1986）。
2. Langacker(1993)は、たとえば「起点—経路—終点」といったイメージ・スキーマが、連続走査(sequential scanning)を行う能力があってはじめて得ることができるとし、これを「イメージ・スキーマに関わる基本的認知能力(image-schematic ability)」と呼んでいる。
3. Lakoff and Johnson(1980:Ch.8)、瀬戸(1986:第2-3章)、Kovecses and Radden(1998)参照
4. 山梨 (1992:93、1995:33)
5. ()内は筆者大澤による。
6. 例文番号のところは省略する。
7. 瀬戸(1986)
8. 初山洋介(2002)も参照のこと
9. 「手を貸す」は山梨(1988)の例を谷口(2003)が引用したものであるが、全体と部分を現す例として、このような慣用表現の例は「赤鉛筆」などの例とは区別したほうがよいと考えている。
10. 原本には「実態」とあるが、漢字を誤ったものとして「実体」とする。
11. この「顔を出す」という例は、先の「手を貸す」という例と同様に、筆者としては典型的な全体と部分関係の例としてはふさわしくない例だと考えているが、先行研究において「顔を出す」という例文も「手を貸す」と同様に全体と部分の例として挙げられてきたため、ここでも同種の例文によって可能な考察を想定する。
12. Rosch(1978)、河上(1996)、Lakoff(1987)、辻(1989、1991、1992b)、吉村(1995)、Taylor(1995b、1998)、Ungerer and Schmid(1996)、山梨(2000)参照

参考文献

- 大澤（伊藤）理英(2002)「オノマトペに関する考察：擬音語と擬態語間の共感的比喩表現について」、『日本エドワード・サピア協会 研究年報』16,55-66
- 大澤（伊藤）理英(2004)「中古の比喩表現について」『人間文化論叢』6(2003年度)お茶の水女子大学大学院人

間文化研究科 105-117

- 大澤（伊藤）理英(2005a)「中古『～メク』におけるオノマトペの比喩による意味拡張について」、『人間文化論叢』7(2004年度)お茶の水女子大学大学院人間文化研究科,301-314
- 大澤（伊藤）理英(2005b)「中古～中世の『～メク』におけるオノマトペの比喩による意味拡張について」、日本エドワード・サピア協会『研究年報』19,27-41
- 大澤（伊藤）理英(2006a)「中古～中世の『～メク』におけるオノマトペの比喩による意味拡張について 感覚・感情を表す事例の分析」、韓国日語教育学会誌『日本語教育研究』11,105-119
- 大澤（伊藤）理英(2006b)「中古～中世の『～メク』におけるオノマトペの比喩による意味拡張 中古～中世の通時的分析結果および意味拡張モデルの提示」、韓国日本学会誌『日本学報』69,53-65
- 大澤（伊藤）理英(2006c)「オノマトペにおける～スル形の考察」『日本認知言語学会論文集』6, J C L A 6(2006年度版),310-320
- 河上誓作(1996)『認知言語学の基礎』研究社出版
- 佐藤信夫(1978)(1992に再取)『レトリック感覚』講談社
- 瀬戸賢一(1986)『レトリックの宇宙』海鳴社
- 瀬戸賢一(1988)『レトリックの知 意味のアルケオロジーを求めて』新曜社
- 瀬戸賢一(1995)『空間のレトリック』海鳴社
- 瀬戸賢一(1997a)「意味のレトリック」、卷下吉夫・瀬戸賢一『文化と発想とレトリック』(日英語比較選書1)研究社
- 瀬戸賢一(1997b)『認識のレトリック』海鳴社
- 谷ロ一美(2003)『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』(『英語モノグラフシリーズ』20)研究社
- 辻幸夫(1989)「カテゴリー化とプロトタイプ効果の再考 言語学的視点から」『教養論叢』94,31-47
- 辻幸夫(1991)「カテゴリー化の能力と言語」『言語』20(10),46-53
- 辻幸夫(1992a)「認知と比喩研究について」『英語青年』138(5),243
- 辻幸夫(1992b)「プロトタイプとカテゴリー論の動向」『英語青年』138(8),41
- 辻幸夫(2002)「認知的隠喩研究に向けて 隠喩研究の動向と問題:認知言語学の立場から」『日本認知言語学会論文集』2
- 鍋島弘治朗(2003)「認知言語学におけるイメージ・スキーマの先行研究」『日本認知言語学会論文集』3
- 初山洋介(1998)「換喩(メトニミー)と換喩(シネクドキ) 諸説の整理・検討」『名古屋大学日本語・日本文化論集』6
- 初山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』(初山洋介著、町田健編『シリーズ・日本語のしくみを探る 5 認知意味論のしくみ』)研究社
- 初山洋介(2003)「認知言語学における語の意味の考え方」『日本語学』269/22(10)日本語学会編

- 山梨正明(1988)『比喩と理解』大学出版会
- 山梨正明(2000)「身体論的視点からみた言葉の科学 認知言語学のパラダイム転換」5, ことば工学研究会
- 山梨正明(2001)「空間認知と視線のダイナミックス 認知言語学のパースペクティブ」『人環フォーラム』10, 京都大学大学院人間・環境学研究科編
- 吉村公宏(1995)『認知意味論の方法』神戸学院大学人文学部人間文化研究叢書, 人文書院
- Black, Max(1979)More about Metapher, *Metapher and Thought* (second edition), ed. by Andrew Ortony (1933), 19-41, Cambridge Grice, Herbert Paul(1975)Logic and Conversation, Syntax and Semantics 3: Speech Acts, ed. by Peter Cole and Jerry Morgan, 41-59, Academic Press, New York.University Press, Cambridge.
- Croft, W (1993)The Role of Domains in the Interpretation of Metaphors and Metonymies, *Cognitive linguistics 4 (4)*
- J.M.Williams(1976)Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic universals, *Language*52.
- Lakoff, George(1987)*Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・梅原大輔・大森文子・岡田禎之訳 1993『認知意味論: 言語から見た人間の心』、紀伊国屋書店)
- Lakoff, George(1993)The contemporary Theory of Metaphor, *Metaphor and thought* (second edition), ed. by Andrew Ortony, Cambridge University Press, Cambridge.
- Lakoff, George. and Mark. Johnson(1980)*Metaphors We live By*. University of Chicago Press, Chicago and London. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 1986『レトリックと人生』、大修館書店)
- Lakoff, George & Zoltan Kövecses.(1987)The cognitive model of anger inherent in American English. In: D. Holland and N. Quinn (eds), *Cultural models in language and thought*. New York: Cambridge University press.
- Lakoff, George and Mark Turner (1989)*More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metapher*, University of Chicago Press, Chicago and London. (大堀俊夫訳 1994『詞と認知』紀伊国屋書店)
- Lakoff, George (1990)The Invariance Hypothesis: Is Abstract Reason Based on Image-Schemas?, *Cognitive Linguistics 1*, 39-74. (杉本孝司訳「不変性仮説: 抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか?」坂原茂編 2000『認知言語学の発展』,1-59,ひつじ書房)
- Lakoff, George and Mark Johnson (1999)*Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*, Basic Books, New York.
- Langacker, R. W.(1987a)The Cognitive Perspective. *CRL Newsletter 1(3)*
- Langacker, R. W.(1987b)*Foundations of Cognitive Grammar.(Vol. I)* . Theoretical Perspective. Stanford Univ.Press.
- Langacker, R. W.(1993)Reference-point Constructions, *Cognitive linguistics 4 (1)*
- Le groupe μ (1970)Rhetorique generale. Librairie Larousse. (佐々木健一・樋口桂子訳、1981、『一般修辞学』、大修館書店)
- Reddy, Michael J.(1979)The Conduit Metapher: A Case of Frame Conflict in Our Language about Language, *Metapher and Thought* (second edition), ed. by Andrew Ortony (1933), 164-201, Cambridge
- Rosch, E. (1978) Principles of Categorization. In Rosch, E. and B.B.Lloyd (eds.), 1978, *Cognition and Categorization*. Lawrence Erlbaum. 27-47.
- Rudzka-Ostyn, Brygida.(1995)*Metaphor, Schiema, Invariance: The Case of Verbs of Answering, By Word of Mouth*, by Louis Goossens et al., 205-243, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.
- Taylor, John R.(1992a)Review of Fife, J. *The Semantics of the Welsh Verb. A Cognitive Approach*. Univ. of Wales Press, 1990. *Lingua 88 (4)*:336-40
- Taylor, John R.(1995b)*Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistics Theory*. Clarendon Press. (辻幸夫訳 1996『認知言語学のための14章』紀伊国屋書店)
- Taylor, John R.(1998)Syntactic Constructions as Prototype Categories, In Tomasello, M.(ed.), *The new Psychology of Language*. Lawrence Erlbaum. 177-202
- Taylor, John R.(2002)*Cognitive Grammar*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Ullmann, Stephen.(1962)*Semantics: An introduction to the Science of Meaning*, Basil Blackwell & Mott, Oxford. (池上嘉彦訳、1969、『言語と意味』、大修館書店)
- Ungerer, F. and H.J. Schmid. 1996 *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Longman. (池上嘉彦他訳 1998『認知言語学入門』大修館書店)
- Warren, Beatrice (1999)Aspect of Referential Metonymy, *Metonymy in Language and Thought*, ed. by Klaus-Uwe Panther and Gunter Radden, 121-135, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.
- Wittgenstein, L.(1953)*Philosophical Investigations*. (trans. by G.E.M. Anscombe) Basil Blackwell/ Macmillan. (藤本隆志訳. 1976.『哲学探究』大修館書店)

A definition of metaphor and metonymy, and a discussion of metonymy and synecdoche

OSAWA Rie

Abstract

This paper presented new discussion of the definition of metonymy and metaphor, expressions based on 'producer-product', 'whole-part' and 'class-form' relationships of the objects respectively. First, expressions based on producer-product relationship of the objects includes word usages as synecdoche in addition to metonymy. Second, although metaphors based on whole-part relationship of the objects are thought to be included in metonymy, there should be made a distinction between the class-form relationship called synecdoche and metaphors based on whole-part relationship. Though conventional explanation alone is unsatisfactory that whole-part relationship is 'the inclusive relation in reality' in contrast to class-form relationship as 'the inclusive relation in conceptual system'. It was insisted that class-form relationship should be explained by prototype theory, and that expressions based on this relation and those of metonymy-like metaphors should be grounded on a different conceptual levels and cognitive conditions, added explanations of pragmatic speaking motivation.

【Keywords】 metaphor, metonymy, synecdoche, producer-product, whole-part

(Department of Japanese Studies, College of Liberal Arts, Korea National Open University)

現代日本語の反復形オノマトペの スル形についての考察

大澤 理英

要 旨

純粹に外界の音を言語化した擬音語においては、ごく少数の例外を除いて、殆どの語に「スル」はつかない。一方、感情や感覚を表すという意味で擬情語とみなされる語彙には、ほとんど例外なく「スル」がつく（いらいらする、かりかりする、むかむかする、わくわくする、どきどきするなど）。また、擬情語以外の擬態語つまり狭義擬態語の場合には「スル」がつくもの、つかないものの両方が混在している。本論文はこのような反復形オノマトペに見られる文法的特徴が認知的な原因に基づいていると考察し、擬音語や狭義擬態語や擬情語の意味的な特徴の現れとして説明する。

【キーワード】 オノマトペ、 スル形

1. 反復形擬態語のスル形

1.1. 狭義擬態語のスル形について

擬情語以外の擬態語つまり狭義擬態語の場合には「スル」がつくもの、つかないものの両方が混在している。

例) あたふたする、いちやいちやする、のろのろする、など
*あんどろする、*どやどやする、*べらべらする、*がらがらする、*へとへとする、*くたくたする、など

一方、純粹に外界の音を言語化した擬音語においては、ごく少数の例外を除いて、殆どの語に「スル」はつかない。また、感情や感覚を表すという意味で擬情語とみなされる語彙には、ほとんど例外なく「スル」がつく（いらいらする、かりかりする、むかむかする、わくわくする、どきどきするなど）。このような「擬態語+スル」の分布について次のグラフ1を示す。

グラフ1 「擬態語+スル」の分布¹⁾

擬 情 語	3	67
狭義擬態語	288	335
広義擬態語	291	402
	□ *~スル	■ ~スル

形式動詞としての「スル」の機能は用言化である。中北(1991)は「スル」がつく擬態語とつかない擬態語について次のように説明している。(下線部筆者大澤)

「擬態語+する」という表現ができるのは、「修飾することがらに制限のあるもの」で、その中でも具体性を欠いた、漠然とした動作のサマを表す場合であるという傾向がある。具体的な動作と漠然とした動作との境界は明確ではないが、少なくとも「めそめそ」と「さめざめ」では「めそめそ」の方が泣いていることが不明瞭である。「うとうと」と「すやすや」、「よちよち」と「てくてく」それぞれの場合でも、浅い眠りである「うとうと」、まだ頼りない歩き方である「よちよち」に「する」がつく²⁾。一方、よく眠っている「すやすや」、調子よく歩いている「てくてく」には「する」がつかない。「する」がつくのはいづれも、限定されているようでいて実はどこかあいまいなコトのサマを表す擬態語である。漠然とした動作・作用で既存の動詞では表しにくいような場合、形式動詞「する」を用いてサマを動詞化した「擬態語+する」で表すのであろう。

点線を引いた部分の「具体性を欠いた」、「漠然とした」、「どこかあいまいな」という「コトのサマ」という説明の仕方は適切ではない。「スル」がつく擬態語とつかない擬態語との間で、その「コトのサマ」についての具体性、漠然性、あいまい性の対立をたてること自体が不明確である。

擬態語の中にはある特定の既存の動きの概念（基本動詞）を念頭に、ある動作や作用の様態を表すものがある。それらの擬態語は「スル」をともなって新しく周辺の意味の動詞を生産する。例えば中北(1991)が挙げた例のうち、「めそめそ」、「うとうと」はどちらもそれぞれどのように「泣く」か、「眠る」かということを表すのではなく、それぞれ「泣く」、「眠る」の意味の周辺にあつて既存の動詞の意味範疇に入らない動作や作用の様態を表すものと考えられる。

ひとつには、そのような擬態語が「する」をともなって新しく周辺の意味の動詞を生産すると考えられる。一方、既存の基本動詞の意味を損なうことなくそれらの動作・作用を形容して限定する様態は、様態の領域のままで動詞化せず、既存の語彙にある動作や作用と結びついて新しい意味を生産すると考えられる。擬態語がスル形をとる場合に働く要因のひとつとして考えられるのは次の通りである。

狭義擬態語がスル形を持つ場合の要因

ある擬態語は、既存する特定の基本的な動詞の意味と関連がありながら、次の(1)から(3)のような理由によって、意味的な制約を受けてそれらと関連のある既存の動詞と適切な修飾関係が結ばなくなる。

- (1) その擬態語の意味が既存する他の動詞を修飾するような様態だけでなく、その動詞の意味までも完全に含んでしまう場合（疊語になるのを避ける場合）
例) 泣く → めそめそする／めそめそ泣くな。
- (2) その擬態語が既存する個別の動詞が意味する動作との修飾関係に留まらず様態に代表される動作を表す場合
例) のろのろする／のろのろ {歩く、走る、登る、動く…}
- (3) その擬態語が既存する他の動詞の意味に満たない動作や作用の様態、あるいは繰り返

しのような意味を表す様態の場合
例) うとうとする／*うとうと眠る

このような場合に、それらの擬態語がスル形という形式をとって、新たな動作・作用を表す用言として独立すると考えられる。

1.2. 擬情語のスル形について

次に、感覚や感情を表す擬情語の反復形には、ほとんどすべての語がスル形をとるが、それら擬情語のスル形は、山岡(1999)で述べられているところの一人称 ru 形で無標のアスペクト形式やモダリティ形式であるという条件下にあつて現れる「感情表出」動詞(A)の下位分類にある「感覚」の A-3、場合によっては「感情描写」の C-3 を表すことがわかる。山岡(1999)は「発話者が発話時における発話者自身の感情を、動詞述語のル形終止を用いて表出する表現である」と定義し、次のような「感情動詞の三分類と下位分類」を挙げている。

表 1 「感情動詞の三分類と下位分類」(山岡 1999:48)

	1 思考	2 情意	3 感覚	4 知覚	S 評価用法
(A) 感情表出 [I]+V-ru	A-1 思考表出 ～ト(～ク)思う	A-2 情意表出 困る	A-3 感覚表出 胃が痛む	A-4 知覚表出 見える	S-A 表意表出 (～ニ驚く)
(B) 感情変化 [I]+V-ta	B-1 思考変化 ひらめく	B-2 情意変化 あきれ	B-3 感覚変化 肩が凝る		S-B 評価変化 (～ニ驚いた)
(C) 感情描写 I+V-teiru	C-1 思考描写 ～ヲ思う	C-2 情意描写 怒る	C-3 感覚描写 顔がほてる	C-4 知覚描写 見る	

上の表の「(A)感情表出 [I]+V-ru」における「3 感覚」の「A-3 感覚表出」の「胃が痛む」と同種の例として「(ああ,) 胃がチクチクする (!)」「(ああ,) 胃がムカムカする (!)」などの例を挙げることができる。³これらの表現は、「(ああ,) 胃が痛い (!)」「(ああ,) 気分が悪い (!)」などの形容詞文とも同様に、話者が発話時に感じている感覚を表出する表現である。典型的な擬情語のスル形（上記の例のほか、「(ああ,) いらいらする (!)」「(ああ,) ときどきする (!)」などは、

狭義擬態語のスル形（「*ああ、のろのろする！」*ああ、めそめそする！」など）とは、その性質が異なっており、スル形（-ru 形）で発話者の発話時における「感情表出」を表す性格は、オノマトペの中でも典型的な擬情語に見られる文法的特徴であるといえる。

擬情語スル形の特徴的性格

一人称 ru 形で無標のアスペクト形式やモダリティ形式であるという条件下にあって現れる、「感情表出動詞」の下位分類の「感覚」（cf.山岡 1999）を表す。

このことと一致する内容については既に赤羽根(1994)において指摘されており、「うずうず、ぞくぞく、どきどき、はらはら、ひやひや、わくわく」等の擬情語が「一人称を主語とした話者自身の心理を表すものとなる」と述べられ、また、擬情語の中でも、他の赤羽根(1994)で擬情語とされる「いじいじ、うじうじ、おずおず、おどおど、おろおろ、くよくよ」等の擬情語については、「一人称を主語として話者の心理を直接的に表出するのではなく、話者が捉えた観察対象側の心理を表している。それゆえ、事態を過去化したり習慣化した客観的なものにする必要が生じる。また、三人称主語の場合にも違和感があり、同様の客観化が求められる」と述べられている。赤羽根(1994)で述べられている後者の擬情語は、本稿においては狭義擬態語と重なる性質をもった擬情語として位置づけている。赤羽根(1994)が挙げた後者の例「いじいじ、うじうじ、おずおず、おどおど、おろおろ、くよくよ」などの語彙は、外見の様態を描写する狭義擬態語と、内面の感覚や感情を表す擬情語の性質を合わせもったものであり、前者の「うずうず、ぞくぞく、どきどき、はらはら、ひやひや、わくわく」などの擬情語が擬情語の典型的な例として位置づけられるのに対して、後者の例は狭義擬態語と典型的な擬情語の中間に位置するものと考えられる。

これらの狭義擬態語と重なる性質をもった擬情語は、先に挙げた擬情語スル形に特徴的な性質をもっていない。例えば、

「いじいじする」「びくびくする」などの語は態度とともに内面の感情や感覚も同時に表しているが、典型的な擬情語が「ああ！いらいらする！」と言える

ように、「ああ！いじいじする！」「ああ！びくびくする！」とは言えない。ここからも、狭義擬態語と重なる性質をもった擬情語が典型的な擬情語とは性質が異なることがわかる。これらは、本節のまとめのところで挙げるオノマトペのイメージ図 1 の擬情語 2 の(d)である。このような擬情語を典型的な擬情語と区別するときには、便宜上、典型的な擬情語を擬情語 1 と呼び、これらを《狭義擬態擬情語》という意味で擬情語 2 と呼びことにする。

1.3. スル形をとらない狭義擬態語について

一方、スル形をとらない擬態語については次の 3 つの性格が考えられる。擬態語の 1 は大澤(伊藤 2002)で述べたところの「狭義擬態語がスル形を持つ場合の要因」と共通している。

スル形を持たない擬態語 1~3

- 1 本来既存の動詞を形容する動作・作用の様態を表す擬態語が新たな動詞を作る必要なく修飾語のままであるもの
- 2 意味的にスル以外の形式動詞（特に「{ニ/ト}ナル」）あるいは結果相を表すシテイル形と結びつくもの
- 3 擬態語の中でも擬音語に近い性質をもった語で、擬音語と同様に引用的な性格を保持しており、語としての概念化（抽象化）が殆ど進んでいないと考えられるもの（そのため、それらの多くはトを伴い、引用句的に用いられる。）

スル形を持たない擬態語は、実際には上に挙げた 3 つの性質の複数を同時に合わせもっていることが多いと考えられる。例えば、「くたくた」「へとへと」という語は、既存の動詞「疲れる」という動作・作用を形容する様態であるため（性質 1）、スル形を持たないと説明することもできるが、「くたくたに疲れる、へとへとに疲れる」、「くたくたになる、へとへとになる」というように、両者は《「疲れた」結果の状態」を形容して表す語であるため（性質 2）、スルのような《動き》を表す形式とは結びつかないと説明することができる。

性質 3 は擬音語と共通の性質をもった擬態語のために設ける。純粋に外界の音を言語化した擬音語で擬態語に意味の拡張を起こしていない擬音語の段

階においては、殆どの語がスル形を持たない。擬音語にスルがつかないのは、擬音語が音象徴としての引用的性格をもっているためだと考えられる。このとき、そのままの形で場面において引用される場合と、「と」をともなって文中に引用される場合とがある。人の声を模した擬音語は、より大きな意味のまとまりがある引用句や引用節や引用文につながる、単音形式の引用句と言うこともできる。擬音語のような引用としての性格を保持している形式は、抽象化やそれにとまなう文法化が起こりにくいと考えられる。

2. まとめ

本節では、具体から抽象へ、引用的な性質をもつ典型的な擬音語オノマトペから概念化された狭義擬態語そしてそれぞれ典型的な擬情語 1 と擬情語 2 (狭義擬態擬情語) へとという流れで、それぞれの段階でスル形の性質が異なっていることを指摘した。擬態語の中では典型的な外観の様態を表す狭義擬態語から、目に見えない内面の様態を表す擬情語までが連続して存在していると捉えることができる。これらのイメージを示すと次の図 1 のようになる。

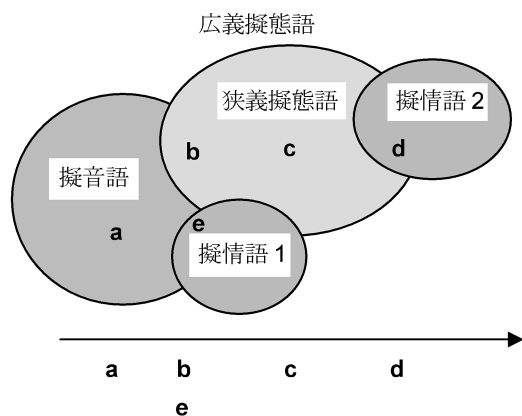


図 1 擬音語・擬態語・擬情語の段階イメージ

■擬音語 1 (典型的な狭義擬音語)

a (例 1) ザーザー《雨の音》; 雨が *ザーザーする。

ザーザー(と)降る。

(例 2) ピヨピヨ《ヒヨコが鳴く声》; *ピヨピヨする。

ピヨピヨ(と)鳴く。

■擬音語 2 (狭義擬態擬音語)

b1..... (例 1) どやどや《音をともなって大勢の人がつめかける様子》; *どやどやする。 / どやどや(と)押しかける。

b2..... (例 2) ドンドン《戸を強く叩く音》; ドンドンする。《音をともなって戸を強く叩くこと》 / ドンドン(と)戸を叩く。

■狭義擬態語 1 (典型的な狭義擬態語)

c1..... (例) うとうと《眠りそうな様子》; うとうとする。

/

*うとうと(と)眠る。

c2..... (例) のろのろ《動作が遅い様子》; のろのろする。 /

のろのろ(と) {歩く / 運転する...}。

c3..... (例) へとへと《疲れている状態》;

*へとへとする。(→ へとへとになる。)

/

*へとへと(と)疲れる。(→ へとへとに疲れる。)

■擬情語 2 (狭義擬態擬情語)

d..... (例) びくびく《身体が震えている様子》《恐れや不安を抱いている様子》; びくびくする。 / びくびく(?)と震える。

■擬情語 1 (典型的な擬情語)

e..... (例) ときどき《緊張している様子》; ときどき(*と)する。 / 心臓がときどき(*と)鳴る。

異なる言い方をすれば、本稿は、オノマトペにおけるスル形の持つ段階的な特徴を、オノマトペの擬音語から擬態語へ、狭義擬態語から典型的な擬情語へとという意味拡張の中で積極的に捉えることができるのではないかという考察を提示するものである。

注

1. 浅野(1978)で「擬態語」とされている見出し語 754 語のうち、筆者大澤が「擬音語」とであると判断した 61 例を除いた 693 語を広義擬態語として取り上げている。広義擬態語は擬情語 70 語と残りの狭義擬態語 623 語を合わせたものである。
2. 中北(1991)では「よちよち」に「する」がつくとあるが、筆者大澤は「よちよち」にはスルは殆どつかないと思われる。
3. 「B-3 感覚変化」の「肩が凝る」という表現は「肩が凝った」という完了を表すタ形で表すことができる。こちらに該当するオノマトペは狭義擬態語の中でも感覚の変化の意味を表すもので、身体感覚が変化した結果の状態に焦点が当てられている語である。例としては、(1)「～だ、～です」の形で

「もうクタクタだ。」、(2) 体言止めの形で「もうクタクタ。」、(3) 「～になる」という結果相を表す形式で、「クタクタになった。」などが挙げられる。「C-3 感覚描写」を表す例は、「～ている」形が用いられるが、オノマトペ語彙の中では、外からの描写が可能な狭義擬態語の性格を合わせもった、感覚を表す擬情語が該当すると考えられる。例えば、「(肩を揉みながら) コリコリしていますね」「(相手の顔を見て) 顔がカッカカッカしているよ」などの例が挙げられる。

参考文献

- 赤羽根義章(1994)「擬情語の意味機能—擬情語+する、している」をめぐって—『宇大国語論究』5
- 浅野鶴子、他(1978)『擬音語・擬態語辞典』(『角川小辞典』12) 角川書店
- 大澤(伊藤)理英(2002)「オノマトペに関する考察：擬音語と擬態語間の共感的比喩表現について」、『日本エドワード・サピア協会 研究年報』16,55-66
- 大澤(伊藤)理英(2004)「中古の比喩表現について」『人間文化論叢』6(2003年度)お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 105-117
- 大澤(伊藤)理英(2005a)「中古『～メク』におけるオノマトペの比喩による意味拡張について」、『人間文化論叢』7(2004年版)お茶の水女子大学大学院人間文化研究科,301-314
- 大澤(伊藤)理英(2005b)「中古～中世の『～メク』におけるオノマトペの比喩による意味拡張について」、『日本エドワード・サピア協会『研究年報』19,27-41
- 大澤(伊藤)理英(2006a)「中古～中世の「～メク」におけるオノマトペの比喩による意味拡張について 感覚・感情を表す事例の分析」、『韓国日語教育学会誌『日本語教育研究』11,105-119
- 大澤(伊藤)理英(2006b)「中古～中世の「～メク」におけるオノマトペの比喩による意味拡張 中古～中世

の通時的分析結果および意味拡張モデルの提示」、『韓国日本学会誌『日本学報』69,53-65

- 大澤(伊藤)理英(2006c)「オノマトペにおける～スル形の考察」、『日本認知言語学会論文集』6, J C L A 6(2006年度版),310-320
- 中北美千子(1991)「擬音語・擬態語と形式動詞『する』の結合について」、『国文目白』31,日本女子大学国語国文学会
- 山岡政紀(1999)「感情表出動詞の文法的特徴」『日本語日本文学』9,創価大学日本語日本文学会
- 山梨正明(1988)『比喩と理解』大学出版会
- Lakoff, George(1987)*Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・梅原大輔・大森文子・岡田禎之訳 1993『認知意味論: 言語から見た人間の心』、紀伊国屋書店)
- Lakoff, George & Zoltan Kövecses.(1987)The cognitive model of anger inherent in American English. In: D. Holland and N. Quinn (eds), *Cultural models in language and thought*. New York: Cambridge University press.
- Taylor, John R.(1995b)*Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistics Theory*. Clarendon Press. (辻幸夫訳 1996『認知言語学のための14章』紀伊国屋書店)
- Taylor, John R.(2002)*Cognitive Grammar*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Ullmann, Stephen.(1962)*Semantics: An introduction to the Science of Meaning*, Basil Blackwell & Mott, Oxford. (池上嘉彦訳、1969、『言語と意味』、大修館書店)
- Wittgenstein, L.(1953)*Philosophical Investigations*. (trans. by G.E.M. Anscombe) Basil Blackwell/ Macmillan. (藤本隆志訳. 1976.『哲学探究』大修館書店)

おおさわ りえ／韓国放送通信大学校 人文科学大学 日本学科
rie.osawa@gmail.com

A study of mimetic word + *suru* in Onomatopoeic Words

OSAWA Rie

Abstract

Onomatopoeia, mere verbalization of the sounds of external world, is not followed by 'suru' in the suffix position except for few exceptions. On the other hand, most vocabulary which will be regarded as the group of mimetic words in a sense that it represents emotional feelings or physical senses is followed by 'suru' (e.g. iraira-suru, karikari-suru, mukamuka-suru, wakuwaku-suru, dokidoki-suru etc.). The group of mimetic words except for the group of mimetic words which represents emotional feelings or physical senses, will be divided in two groups where one takes 'suru' in the suffix position and the other does not. Grammatical properties of these repeated-form onomatopoeia are based on cognitive factors, and explained as appearance of different meaning properties between the groups of Japanese onomatopoeia.

【Keywords】 mimetic words, *suru*, onomatopoe

(Department of Japanese Studies, College of Liberal Arts, Korea National Open University)

コア図式を用いた多義的複合動詞 「～たつ」の意味記述

小浦方 理恵

要 旨

本研究では、習得が難しいとされる多義的複合動詞学習を支援する方法を考えることを目的としている。そこで、複合動詞後項「～たつ」を一つの事例として、多義語習得の問題点を解決できるような意味記述をコア図式を用いて行った。その結果、「～たつ」の多様な意味は一つの図式で説明できること、また、類義表現との意味的差異や、単純動詞と「～たつ」を伴う複合動詞の意味的差異もコア図式によって説明可能なことを示した。

【キーワード】多義語、 複合動詞、 ～たつ、 コア図式

1. はじめに

1.1 研究目的

日本語複合動詞の習得は、前項動詞と後項動詞の意味の相互作用が複雑なことから、上級レベルの学習者であっても難しいと言われている（森田 1978、松田 2004）。本研究は多義的複合動詞の学習を支援することを目的とし、その基盤的研究として多義的複合動詞後項「～たつ」の意味を一つの事例として分析を行い、意味記述をしたものである。ここでいう複合動詞としての「～たつ」とは、「そびえたつ、香りたつ」のように前の動詞、つまり前項動詞の連用形に「たつ」が結合したものを指す。

1.2 対象語「～たつ」とその学習

複合動詞後項「～たつ」について考える前に、本動詞「たつ」について簡単に紹介したい。本動詞「たつ」は基本動詞の一つであり、「立つ、建つ、経つ、起つ、発つ」と様々な漢字で表記され、それほど多様な意味に広がっている多義語である。実際、『大辞林 第二版』の「たつ」の項目には21もの用法が並んでいる。また、「たつ」の意味にしたがって異なる漢字が当てられるといっても、その用法ごとに意味がはっきりと区別されているわけではなく、「たつ」の意味は重なり合い、混合している。さらに、本動詞「たつ」から派生したと考えられる本研究対象である複合動詞「～たつ」についても、『複合動詞資料集』（1987、野村・石井）には、「V1+たつ」として57項目報告されていることから、生産性の高い複合動詞後項だということがわかる。また、森田（1989）に「（複合動詞『～たつ』は）本動詞

と同じく意味の幅は広い」とあるように、本動詞だけでなく、複合動詞の意味においても多義的だといえる。

さらに、超級レベルの日本語非母語話者に対し、「～たつ」の学習について簡単なインタビューを行ったところ、用法ごとに別々に覚えたり、基本的な「～たつ」の用法以外は使うことを避けたりするといった回答が得られた。

したがって、「～たつ」は多義的複合動詞後項であり、超級レベルの日本語非母語話者においても、基本的な「～たつ」の用法以外は使わないといったように、まとまった意味をつかむことが難しいと考えられることから、「～たつ」を対象語として決定した。

1.3 多義語習得の問題点

複合動詞習得を困難にさせている大きな原因の一つに、多くの複合動詞が多義的なことが挙げられる。これにより、単純に「前項動詞の意味+後項動詞の意味」と理解することができないのである。また、松田（2004）では、従来の国語辞典、学習辞典の意味記述は多義語の個々の意味とその用例の羅列に留まっており、この記述のままでは学習者を語全体の意味理解に導くようなものになっていないことを指摘している。

多義語習得の問題点については、先行研究をもとに小浦方（2007）が3点にまとめた。

- ①多様な用法をつながりのあるものとして捉えられず、基本的な意味の習得で留まっていること
- ②類義語との意味的差異がわからないこと

③母語の負の転移があること

本研究は習得研究ではなく、意味記述を行うものであるが、最終的な目的は学習者の多義的複合動詞の学習を支援することであるので、この3点を解決できるような支援方法、意味提示方法を目指す。

2. 先行研究

2.1 理論的背景

1.3 で挙げた多義語習得の問題点を解決する可能性があると考えられるのが、認知意味論において共通図式モデル¹⁾の立場に立つコア理論、コア図式論である。コアとは語のすべての意味を包括する概念である。

母語話者は言語使用や学習を通してこのコアを内在化するが、松田・白石 (2006) が述べているように、コアは母語話者であっても通常意識されることはなく、こうした潜在意識下にあるコアを研究者が多くの用例の分析と統合を通して顕在化し、それを可視的にあらわしたものが「コア図式」なのである。つまり、コア理論はコアを明らかにする試みであり、また、コア図式論とはコアを図式化して表す試みであると言える。

以下、コア図式が多義語学習の問題点を解決できると考えた理由を説明したい。コアを日本語学習者の語彙学習支援に応用すると考えたとき、コアは当該語の意味範囲全体を包括するイメージである (松田・白石 2006) ので、見知らぬ用法でもコア図式論によって一つの図で表すことで、自分の持っているその語の意味知識とつながりをもって捉えることができる。よって、多義語習得問題点①を解決できるのではないかと考える。また、類義語との差異をコア図式の差として視覚的に表すことによって、わかりやすくなるとも言える。実際に、松田・白石 (2004) は多義動詞「とる」と「つかまえる」の意味の違いをコア図式で説明している。このことは、多義語習得問題点②に対応できる可能性を含んでいる。最後に、英語教育において田中 (2004) はコアを媒介に母語と英語の関係捉えていくことにより、本来の意味をつかむと述べていることや、

(コアは)『形が同じなら共通の意味がある』という際の共通の意味を示すことで、多様な用法の中に共通した型 (パターン) があるということ、そしてどうして『この場合この動詞が使われているのか』ということを理解することに

つながる。また、英語表現の理解においてコアが媒介になるため、英語と日本語の対応としてではなく、概念のレベルで英語を理解することができ、日本語の干渉を最小限におさえることができる

と述べている (p. 11) ように、母語訳だけではなく、図式を用いて意味を理解する可能性を示している。これは多義語問題点③に対応していると考えられる。以上の理由により、コア図式論を用いることで、多義語習得の問題点を解決できるのではないかと考えた。

さらに、英語教育においてはコア図式を使って多義語の意味提示を行った『E ゲイト英和辞典』がある。日本語教育においても、多義語習得支援のための基礎的研究として、コア図式論を用いて複合動詞の意味記述を行った研究に松田 (2001a, 2001b, 2004)、松田・白石 (2006) などがある。これらは多義的複合動詞「～こむ」「とり～」の意味を記述し、多義語習得の問題点を解決できるような意味提示方法を提案したものである。

2.2 複合動詞研究

まず、複合動詞研究について、簡単にではあるが紹介する。複合動詞は前項と後項の結合によって成り立っているが、姫野 (2003:223-224) はそれぞれの意味的役割について明らかになったことをまとめている。

- (1) 複合動詞は、対立概念ではなく、類似概念を並列させている
- (2) 二つの動詞は、その行為・作用の時間的前後関係を表している場合が多い
- (3) 前項には初発の状態や程度が弱度の状態を表す動詞が、また後項には、進展・終局の状態や程度が強度の状態を表す動詞が来る
- (4) 前項には、何らかの動きを表す動詞、後項には結果を表す動詞が来ることが多い

また、複合動詞の結合条件とその分類に関しては、影山・湯本 (1997) の研究がある。影山らの分類は複合動詞には「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」があると考えている。「統語的複合動詞」とは、意味的に制限がなく、補文関係をとる複合動詞のことであり、「語彙的複合動詞」は意味から見たときに語彙的な結合制限があり、補文関係を取らない複合動詞である。例えば、「飲み始める」は統語的複合動詞であるが、「始める」がついても「飲む」の

意味は限定されない。それに対し、語彙的複合動詞である「飲み歩く」は、「飲む」に「歩く」がつくことによって、「飲む」対象が液体全般から酒類に限定されている。また、補文関係とは「見慣れる」が「見ることに慣れる」と言い換えられるように、前項動詞が後項動詞の目的語（または主語）となる関係である。統語的複合動詞の例としては、「飲み続ける」「飲み終わる」などがあり、語彙的複合動詞の例としては、「飲み明かす」「飲み交わす」などがある。また、今回の研究対象である「～たつ」については、姫野（2003:208）で、「『～たつ』はすべて語彙的複合動詞」だと述べられている。

2.3 複合動詞後項「～たつ」の意味研究

複合動詞後項としての「～たつ」の意味研究には、姫野（2003）と中村（1998）の研究がある。姫野は「～つく」「～つける」「～あがる」「～あげる」などの多義的複合動詞後項の意味・用法を整理・分類した研究であり、その項目の一つとして「～たつ」が取り上げられている。その中で「～たつ」の意味は表1のように分類されている。

表1 姫野（2003）による「～たつ」の分類（姫野, 2003）

「～たつ」の複合動詞	自動詞か他動詞か	意味特徴
1. [が] ～たつ 壁 が そそりたつ	自+たつ=自	直立 (出現)
2. { に に/へ向けて に/へ向かって をめぐして 場所 [を/から] } ～たつ 目的地 へ 向けて 飛び立つ 巣 を 飛び立つ	自+たつ=自	出発
3. 感情 [が] ～たつ 心 が 勇みたつ	自+たつ=自	発露 高揚
4. [が] ～たつ 湯 が 煮え立つ	自+たつ=自	生起 昂進
5. その他 ～を 思い立つ ～が 引きたつ ～が 成りたつ	他+たつ=自 他+たつ=自 自+たつ=自	

また、「思いたつ」「引きたつ」「成りたつ」の意味について、個別に取り上げ説明を行っている。

中村は辞書に登場する頻度の高い457個の複合動詞後項を選び、その中で後項の意味変化が顕著であり、日常よく使われる「～上げる、～合わせる、～入る、～返す、～かける、～切る、～越す、～込む、～出す、～立つ、～立てる、～付ける、～出る、～払う、～分ける」の15個の複合動詞後項について、その意味変化の展開を認知意味論的な立場から考察している。ここでは「～立つ」の意味や意味同士のつながりが図1のように図式化されている。

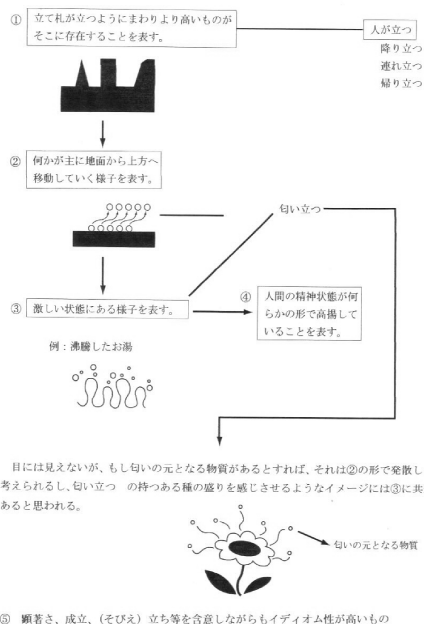


図1 「～立つ」の意味展開プロセス (出典:中村,1998)

以上、姫野と中村の研究により、「～たつ」の意味が整理され、意味の展開プロセスが明らかになった。本論文では先行研究を踏まえ、さらに言語教育に結び付けられるよう、学習者が「～たつ」全体の意味をまとめたものとして捉えられ、類義表現との差異がわかるような意味提示方法を考えたい。

3. 研究課題と分析データ

3.1 研究課題

第一章、第二章では、先行研究で明らかになった多義語習得の問題点、そして多義語習得の問題点を解決できると考えられるコア理論、コア図式論、さらに「～たつ」の意味に関する先行研究について述べてきた。本論文はこれらを踏まえ、多義的複合動詞後項「～

たつ」の意味を一つの事例として分析し、「～たつ」全体を包括する意味とその意味間のつながりを明らかにすることで、コア図式を用いた語彙学習支援の土台の一端を作ることを目的とする。よって、多義的複合動詞「～たつ」のコア図式はどのようなものを明らかにすることを研究課題とし、分析を行った。

3.2 分析データ

姫野 (2003) の「複合動詞リスト」に掲載されている複合動詞「～たつ」50 語に『複合動詞資料集』『逆引き広辞苑』に掲載されていた 13 語を加えた 63 語を分析の対象にした。

さらに、本動詞と複合動詞において現代日本語ではあまり見ない表現については日本語母語話者 23 名にアンケートを取り、80 パーセント以上の割合で使わないという結果になった項目は分析からはずした。

用例については、下記の 9 冊の国語辞典に掲載されていた用例に加え、姫野 (2003) で「～たつ」の分析に用いられた用例も加えた。また、各用例の出典は用例の隣に略語で記した。用例の隣に記述がないものは、筆者の自作文である。

<略語>…『辞書名』

-
- <岩波>…『岩波国語辞典』
 - <外国人>…『外国人のための基本語用例辞典』
 - <森田>…『基礎日本語辞典』
 - <広>…『広辞苑』
 - <新潮>…『新潮国語辞典』
 - <明解>…『新明解国語辞典』
 - <大辞>…『大辞林』
 - <日本>…『日本国語大辞典』
 - <基本>…『日本語基本動詞用例辞典』
 - <姫>…姫野 (2003)

例えば、「<大辞><森田>」と書かれている箇所は、両方の辞書で同じ用例が掲載されていたことを示している。そして、文の前にアスタリスクマーク (*) が付いている用例は、不自然な表現である。

4. 分析結果と考察

4.1 「～たつ」コア図式仮説

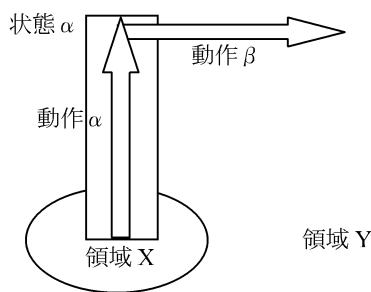


図2 「～たつ」のコア図式

「～たつ」のコア図式を図2のように仮説した。領域 X は主体が存在する領域であり、領域 Y は領域 X の外側に位置する領域である。動作 α の矢印は、主体自身が上への方向性を持つ動的イメージを表している。また、矢印 α の外側の四角 (状態 α) は、上への方向性の静的イメージを表している。簡単に言うと、矢印 α は直立する動作、その外側の四角 α は直立した状態を表している。最後に動作 β の矢印は領域 X から離れたり、出発したりするイメージを表している。これは実際の空間的移動だけではなく、主体の意識が領域 Y へ向かう意味も表す。

「～たつ」は発生、上昇、確立、出発という意味的イメージをその根底に併せもっていると考え、上記の図式をコア図式として仮説した。そして、焦点化の概念を用いて、「～たつ」の多様な用法を説明する。

ところで、コア図式論で重要な概念である「焦点化」について説明を行いたい。焦点化とはコア図式のある部分を「図」(figure)として前景化し、他の部分を「地」(ground)として後景化する操作のことである。コア図式論では、この焦点化の概念を用いて多義語の多様な用法を説明する。コア図式のある部分が「図」として際立つとき、後退する残りの部分が表している意味は「地」に埋没し、背景化されることになるが、背景化された部分の意味は全く消滅してしまうわけではなく、ニュアンスや類義語との意味的差異として反映されているというのがコア図式論の考えである。

さらに「～たつ」の焦点化箇所の組み合わせは複数あり、原理的には「～たつ」のイメージ図式は文脈・状況により、いくつでも描くことができる。以下では、代表的なものとして、4 つの用法にまとめ、

4つのイメージ図式²を示す。4つの用法とは、以下の通りである。

- Aタイプ:「上への方向性を持つ動作・状態」に焦点がある用法
- Bタイプ:「上への方向性をしっかりと持つ(確立する)」ことに焦点がある用法(Aタイプの抽象化)
- Cタイプ:「領域Xから出発する、離れる」ことに焦点がある用法
- Dタイプ:「発生し、上への方向性を持ち、領域Yへ影響を与える」ことに焦点がある用法

次節からは、焦点化の概念と組み合わせてこのコア図式の論理的妥当性を検証する。以下に示すイメージ図式の太線になっている部分は、認知的力点が置かれ焦点化されていることを表し、点線部分は認知されず、背景化されていることを示す。

4.1.1 複合動詞「～たつ」のコア図式の意味タイプ

データを収集し、先行研究をもとにして、すべての意味やニュアンスを表すような図を考案した。その結果、複合動詞「～たつ」はA、B、C、Dの4タイプに分けられた。以下、「～たつ」の意味について記述がある姫野(2003)の分析を参考に「～たつ」の意味をタイプ別に考える。

【Aタイプ】「上への方向性を持つ動作・状態」に焦点がある用法

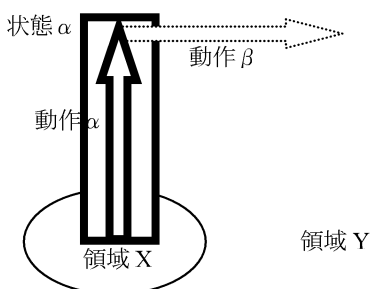


図3 Aタイプのイメージ図式

複合動詞Aタイプは<上への方向性を持つ動作・状態>に焦点が当たっている用法である。このタイプは「～たつ」のプロトタイプの用法であると言え、上への方向性を持つ動作やその状態を表すものであることから、図3のように動作αと状態αが焦点化されている。また、立脚点である領域Xも

意識されている。

複合動詞Aタイプに分類される「～たつ」を下に記す。

降りたつ、下りたつ、切りたつ、ささくれたつ、そそりたつ、そびえたつ、突きたつ、突ったつ、並びたつ、引きたつ、ひったつ

例1から例5は<直立>の意味を表す例である。

- 1.デカン高原の北方に切り立った山々 <姫>
- 2.ささくれ立った板 <広>
- 3.超高層ビルがそそり立つ <広>
- 4.呆然と突っ立つ <広>
- 5.豪邸が並び立つ

例1は山々の表面が切ったように鋭い状態で直立している様子を表している。また、例2は板の表面がささくれた状態で板から直立している様子を表している。また、前項動詞との意味的關係を考えると、前項動詞は直立の様相を表していることがわかる。

さらに、例6、例7の「降り立つ」も複合動詞Aタイプに分類されるものである。

- 6.自家用ジェット機で成田空港に降り立ったプレーヤー <姫>
- 7.黒塗りの車から降り立った政治家 <姫>

しかし、姫野は「降りたつ」の意味について、『降りたつ』は状態性ではなく、人が別の場所からやって来て、その場に姿を現すことを表す(p.209)と述べている。つまり、「降りたつ」の「たつ」が表す意味は<直立>ではなく、今までなかったものや人が姿を現すという<出現>の意味を表すというのである。しかし、<出現>という意味は前項動詞「降りる」からもたらされるもので、「～たつ」が表している意味は<直立した状態>を表しているとも考えることができる。したがって、「降りたつ」を<直立>の意味を持つ用例と同じグループにした。

また、姫野は「降りたつ」について、「降りたつ」はただの登場の意味ではなく、「人物の登場にある種の感慨が込められる」(p.209)というニュアンスを述べている。この「ある種の感慨」をもたらすものについて考えたい。筆者は動作βが「ある種の感慨」というニュアンスをもたらすのではないかと考えている。まず、再度図3を参照されたい。「降りたつ」という複合動詞を使用するとき、話者

の視点は主体の外側、つまり領域 Y にあると言える。よって領域 Y に視点を置いたとき、主体が登場することで、動作αと状態αが焦点化される。またこの場合、主体はその場から離れるわけではないので、動作βは背景化される。しかし、この背景化されている動作βの意味は消えてしまったわけではなく、ニュアンスとして反映され、その意味が先程姫野が述べたような主体の外側にいる発話主体に向かう「ある種の感慨」という効果をもたらすのだと考えられる。

さらに、例 8 と例 9 は複合動詞「引き立つ」である。話者の意識を「引き」、主体の存在が顕在化する意味を表している。

8.味が引き立つ <広>

9. (俳句は) 上の句と下の句を入れ替えるだけで
 けで実に見事に作品が引き立ちます<姫>

【B タイプ (A タイプの抽象化)】「上への方向性をしっかりと持つ (確立する)」ことに焦点がある用法

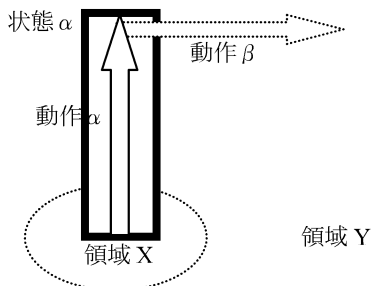


図 4 B タイプのイメージ図式

成りたつ

B タイプのイメージ図式は図 4 のようになる。B タイプは A タイプを抽象化したものと考えられる。B タイプは状態αが表す「上への方向性を持った状態」を抽象化させた、「確立」の意味を持っている。「上への方向性を持った状態がしっかりと保たれる」意味である。B タイプは動作性よりも「確立」という状態性が強く感じられる用例が多く、そのため図 4 では状態αが特に強く焦点化されている。また、主体が存在する領域 X や、動作βは背景化され、ほとんど意識されていない。

複合動詞 B タイプに当てはまる複合動詞「～たつ」は「成りたつ」1 語だけ³である。複合動詞 B

タイプに当てはまる「成りたつ」は「確立」の意味を強く有しており、その事態が成立するだけでなく、それが堅固なものであり、その事態が長い間保持されることを含意している。また、姫野 (2003) でも、「成り立つ」について、「『成り立つ』は、『たつ』に『確立』の意味が含まれる」とある。

以下、複合動詞 B タイプに分類された「成り立つ」の意味について、例を示しながら考察したい。

例 10 から例 12 は「成り立つ」の用例である。

10.契約が成り立つ <広>

11.商売が成り立たない <広>

12.粒子はさらに小さい基本粒子から成り立
ている <姫>

例 10 では、「契約」が結ばれることを表しているが、その「確立」という意味から、契約が簡単に破られるようなものではなく、堅固なものというイメージがある。例 11 と例 12 における「成り立つ」も主語の確立性、完成性を保持する意味を付加する効果が感じられる。

また、複合動詞 B タイプは複合動詞 A タイプに比べ、空間の意味を持たず、ある事態が最終的な局面に「到達」したり、「完了」したりするアスペクトマーカ的な側面を持ち、機能語化が進んだタイプだと言うことができる。よって、B タイプは統語的複合動詞の性格も有していると言えよう。

【C タイプ】「領域 X から出発する、離れる」ことに焦点がある用法

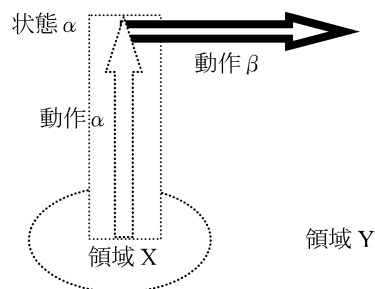


図 5 C タイプのイメージ図式

複合動詞 C タイプは「領域 X から出発する、離れる」ことに焦点がある用法である。C タイプのイメージ図式は図 5 のようになる。C タイプでは動作βが焦点化され、「領域 X から出発する」意味が強く表されるので、図 5 では動作βが最も焦点化されている。

出でたつ、飛びたつ、連れたつ、舞いたつ

例 13 は前項動詞の「連れる」という様相を伴い、家など主体が存在する領域（領域 X）を離れ、買い物へと出発する意味である。

13. 家族と連れ立って買い物に行く <広>

例 13 では「買い物をする店」という目標点が意識されていても、C タイプの「～たつ」は「領域 X から離れる」という意味に焦点が当たっているため、「目標への到着」という意味よりも、「領域 X からの出発」という意味が強く意識されている。

例 14 は複合動詞「飛びたつ」を用いた用例である。例 14 は今まで主体が存在する基盤（領域 X）であった「巣」から離れ、出発する意味である。

14. 巣を飛び立つ <姫>

例 13 と同様に、例 14 も前項動詞「飛ぶ」は出発する様相を表している。また、この場合も主体は何らかの目標点を意識していると考えられるが、そこへの「到着」という意味はあまり感じられず、「巣からの出発」という意味がもっとも強く表されている。

例 15 でも、複合動詞「飛びたつ」が用いられている。

15. 飛びたつ思いで帰郷する <広>

例 14 と同様に、前項動詞「飛ぶ」は出発する様相を表していると考えられるが、この場合、「飛ぶ」は空間的移動の意味ではなく、「飛ぶような速さで」という、より拡張的な意味を表している。また、ここでも「故郷」という目標点は意識されているが、「故郷への到着」という意味はあまり含意されず、「今までいた場所（領域 X）から離れる」という意味を強く表している。

以上、C タイプにおいて、前項動詞は「領域 X から出発する、離れる様相」を表している。C タイプの意味的特徴としては、C タイプの「～たつ」が表す意味は「領域 X から離れる、出発する」にもっとも焦点が当たっているタイプということが出来るが、その目標点はあまり意識されない。また、目標点が意識された場合でも、そこへの「到着」という意味は含意しないと言える。

【D タイプ】「発生し、上への方向性（程度の上昇）を持ち、領域 Y へ影響を与える」ことに焦点

がある用法

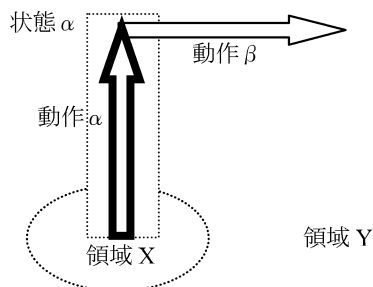


図 6 D タイプのイメージ図式

複合動詞 D タイプは<発生し、上への方向性を持ち、外部に影響を与える>ことに焦点がある用法である。D タイプのイメージ図式は図 6 のようになる。D タイプは「～たつ」の A タイプと C タイプを併せ持った概念だと言え、「主体が発生し、上への方向性を持つことで顕在化し、その結果、領域 X だけに留まらず、領域 Y に出発する」という一連の動作を表している。よって、図 6 のように動作 α と動作 β が焦点化されている。D タイプは非常に動的な用法であるので、焦点化によって、<発生><上への方向性><出発>という要素のうちのどれが表されるかが決まる。また、基盤である領域 X には焦点が当たらず、意識化されることは少ない。

いきりたつ、勇みたつ、色めきたつ、浮かれたつ、浮きたつ、うねりたつ、怒りたつ、思いたつ、香りたつ、薫りたつ、気負いたつ、競いたつ、狂いたつ、騒ぎたつ、ざわめきたつ、せきたつ、たざりたつ、たけりたつ、煮えたつ、においたつ、煮たつ、逸りたつ、奮いたつ、吠えたつ、みなざりたつ、燃えたつ、萌えたつ、沸きたつ、湧きたつ

D タイプにおいては、A タイプや C タイプとは異なり、前項動詞だけでも意味が通じ、「たつ」のもつ意味は薄くなっている。しかし、「たつ」の意味は薄くなったと言っても、「たつ」のコアイメージは反映されている。例えば、前項動詞は自然現象や感情など、無意思的に発生するものが多い。また、前項動詞はその行為・作用の過程にある程度の度合いが考えられるものである。したがって「売る、買う、食べる、入れる、閉じる」などの動詞とは結合しない。D タイプの「～たつ」は<直立>や<出発>という意味を強く表しているのではなく、前項動

詞の表す現象をよりプロセス的に捉えるような機能を持っていると考える。

この複合動詞 D タイプは姫野による「～たつ」の研究結果の中で、「感情の発露・高揚」に分類されたタイプと、「生起・昂進」に分類されたタイプ⁴を合わせたものである。筆者は「感情の発露・高揚」と「生起・昂進」に分類された複合動詞「～たつ」において、複合動詞後項「～たつ」が表す意味は同一のものであり、「感情の発露・高揚」と「生起・昂進」という二つの分類の意味の違いはその主体が感情であるか、現象であるかの差によるものと考えている。

また、武部（1953）には、「強意的意味を添える後項動詞」として、「燃えたつ」が挙げられていた。しかし、複合動詞 D タイプにおける「～たつ」の意味は前項動詞に強意的意味を添加するだけのものではないと考える。では、「～たつ」をつけることによってどんな意味がもたらされるかという、ある現象を「発生→程度の高まり→外部へ影響する」という風に、プロセス的に捉えることができ、前項動詞の表す現象の様子をより詳細に述べる機能があると考える。しかし、「浮かれたつ」という複合動詞が文脈によって「浮かれる」現象の発生を表したり、現象の程度の高まりを表したりするように、「～たつ」が表す<発生><程度の高まり><外部への影響>の意味のどの範囲を強く表すかは、前項動詞の意味や発話者がどこに最も焦点をおくかによって変わってくる。また、動作βに焦点が置かれた場合、主体は領域 X を離れ、領域 Y へ影響を与えるが、主体がどのように領域 Y へ影響を与えるかは、前項動詞の意味や文脈によって異なる。

以下、例文を挙げながら複合動詞 D タイプの説明を行いたい。

例 16 の「いきり立つ」は現在では一語化され、単純動詞「いきる」を単独で使うことは見られないが、『広辞苑』によると「いきる（熱る）」は「①むし熱くなる。ほてる。いきれる。②いきまく。りきむ」とあり、「いきり立つ」においては②の意味で「いきる」が用いられている。したがって、例 16 における「いきり立つ」の意味は、不公平な判定に対し、「いきる」という現象が発生し、その程度が高まっている状況を表している。

16.不公平判定にいきり立つ <広>

例 17 の「勇みたつ」は、「勇む」という現象が発

生し、その程度が高まっていることを表している。

17.心が勇みたつ <姫>

例 18 から例 20 における「～たつ」の意味も同様に、「色めく」という現象の発生とその程度の高まり、「（気分が）浮く」という現象の発生とその程度の高まり、「うず潮がうねる」という現象が発生し、その程度の高まりという意味を表していると解釈できる。

18.すわとばかりに色めき立つ <広>

19.心の浮き立つリズム <広>

20.うず潮がうねり立った <広>

例 21 の「香りたつ」、例 22 の「薫りたつ」については、「香り・薫り」の発生とその高まり（この場合は顕在化）、という意味に加え、その結果、「香り・薫り」が領域 X を離れ、領域 Y へと広がる様子、つまり香り（薫り）が外部へ影響する様子も表している。しかし、前述したように、「～たつ」が表しうる<発生><程度の高まり><外部への影響>の意味のどの範囲を強く表すかは、前項動詞の意味や発話者がどこに最も焦点をおくかによって変わってくる。

21.挽きたてのコーヒーが香りたつ

22.アルマは喪服に身を包み、憂いに沈んでいた…その立ち居に薫り立つ美しさがあった。
<姫>

例 23 の「燃え立つ」も「香りたつ」や「薫りたつ」と同様、「燃える」という現象が発生し、その程度が高まるだけでなく、その現象が広がり、外部へと影響する様子を表している。これは、「萌えたつ」でも同様である。

23.炎が燃え立つ <広>

また、例 24 や例 25 の例文は「逸る」「奮う」という現象が発生し、程度が高まるという意味を表していると考えられるが、それらの動詞に複合動詞後項「～たつ」をつけることによって、領域 Y へ向かう意識が強くなっているニュアンスがある。これも、動作βの領域 Y へ向かう矢印によるものである。

24.逸り立つ心を抑える <広>

25.勝報に奮い立つ <広>

先程、動作βが<領域 Y へ影響を与える>という意味について、主体がどのように領域 Y へ影響を与えるかは、前項動詞の意味や文脈によって異なると述べたが、「～たつ」の複合動詞 D タイプが無

意思動詞として用いられた場合（例 21、例 22、例 23）、動作βは領域 Y から見ている観察者に向かう動作を表すことが多く、「～たつ」の複合動詞 D タイプが意思動詞として用いられた場合（例 24、例 25）、動作βは主体による何らかの能動的な動作を意味することが多い。

例 26 の「思いたつ」については、武部の研究では、「動作の起こり方を示すもの」に分類され、「開始」を表すと示されていた。確かに、「思いたつ」は「思い」が発生、開始する様子を表している。姫野の研究（p.211）でも、「『思いたつ』は、何かしようという『思い』が『たつ＝生起する』と解せられる」との記述がある。しかし、「思いたつ」にはある思いが生起した後、行動に移すというニュアンスも持っている。詳しいことは 4.2.1 で述べるが、筆者はそのニュアンスの理由として、領域 X を出発点とし、外である領域 Y に向かうという動作βの意味によってもたらされると考えている。

26. 仕事に疲れ、突然思い立って行ったサイパン<姫>

最後に、D タイプに分類された複合動詞は 29 例と非常に多い結果になった。この理由について簡単に考察したいと思う。先程述べたように、D タイプは本動詞「たつ」のもつ意味が薄まり、前項動詞の現象が<発生><程度の高まり><外部への影響>のどの段階にあるのかを表している。これは「文法化」の一種と考えることができる。河上（1996: pp179-180）によると『『文法化』とは、もともと内容語だったものが、次第に機能語としての文法的な特質、役割を担うようになる現象』とある。D タイプの「～たつ」は、まったく内容語の意味を失っているわけではないが、A タイプや C タイプのように、動作を表す意味ではなく、ある現象の起こり方を示している点から、他の複合動詞タイプに比べ、文法化が進んでいる状態だと考えることができる。また、田辺（1996）では文法化が進むことによって、結合する複合動詞前項の範囲が拡大されることが示されている。田辺の研究と同様に「～たつ」の D タイプも文法化が進むことによって結合する複合動詞前項の範囲が拡大され、その結果、D タイプに分類される複合動詞の数が多くなったと考えられる。しかし、先述したように、前項動詞はどんな動詞でも結合できるわけではなく、コア図式に示されるように、ある現象が発生する意味をもち、そしてある

程度の度合いのある動詞と結合するという意味的制限を持っている。さらに早瀬・堀田（2005）では、literati という英語表現がもとなった混成語を例として、ある定着度の高い表現から様々な類似の表現が新しく作られ用いられていく中で、今まで存在しなかった新しい意味ができ、その表現が定着し、生産性が高くなることを示した。これと同様に、D タイプのある表現の定着度が高くなった結果、D タイプの表現に分類される複合動詞が創発され、数が増える結果となったとも考えられる。

4.1.2 意味タイプのまとめ

以上示した複合動詞「～たつ」の意味タイプをまとめると稿末資料 1 と稿末資料 2 のようになる。稿末資料 1 の 4 つのイメージ図式は、上部にある「～たつ」のコア図式に焦点化という認知的操作を施すことによって生じたものである。つまり、「～たつ」のコア図式に文脈や話者の視点などによって焦点化を行うことで、下部のイメージ図式の 4 つのタイプが生じると考えられる。よって、「～たつ」の多様な意味は一つのコア図式で表すことができるのである。そして、稿末資料 2 は意味タイプ別にそれぞれの表す意味と用例をまとめたものである。

また姫野には、「『～たつ』は、すべて語彙的複合動詞」である（p.208）との記述があるが、分析の結果、B タイプと D タイプは語彙的複合動詞でありながらも、動作の起こり方を示している点で統語的複合動詞としての側面も持っていることがわかった。

なお、「～たつ」は意思動詞だが、無意志動詞の場合もある。これらは視点を内（領域 X）に置くか、外（領域 Y）に置くかという視点の問題と、主体が意思を持つものかどうかに関わっている。主体が意思を持ち、内の視点に立つと、意思動詞になり、主体が意思を持たなかったり、外の視点に立つと無意志動詞化する。したがって、動作αと動作βの意味も意思的な動作を表す場合と、無意志的な動作、つまり、領域 Y から眺めた場合の見え方としての動きを表す場合とに分かれる。両者ははっきりと区別される場合も多いが、単に視点の置き方による違いの場合もある。「ざわめきたつ」を例にすると、「私たちは一斉にざわめきたつた」では、視点は領域 X に置かれ、動作α、動作βは意志的な動作を表すが、「木々がざわめきたつ」では視点は領域 Y に置かれ、無意志的な動作を表す。そのため、今回はこれ

らの意味の違いを明確には区別しなかった。

4.2 類義表現、単純動詞との意味的差異

4.1 では、「～たつ」の多様な意味をコア図式によって、一つの図式で統一的に説明できることを示した。そして、背景化されている部分の意味もまったく消えたわけではなく、ニュアンスとして「～たつ」の意味に反映されていることが明らかになった。

以下では、4.1. で明らかになったことを用いて、「～たつ」と類義表現との意味的差異を説明する。また、単純動詞と「～たつ」を伴う複合動詞の意味的差異を説明することで、「～たつ」がもつ意味について考察を行う。

4.2.1 類義表現との意味的差異

【燃えたつ／燃え上がる、舞いたつ／舞い上がる、湧きたつ／湧きあがる】

例 27 と例 28 の意味的差異を考えると、例 27 の「燃え立つ」は「燃える」という現象が＜発生＞し、盛んに燃えている様子を表している。また、例 28 の「燃え上がる」は「燃える」という現象の程度が高まっていることを表している。つまり、「燃え立つ」は「燃える」現象の発生も含意する表現であるのに対し、「燃え上がる」は「燃える」という現象の発生という意味よりも、「燃える」現象の高まりを表していることがわかる。

27. 炎がメラメラと燃え立つ

28. 炎がメラメラと燃え上がる

例 29 と例 30 の意味的差異については、どちらも床にあったほこりが舞い、上に上がる現象を表している。しかし、例 29 はほこりが今までいた領域外の別の場所へ行くニュアンスを持っているが、例 30 では「ほこりが上がる」という現象に焦点が当たっている。

29. ほこりが舞いたつ <広>

30. ほこりが舞い上がる

例 31 と例 32 はどちらも「大学へ行きたい気持ち」が発生している状況を表している。しかし、例 32 が気持ちの発生を表しているだけなのに対し、例 31 は気持ちが発生し、「いてもたってもいられない」ような心理状態にあるニュアンスを持っている。これは、「～たつ」のコア図式の動作βにあるように、「～たつ」が＜発生＞だけでなく、その結果、自分の外の領域である領域 Y を意識する意味を持っていることから説明できる。

31. 大学へ行きたい気持ちが湧きたつ

32. 大学へ行きたい気持ちが湧き上がる

【騒ぎたつ／騒ぎまくる】

「騒ぎたつ」と「騒ぎまくる」の違いとしてまず、「騒ぎまくる」は「騒ぎたつ」に比べ、俗語的だという文体の違いが考えられるが、二つの表現の意味を考えると、どちらの表現も「騒ぐ」という現象の程度がより強まる意味を持っている。この二つの表現の意味的差異としては、例 33 は審判の判定に対し、抗議し、訴えるような状況が考えられるのに対し、例 34 は観客同士の内輪内で騒いでいるイメージがある。このイメージの差は、D タイプで説明したように、領域 X だけではなく、領域 Y へ影響を与えるという意味を含んでいることから説明できる。

33. 審判の誤審に対し、観客は騒ぎたつ

34. 審判の誤審に対し、観客は騒ぎまくつ

【思いたつ／思いつく】

姫野 (2003: 211-212) では、「思いつく」と「思い立つ」の違いについて、「解決策を求めるプロセスを経て、良いアイデアに『つく』場合の『思いつく』とは異なり、『思い立つ』は事前のプロセスを前提とはしていない」と述べている。つまり、例 35 は「大学に入って勉強する」という思いが発生することを表すのに対し、例 36 は何かの解決策として「大学に入って勉強する」というアイデアに到達した様子を表しているのである。その考察に加えて、例 36 はそのアイデアに到達したことに焦点が当たっているのに対し、例 35 では、「大学に入って勉強する」という思いが発生し、それに向かって行動を起こすようなニュアンスを持っている。このニュアンスも「～たつ」のコア図式にある動作βにより、外部を意識し、それに向かっていく意味をもっていることから説明できる。

35. 私も大学に入って勉強しようと思い立った
<姫>

36. 私も大学に入って勉強しようと思いついた

4.2.2 単純動詞と「～たつ」を伴う複合動詞の意味的差異

ここでは、単純動詞と「～たつ」を伴う複合動詞の意味的差異を各タイプ別に考察する。

【A タイプ】

A タイプでは、「～たつ」が＜空間的に直立した状態＞を表す意味がほとんどである。また、例 38 や例 40 のように、「～たつ」なしでは意味が成立しにくいものも多い。

37.切り立った崖 <広>

38.*切った崖

39.鉄塔が突っ立つ <広>

40.*鉄塔が突く

よって、A タイプでは、「～たつ」の意味が強く反映され、前項動詞と後項動詞「～たつ」で意味を分担していると考えられる。そして、例 41 と例 42 の意味、そして、例 43 と例 44 の意味を比べると、「～たつ」がつくことによって、<直立>という意味が付加されていることが分かる。

41.指先がささくれ立つ <広>

42.指先がささくれる

43.高級車から降り立った政治家 <姫>

44.高級車から降りた政治家

しかし、例 43 の「降り立つ」における「～たつ」が表す意味は<直立>だけではない。A タイプの部分で説明した通り、「降り立つ」における「～たつ」の意味は、「観察者に対するある種の感慨」というニュアンスも持っており、これは背景化されている動作βによってもたらされたニュアンスだと考えられる。

【Bタイプ】

B タイプでは、「～たつ」が<確立>の意味を表している。また、例 46 や例 48 のように、「～たつ」なしでは意味が成立しにくい。よって、複合動詞 B タイプでも複合動詞 A タイプと同様に、「～たつ」の意味が強く反映されていると言える。

45.その考えも成り立つ <広>

46.*その考えも成る

47.舞台はみんなの力で成り立っています
<姫>

48.*舞台はみんなの力で成っています

また、複合動詞 B タイプでは、「～たつ」が確立性、完成性を保持する意味を付加していると考えられる。

【Cタイプ】

C タイプは、「～たつ」が<出発>の意味を表している。例 50、例 52、例 54 のように、「～たつ」がなくても意味が通じるが、これらの例では、例 49、例 51、例 53 に存在した<出発>という意味がなくなり、文の意味が変わってしまう。

例えば、例 49 では、どこか目標点に向かって、

飛行機が出発する様子をイメージし、「飛行場を」のヲ格は出発点の意味として用いられている。それに対し、例 50 では「飛行場を」のヲ格は飛ぶ場所を表しており、また飛んだ後に飛行場へ戻ってくるイメージがある。例 51 では、鶴が舞うようにどこかに向かって出発の様子を表しており、前項動詞である「舞う」は実際に踊るのではなく、「舞うように飛ぶ」という様相を表しているだけである。しかし、例 52 では「舞う」は動作として捉えられ、<出発>という意味は全く消えてしまっている。

49.飛行場を飛び立つ <広>

50.飛行場を飛ぶ

51.鶴が舞い立つ <広>

52.鶴が舞う

53.ほこりが舞い立つ <広>

54.ほこりが舞う

したがって、複合動詞 C タイプは、単純動詞に「～たつ」をつけることによって、<出発>という意味を付加するものと考えられる。またこのタイプは語彙的複合動詞の性格を強く有していると言える。

【Dタイプ】

単純動詞と「～たつ」を伴う複合動詞の意味的差異が問題となるのは D タイプである。A タイプから C タイプは主に本動詞「たつ」の意味を強く有しており、「前項動詞の意味+『たつ』の意味」と考えられる場合が多い。しかし D タイプの場合は、本動詞「たつ」のもつ意味は薄くなり、「前項動詞の意味+『たつ』の意味」と考えることが難しい。だが、前述したように、D タイプの意味はただ前項動詞に強意的意味を添えるだけのものではない。意味が薄くなったと言っても、「～たつ」のコア図式は反映され、<前項動詞が表す現象が発生し、その程度が高まり、そして領域 Y へ影響を与える>という一連のプロセスを表している。

例 55、例 57、例 59 は「ある現象の発生とその程度の高まり」を表している用例である。例 55 と例 56、例 57 と例 58、例 59 と例 60、つまり単純動詞と「～たつ」を伴う複合動詞の意味的差異を比べると、例 55 は「木々がざわめく」という現象が<発生>し、その<程度が高まっている>ことを示しているのに対し、例 56 は「木々がざわめく」という現象のみを表している。例 59 と例 60 は「犬が盛

んに吠える」という現象は同じであるが、例 59 の方がよりその程度が大きく、犬が吠える相手に向かっていているというニュアンスを持っている。これは、実際には主体である犬は吠える相手には移動していないが、動作βの意味が反映され、「吠える」より「吠えたつ」の方がより相手に向かう意識が起こるからであろう。また、単純動詞のみよりも、「～たつ」を伴う複合動詞の方がより動きが激しく、動的な印象があるが、これも「～たつ」のコア図式が示すように、ある一つの現象を<発生→程度の高まり>とプロセス的に捉えることから来ていると考えられる。

55.周りの木々がざわめき立つ

56.周りの木々がざわめく

57.場内が沸き立つ <広>

58.場内が沸く

59.犬が盛んに吠えたつ

60.犬が盛んに吠える

さらに、例 61 と例 62、例 63 と例 64、例 65 と例 66、例 67 と例 68、例 69 と例 70、つまり単純動詞と「～たつ」を伴う複合動詞の意味的差異を比べると、先程と同様に「～たつ」を伴う複合動詞の方が、前項動詞の表す現象を<発生→程度の高まり>と、より動的に捉えている。また、「怒りたつ」「逸りたつ」「騒ぎたつ」「湧きたつ」は前項動詞の表す現象の程度が非常に高まり、「いてもたってもいられない、今の状況を離れ、何かをせずにはいられない」というニュアンスを持っている。このニュアンスも、動作βの表す領域 Y へと向かう意味が反映されていることから説明できる。例えば、例 70 は「相手に見くびられないように意気込む」様子を表しているが、例 69 では、より意気込む程度が高まり、意気込むだけではなく、外に向かい、新たな行動を起こすような意味合いも持っている。

61.怒濤のように怒り立つ群衆

62.怒濤のように怒る群衆

63.逸り立つ気持ちを抑えながら看板をくぐった

64.逸る気持ちを抑えながら看板をくぐった

65.旅心が騒ぎ立つ

66.旅心が騒ぐ

67.創作意欲が湧きたつ

68.創作意欲が湧く

69.見くびられまいと気負い立つ

70.見くびられまいと気負う

例 71 の「香りたつ」については、魅力が香りとしての発生し、顕在化し、それが領域 X だけではなく、領域 Y へと広がる様子、つまり香りが外部へ影響する様子も表している。さらに、この広がりには動作βの矢印で示されるような、方向性を持っているものだと考えられる。また、「香りたつ」「薫りたつ」、そして「においたつ」について、「香りの輪郭がくっきりしているイメージがある」という母話話者からのコメントがあったが、これは、「～たつ」がつくことによって、「香りが広まったり、漂ったりする」のではなく、動作βが表しているような、何らかの方向性を感じさせることから来る印象だと考えられる。例 71 と例 72 を比べると、例 71 はより<発生→顕在化→広がり>と動的な動きが感じられる。また、例 72 は香りが漂っているイメージがあるのに対し、例 71 ではその香りが発話者へと向かうような方向性を感じることができる。

71.香り立つクレオパトラの魅力

72.香るクレオパトラの魅力

したがって、D タイプにおいては、単純動詞に「～たつ」がつくことによって、「～たつ」のコア図式が示すように、その現象をより動的に、プロセス的に捉える効果を持っていると言えよう。また、現象の発生、程度の高まりに加え、実際に動作としては起こらなくても、主体の外側に対する意識が強く感じられるようになる。

以上、単純動詞と「～たつ」を伴う複合動詞の用例を対比することによって、複合動詞後項「～たつ」のもたらす意味を明らかにした。また、その意味やニュアンスもコア図式から説明できることを示した。

5. 結論

5.1 まとめ

本研究では、多義的複合動詞後項の学習支援方法を考えることを出発点として、「～たつ」を一つの事例としてコア図式による意味記述を行った。

その結果、「～たつ」のもつ様々な意味は、一つの図式で説明することが可能であることを示した。また、「～たつ」のコア図式を用いることで、多義語習得の問題点であった類義表現との意味的差異や、単純動詞と「～たつ」を伴う複合動詞の意味的差異を説明できることを示した。

5.2. 日本語教育への示唆

今回は意味記述の段階であり、この研究結果をすぐに日本語教育の現場に応用し、学習者に提示することは難しいかもしれない。しかし、「～たつ」の多様な意味を一つの図式に示すことによって、「～たつ」の意味を統一的に捉えることができ、学習者に説明する際に有益なツールになりうると考える。中級以上の学習者になると、比喩的な意味を教えたり、類義語との意味の違いについて学習者から説明を求められたりするときが多くなる。そのとき、コア図式を用いることで、学習者がすでに持っている「～たつ」の意味と関連性を持たせながら説明できる可能性がある。また、現行の国語辞典や学習者母語による対訳が載っている学習辞典では、類義表現との意味的差異や、複合動詞後項「～たつ」がつくことによってどのような意味的差異が生じるかはほとんど説明されていない。この意味的差異をコア図式の差として簡単に説明できる可能性を示すことは、学習者の語彙習得にとって大きな効果があると推測される。この研究が日本語教師にとって、語の意味を整理し、より学習者が語の意味を内在化できるような活動を考える一助になればと考えている。

5.3 今後の研究課題

今回の研究では、複合動詞後項「～たつ」のもつ多様な意味をコア図式を用いることで統一的に説明した。今後の研究課題としてはまず、今回仮設したコア図式の心理的妥当性を検証すること、そして、松田（2006）の研究のように、複合動詞前項「たち～」についてもコア図式を用いて考察を行うことが考えられる。また、類義表現との意味的差異については、本論文ではいくつかの事例を挙げるに留まったので、より詳しく述べることも必要である。

次に、第二言語における語彙習得には学習者の母語が大きく影響することが多くの先行研究で明らかになっている。そこで、他の言語での「～たつ」と対応する語の意味とどの部分に相違点があるのか、対照分析を行うことも必要であろう。

さらに、語彙学習支援のためには、意味研究だけではなく、本研究で得られた結果を用いて学習者の意味理解を調査したり、日本語母語話者とどの点が異なっているのかを明らかにしたりする習得研究を行う必要がある。そして、学習者が第二言語の意味を内在化することを支援するためには何が必要であるかを明らかにし、さらに、コア図式論をツールと

して利用することで、学習者の語彙習得に寄与できるものを考えていきたい。

注

1. 認知意味論では、多義語の語義をイメージ図式によって表現する方法が試みられているが、主に「意味拡張モデル」と「共通図式モデル」の二つの立場に分けられる。共通図式モデルとは、多義的語義をすべて包括するようなスキーマを想定し、それを図式表象した一つの「共通図式」の一部にさまざまな認知的力点を置くことによって多義を説明しようとするものである。
2. 本論文では、用法上のイメージを図式化したものをイメージ図式と呼ぶ。
3. BタイプはI語しかなく、またAタイプから派生したと考えられるので、Aタイプに入れることも可能である。しかし、他のAタイプの複合動詞は確立性・完成性を持っていないこと、そして、Bタイプは空間的意味を持っていないことから、2つのタイプに分けることにした。
4. 本文表1「姫野（2003）による『～たつ』の分類」を参照のこと。

参考文献

- 影山太郎・湯本陽子（1997）『語形成と概念構造』日英比較選書8 研究社出版
- 河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』研究社
- 小浦方理恵（2007）「多義的基本動詞『（～）たつ』の意味記述—コア図式を使って—」お茶の水女子大学大学院修士論文
- 武部良明（1953）「複合動詞における補助動詞の要素について」『金田一博士古稀記念 言語民族論叢』三省堂 pp.461-476
- 田中茂範（2004）「基本語の意味のとらえ方—基本動詞におけるコア理論の有効性—」『日本語教育』121 pp.3-13
- 田辺和子（1996）「日本語の複合動詞の後項動詞にみる文法化」『日本大学 紀要 文学部』45 pp.1-16
- 中村その子（1998）「日本語複合動詞の意味形成と特性—言語認知の立場から—」『経営・情報研究』2 pp.65-155
- 野村雅昭・石井正彦（1987）『複合動詞資料集』国立国語研究所報告
- 早瀬尚子・堀田優子（2005）『認知文法の新展開 カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社
- 姫野昌子（2003）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 松田文子（2001a）「コア図式を用いた複合動詞後項『～こむ』の認知意味論的説明」『日本語教育』111 pp.16-25
- （2001b）「複合動詞後項『～こむ』の意味」『人間文化論叢』4 pp.223-235
- （2004）『日本語複合動詞の習得研究—認知意味

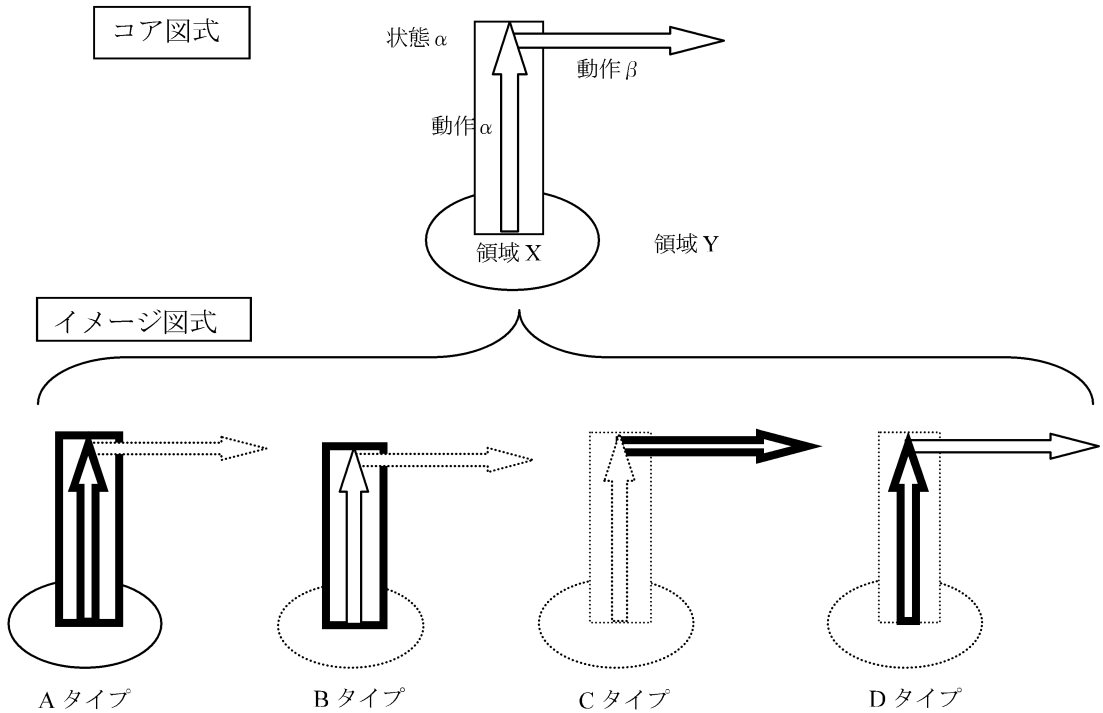
- 論による意味分析を通して一』ひつじ書房
—— (2006) 「コア図式を用いた多義動詞「とる」の
認知意味論的説明」『日本語科学』 19 pp.119-131
松田文子・白石知代 (2004) 「多義動詞「とる」の意味—
隣接語との差異に着目して—」『人間文化論叢』 7
pp.409-419
—— (2006) 「コア図式を用いた複合動詞
習得支援のための基礎研究—『とり〜』を事例とし
て—」『世界の日本語教育』 16 pp.35-51
森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」『講座日
本語教育』早稲田大学語学教育研究所 pp.69-86
森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店

【辞書】

- 『岩波国語辞典』(1994) 第五版 岩波書店
『外国人のための基本語用例辞典』(1990) 大蔵省印刷局
『逆引き広辞苑』(1999) 第五版対応 岩波書店
『広辞苑』(1998) 第五版 岩波書店
『新潮国語辞典』(1995) 第二版 新潮社
『新明解国語辞典』(2005) 第六版 三省堂
『大辞林』(1995) 第二版 三省堂
『日本国語大辞典』(1975) 小学館
『日本語基本動詞用法辞典』(1989) 大修館書店
『E ゲイト英和辞典』(2003) ベネッセ・コーポレーショ
ン

こうらかた りえ/チェンマイ大学 日本語学科
chimpui-chimpui@infoseek.jp

稿末資料1 「～たつ」のコア図式とタイプ別イメージ図式



稿末資料2 「～たつ」意味タイプ別まとめ

	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ
複合動詞 「～たつ」	「上への方向性を持つ動作・状態」に焦点がある用法	「上への方向性をしっかりと持つ（確立する）」ことに焦点がある用法	「領域 X から出発する、離れる」ことに焦点がある用法	「発生し、上への方向性を持ち、領域 Y へ影響を与える」ことに焦点がある用法
例	壁が <u>そそりたつ</u> 矢が <u>突き立つ</u>	事業が <u>成り立つ</u>	白鷺が <u>飛び立つ</u> 友人と <u>連れ立つ</u>	湯が <u>煮え立つ</u> 世論が <u>沸き立つ</u>

日韓辞書の意味記述方法に関する一試案

－「行く」「来る」「帰る」について－

水口 里香

要 旨

本稿は、「行く」「来る」「帰る」という移動動詞が韓国人初級日本語学習者にとって習得困難な語であるということに着目し、日韓辞書においてこの3語の意味をどのように記述すれば学習者の意味理解を促進できるのかについて、認知言語学的な観点を取り入れながら模索した研究である。具体的には、既存の辞書(国語辞書、類語辞典、日韓辞書)と初級日本語教科書における3語の記述を検討した後、認知言語学的な観点を取り入れた和英辞典(4種)の分析を行い、日本語学習用辞書への応用可能性について論じた。そして、以上の分析をもとにして記述方法の一試案を提示した。

本稿の分析から、3語の理解には視点などといった話し手の把握の仕方を知ることが重要であるので、これらに関する記述を辞書に取り入れるべきであること、また学習者が意味の連続性を捉えられるような語義の配列が必要であるということが示唆された。

【キーワード】 日韓辞書、 視点、 意味記述、 移動動詞、 初級日本語学習者

1. はじめに

日本語学習の初期の段階で提示される項目の一つとして、動詞が挙げられる。さまざまな動詞の中でも、「行く」「来る」「帰る」という移動に関する3つの動詞は、必ず取り上げられる語と言っても過言ではない。教育現場においてこの3語は、学習者の母語による対訳を示す、または「週末、どこに行きましたか。」などと言った質疑応答の形で練習したり、教科書のダイアログを使って練習したりすることによって、指導されるのが一般的であろう。しかしながら、日本語の学習を始めたばかりの学習者にとって、この3語を適切に使うことは容易なことではないのではないだろうか。

そこで、本研究では辞書が日本語の語彙学習を支援する道具であることに着目し、韓国人日本語学習者用の辞書における「行く」「来る」「帰る」の意味記述方法について考えていく。具体的には、初級の教科書における記述から問題点を明らかにした後、既存の辞書における意味記述方法を検討し、認知言語学的な観点を取り入れた数種の辞書における記述方法を参考に、「いく」「来る」「帰る」の意味記述方法の一試案を提示する。

2. 問題の所在

2.1 なぜ「行く」「来る」「帰る」を取り上げるか

「行く」「来る」「帰る」は日本語学習の初期の段階で提示される動詞であり、3語とも日本語能力試験4級レベルの語彙である。韓国人学習者の場合、「行く」には「가다」、「来る」には「오다」、「帰る」には「돌아가(오)다」という母語である韓国語に対応する語があるので、単語の意味自体は容易に理解できるようである。このことは、韓国で日本語を学習している大学生を対象に、動詞語彙の習得と認知との関係について調査を行なった森山(2000)で¹、移動に関する基本動詞(「行く」「来る」など)は比較的早く習得できる動詞のひとつだという結果が出されたことから察することができる。

しかしながら、授業において「何曜日に、学校へ来ますか。」という質問を投げかけると、「月曜日から金曜日まで、行きます。」のように「来ます」で答えるほうが適切である場合であっても、「行きます」と答える学習者が後を立たない。このことは、「まいばん 10 時ごろ、うちへ行きます。(「帰ります」が適切)」においても同様である。韓国で日本語を学ぶ学習者は、日常生活で日本語に触れる機会が少ないため、これらの語の使い方を、主に教科書や辞書によって理解しようとするのであるが、意味(訳語)は分かるのにも関わらず、なぜ日本語母語話者にとって不適切だと感じてしまう使い方をしてしまうのであろうか。

これらの語に関し、ここで森田(1989)の説明を引用する。

森田(1989)では、「いく(行く/往く)」の部分で、「来る」も一緒に説明されている。まず、「いく」の意味を「ある事物が話し手側ないしはその現在の位置から遠ざかっていく移動動詞。逆に、話し手側へと近づく移動は「来る」である。」とし、この記述の後に、4つの分析を提示してある。紙面の関係上、すべての分析を記すことができないので、分析1と2の要約が示されている[分析3]を、以下に記しておく。

分析3

「行く/来る」の使い分けは、移動の目的地点とそれに対する話し手の立場とからなされる。しかし、さらに細かく見ると、これら場所・地点への移動者の人称と、移動行為が行われる時点に対する話し手の把握の仕方によって「行く/来る」の微妙な使い分けが行われているのである。

そして分析4には、文型との関係から「行く/来る」が整理されており、以下の8つが提示されている。

- ①移動「…ガ…カラ…へ(マデ)…ヲ行く/来る」
- ②届く「…ガ…カラ…へ行く/来る」
- ③通じる「…ハ…へ行く/来る」
- ④通行、往来「…ヲ行く」
- ⑤到達「…ガ…マデ行く/来る」
- ⑥到来「…ガ来る」
- ⑦出現、生起「…ガ…ニ来る」
- ⑧由来、原因「…ガ…カラ来る」

以上が、森田(1989)の記述を簡略化したものであるが、これをもとに上述の学習者の不適切な使用例について考えてみる。「何曜日に、学校へ来ますか」という質問に対し、「月曜日から金曜日まで、行きます。」と答えてしまうのは、質問者が到着点(B)側に立って質問をしている、つまりここで話題となっている「学校」側に立っているのに関わらず、回答者(=学習者)は出発点(A)の側に立って答えているからであろう。母語の影響も多少あるだろうが、初級日本語学習者の場合、母語の影響だけでなく、(話し手の)事態の把握の仕方がまだよく理解できていなかったり、「学校へ行きます」という表現がチャンク化していたりするために、2語の微妙な使い分けをなかなか理解できないのだろう。

森田(1989)には、「帰る」についての記述はないが、「かえす」の部分に以下のように記されている。

[かえす(人対象)]

B領域から来た人を(Aの意志で)再び元へと戻らせる行為。Cは自身で移動可能な意志のある者。「帰す」と表記する。⇒いく

また「いく」の部分にも若干ではあるが、以下のよう

に触れられている。

話し手自身が移動主体の場合は、ふつう自分の居住場

所以以外のところへ出向くときである。自宅への移動は「帰る/帰ってくる」用いる。
上述の「まいばん10時ごろ、うちへ行きます。」(「帰ります」が適切)のような学習者の使用例は、同じ文を母語である韓国語で表現する場合、「帰る」と対応する語「돌아가(오)다」よりも「行く」と対応する語「가다」を使うほうが一般的であるという母語の影響も大きいだろうが、「行く」は家や国(=自分の居住場所)以外のところへ出向くということ

をまだ理解できていないことに起因するとも考えられる。
以上、森田(1989)の説明から学習者の不適切な使用を考えてみたが、学習者が使用している教科書には、どのような説明がなされているのであろうか。次の節では、韓国で出版されている日本語初級教科書における3語の扱いについて見ていく。

2.2 韓国の日本語初級教科書における3語の記述

ここでは、韓国で出版されている本の中で、この3語がどのように記述されているかを見ていく。対象とする教科書は、韓国内の一般系列高等学校²で使用されている日本語教科書計3冊である。高校の教科書を取り上げるのは、大学で使用されている教科書は非常に多種多様であるため、代表的な教科書を挙げるのが困難なこと、及び日本で出版された教科書の翻訳本(『みんなの日本語』など)が使用されているため、韓国内で出版された教科書とは言えないからである。これらに比べ、韓国の高校で使用されている教科書は「検定教科書(または国定教科書)」と呼ばれていることから分かるように、学習指導要領に定めた通りの教育目標や内容、教授法などに従って作られた教科書である(李 2004)。2002年度から適用されている第7次教育指導要領に従って、12社の教科書が検定教科書として資格を取っており、各社『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』という2冊の教科書を出版している。本研究では、初學者用の教科書である『日本語Ⅰ³』のほうを対象として、分析を進める。

本稿で対象とする教科書は、以下の通りである。

- ①『高等学校 日本語Ⅰ』李賢起他；進明出版社
- ②『高等学校 日本語Ⅰ』金淑子他；大韓教科書
- ③『高等学校 日本語Ⅰ』韓美卿他；ブラックボッ

クス

この3冊は、教科書の第1次審査時で検定教科書としての資格を獲得した教科書(谷 2002)であり、いずれも2002年に出版されている。

まず①の教科書における3語の記述についてみていく。この教科書では、動詞の学習がスタートする第7課「こちらどうぞ」に、3語が新出語彙として提示されているが、「言ってみよう」という会話の部分に提示されておらず、「行く」と動詞のます形の練習部分と応用練習の「あしたどこへいきますか。」という質問文で提示されており、「帰る」は「読みましょう」という部分に、「7時半ごろ家に帰ります」という文の中で使用されている。そして「来る」は動詞のます形の練習部分だけに提示されている。

次に②の教科書の記述であるが、①の教科書と同じく動詞の学習がスタートする第4課「なんじに はじまりますか」に3語が提示されている。「行く」は「よんでみましょう」という部分の会話の中に、

- ・「うちから学校までバスで行きますか。」
- ・「いいえ、バスでは行きません。自転車でいきます。」

という形で提示されており、「来る」と「帰る」は、「書いてみましょう」の部分の問題の中で、辞書形をます形に変換させる練習問題の中で提示されている。ここでは、ます形のみを書くという練習ではなく、「学校へ(き)ます。」「家へ(かえり)ます。」という文章の中で「来る」と「帰る」が使われている。

そして最後に③の教科書でも、動詞の学習がスタートする第4課「どちらがいいですか」に3語が提示されている。まず「行く」は、「はなしてみましよう」の部分で、「学校へいきます」という文を疑問文に変換させる問題と「書いてみましょう」の部分で、「学校へいく」という文章をます形の文章に変換させる問題の中で提示されている。そして「来る」は第4課では文法整理の部分で「3グループの動詞」の例としてのみ提示されているが、続く第5課では「よんでみましょう」の会話部分に「バスが来ました」という形で提示されている。最後に「帰る」であるが、「来る」と同じく文法整理(4課)の部分で、「帰る、知る、入る、走る」などは、2グループではなく1グループの動詞である」という

注意書きの部分にのみ提示されている。

以上、教科書における3語の記述を挙げてみたが、3種に共通している点は、動詞の学習のスタートする課で3語が全て提示されている点、辞書形からます形への変換に重点が置かれている点などが挙げられる。また「帰る」の文例は「家」と一緒に提示されているものの、「行く」と「来る」は2語とも「学校」と一緒に提示されていて、どのような状況のときに「行く」または「来る」を使うのかに関する説明は皆無である。したがって、これらの教科書で、3語がどのような状況で使えるのかを理解し適切に使い分けることは困難だと思われる。もちろん、教科書で学習する場合、教師による教示が記述内容を充実させ、学習者の理解を促進できる場合が多いのであるが、上述の学習者の誤用を見る限りでは、このような教科書の影響も大きいとも考えられるであろう。

しかしながら、森田(1989)における説明を、日本語を始めたばかりの学習者にそのまま説明しても容易に理解することは困難であろう。それよりも、学習者にとって理解しやすい教示方法を取ることが得策であると考えられる。「行く」「来る」「帰る」の3語には、認知言語学の基本的な概念の一つ(池上 2006)である話し手の「把握の仕方」が関与していることを考慮に入れると、認知言語学的な観点を援用して、この3語の意味記述の方法を考案することが有効であると推察される。このことは、森山(2007)でも主張されていることである。

認知言語学的な観点を取り入れた意味記述の方法を考える前に、次の章で、従来の辞書における意味記述を検討する。

3. 「行く」「来る」「帰る」の従来の意味記述

この章では、既存の辞書⁴⁾において「行く」「来る」「帰る」の3語の意味がどのように記述されているかを提示し、これらの有効性と問題点について考えてみたい。

3.1 国語辞書と類語辞典における記述

本研究では、国語辞書として『大辞林第2版』(三省堂:1995)を取り上げる。この辞書の記述を取り上げる理由は、国広(1997)をはじめとする意味に関する先行研究などにおいて、『大辞林』の記述が引用されていることによる。『大辞林』の収録語数は23万3000語で、現代の国語生活をふまえ、現

代語の記述に重点を置きつつ、古語や百科語をも含めた総合的な内容となっていること、用例が豊富なことなどを特徴として挙げている。

まず、「行く」の記述⁵である。

ゆく 【行く/往く】 (動カ五 [四])

- (1)人・動物・乗り物が、移動する。話し手に近づく場合は「来る」という。
(ア)人・動物・乗り物が話し手のいる場所から遠くへ移動する。「これから銀行へー・くところだ」
(イ)人・動物・乗り物が目的の地点に向かって進む。また至りつく。「京都を見たあと奈良へー・く」
(ウ)ある地点を通過する。往來する。「道一・く人々の服装もカラフルだ」
- (2)動作者が話し手とともに移動する。話し手を中心に考えたときは「来る」で表現することも可能。
「映画を見に行くところなんだが、君も一緒に一・かないか」
- (3)人・動物以外のものが、運ばれて移動する。話し手に近づく場合は「来る」という。
(ア)手紙・通知・電話などがある地点に到達する。
「該当者には役所から通知が一・くはずだ」
(イ)風・匂いなどがある所に到達する。
「風が一・かないように戸をしめる」
- (4)学校の生徒や軍隊の兵士などになる。《行》
「うちの次男は幼稚園に一・っています」
- (5)（「嫁に行く」「養子に行く」などの形で）他の家へ移る。《行》 「大阪へ嫁に一・った娘」
- (6)去って帰らない。
(ア)年月が経過する。「一・く春を借しむ」
(イ)水が流れ去る。
- (7)ある方法・状態で、動作を開始する。
「よし、この手で一・こう」
- (8)物事が進展・実現する。行われる。
「こんどの実験はうまく一・った」
- (9)事態が進展して、ある段階に至る。《行》
(ア)ある段階に至る。ある状態に達する。
「きれい好きもあそこまで一・くと、潔癖を通りこしている」
(イ)ある年齢に達する。「もっと年の一・った人だった」
(ウ)（「そこへ行く」との形で）そういう点から考えると。
- (10)気持ちが、満足した状態になる。
「満足の一・くような回答」
- (11)（「…するわけに行かない（行かぬ）」の形で）しかるべき理由があって…することができない。《行》
「本当の理由を話すわけには一・かない」

次は、「くる」の記述である。

くる 【来る】 (動カ変) [文]カ変

- (1)話し手のいる方へ近づく。
(ア)（話し手と動作者とが別の場合）話し手が今いる場所、また

は話し手の領域にやってくる。自分のいる方に接近・到着する。
「客がくる」
(イ)（話し手と動作者とが同一の場合）話し手の今いる地点を現在以外の時に訪れる。やってくる。
「一〇年前に一度（き）たことがある」

- (2)動作者が話し手とともに移動する。目的地に自分を置いた気持ちでいう場合には「行く」で表現することも可能。
「映画を見に行く所なんだけど一緒に（く）ないか」
- (3)物が運ばれて、話し手のもとに到達する。
「やっど返事が（き）た」
- (4)風・光などが話し手の方に到達・接近する。また、地震・雨などの自然現象が話し手のいる場所に起こる。
「いい風が（くる）」
- (5)時間が経過して、その季節・時期・順番になる。
「もうすぐ返済の期限が（くる）」
- (6)ある事態が出現する。
(ア)事態が進行して、ある段階にたち至る。
「体力はもう限界に（き）ている」
(イ)（「そこへきて」「…の所へきて」の形で）ある悪い事態の上にさらによくない事態が積み重なる。そこへ持って来て。
- (7)（「…からくる」の形で）…がその由来・原因となっている。…のために生ずる。「心のゆるみから（くる）事故」
- (8)ある特定の位置を占める。
「本の目次は普通最初に（くる）」
- (9)病気・故障・劣化などの異常が肉体や物のある部分にあらわれる。「今年の風邪は胃腸に（くる）」
- (10)電気・電話・鉄道・水道などが話し手の方へ通じる。
「村に電気が（くる）」
- (11)ある知覚・感覚が生じる。「胸にじいと（くる）」
- (12)（「よしきた」の形で）承知した。
「よし（き）た、まかせておけ」
- (13)（「…ときたら」「…ときた日には」「…ときてるから」などの形で）あるものを話題にとりあげて示す。
- (14)（「頭にくる」の形で）立腹することを俗にいう。
- (15)（「…にくる」の形で）ある人を慕う気持ちがおこる。
- (16)（「腹がくる」の形で）空腹になる。

最後に、「帰る」に記述を挙げる。

かえる かへる 【帰る/還る】 (動ラ五 [四])

〔「かえる（返）」と同源〕

- (1)はじめにいた所、またはもっていた場所にもどる。
「五時には一・ってくる」
- (2)やって来た人がそこを立ち去る。「客が一・る」
〔可能〕 かえれる

以上が国語辞書における記述であるが「行く」「来る」「帰る」の間には、どのような違いや共通点があるのかの記述方法を知るためには、国語辞書だけでなく、類語辞典を参照する必要もあるだろう。類語辞典の記述として、ここでは、『使い方の分かる類語例解辞典』(小学館:1994)を取り上げる。この類語辞典を取り上げるのは、他の類語辞典と異なり、3語全てが記載されていたからである。

<p>行く (「行く／赴く／出向く」の項目に記載) 共通する意味；一定の位置に向かって進む。 使い方の例；[行く]京都へ行く／養子に行く(後略) それぞれの意味と使い分け；(1)「行く」は、今いる場所から離れる、また目的の場所に向かって進む、またそこを通り過ぎるの意で用いられる。改まった場合には「ゆく」とも言う。(後略)</p> <p>来る 意味；時間的、空間的に離れた場所にあったものが、自分のほうに向かって近づく。また近づいた結果、現在そこに見られる。 使い分けの例；[来る]客が来ることになっている／友達から手紙が来る／台風が来るらしい／いい知らせが来た／もうすぐ春が来る／やっと順番が来た</p> <p>帰る (「帰る／引き返す／戻る」の項目に記載) 共通する意味；進行方向を逆にして、もとの場所、方向へ向かって行く。 使い方の例；[帰る]出先から会社に帰る／早く家へ帰りたい／旅行から帰ったら、ゆっくり会おう(後略) それぞれの意味と使い分け；(1)「帰る」は、人が、本来いべき所に行く意。また、その人がその本来の場所に向かっていく意味から「客が帰る」のように使う(後略)</p>

これらの辞書は、日本語学習者のために作成されたものではないが、現在、韓国で出版されている日韓辞書の多くが、日本の国語辞典を翻訳したに過ぎない(水口:2006)を考えると、これらの辞書における記述も分析対象のひとつにする必要があると考えられる。そこで以下では、国語辞典及び類語辞典の記述について疑問点を提示していく。

まず1点目は、『大辞林』に限ったことではないが、語釈に使用されている語に関してである。たとえば、「行く」の(6)「帰らない」/「来る」の(1)(ア)と(イ)「帰る」の(1)「戻る」などであるが、これは国広(1997)のいう「定義の堂々巡り」になっていると言える。

そして大きな疑問点は、視点が取り入れられていない点である。このうち、本稿で指摘したいのは、「行く」と「来る」の語義(2)である。2語ともに「動作者が話し手とともに移動する。」になっている

が、このような記述では「行く」と「来る」の使い分けが不透明であるだろう。これは、以下に挙げる森田(2002:236)の指摘からも、裏づけできるであろう。

移動動詞の中でも「行く/来る」は話者の視点が関係しているという点で特異な語であるが、人や物の場所的移動だけではなく、事態の移行推移にも広く用いられ、そこに話者の視点の位置が絡んでくるだけに、「行く/来る」の語彙選択は表現分析上重要な指標となっている。

つまり、「話者の視点の位置」がこの2語の違いを知るための重要な鍵となるわけである。「動作者が話し手とともに移動する。」という語義の後に、「行く」には「話し手を中心に考えたときは「来る」で表現することも可能」と解説があり、「来る」には「目的地に自分を置いた気持ちでいう場合には「行く」で表現することも可能。」と解説があるものの、これでは、どこに視点があるのかについて理解することは難しいのではないだろうか。この部分には、このような解説よりも「話者の視点のある場所から離れるのが「行く」で、話者の視点が目的地に轉移しているのが「来る」である」のように「視点」という概念を援用した解説のほうが2語の違いを捉えやすいと考えられる。

3点目の疑問点は、「行く」と「来る」に関してであるが、数多くの意味が提示されているものの、意味同士がどのような関係を持っているのかが分からない点である。この点については3.3で論じたい。

そして類語辞典の記述であるが、3語がそれぞれどのような意味を有するのかを知ることが出来ても、3語の間にもどのような違いや共通点があるのかについては論じられておらず、国語辞典と同様、視点を取り入れた解説は記述されていない。

3.2 日韓辞書における記述

韓国内で出版されている日韓辞書には、様々なタイプのもがあるが、本研究では、日本語の学習を始めたばかりの学習者を対象としている辞書と李(2006)で販売部数1位に挙げられている辞書の計2冊の記述を見ていく。

まずは、日本語の学習を始めたばかりの学習者を対象としている辞書『初めての日本語辞典[처음日本語사전](時事日本語社:2002)』である。この辞書の特徴は、一つ一つの語が簡潔に記述されている

こと、また日本語能力試験の語彙を考慮して作成されている(総見出し語数は約1万6400語で、このうち日本語能力試験1級水準の単語7800語・日常生活で必要となる8000語・慣用句とことわざ600語)ことである。

行く 自5=ゆく

- ① (목적지로)향하다 ⇨来る / 学校へ行く。
[(目的的に) 向かう]
- ② 되어가다. 진척되다 / 仕事がうまく行く。
[進む. はかどる]
- ③ 일정한 시간이 지나다 ⇨来る / 行く春
[一定の時間が過ぎる]

来る 自変

오다.

- ① (공간적으로) 다가오다 ⇨行く / 友達が来る。
[(空間的に) 近づいてくる]
- ② (시간적으로) 가까워지다 / 春が来る。
[(時間的に) 近づく]
- ③ (어떤 일이 원인이 되어 나쁜 일이) 생기다.
[(あることが原因となってよくない事が) 起こる]

帰る 自5

돌아가[오]다 / うちに帰る。

[帰る]

(※[]は、筆者訳。以下、同様。)

次に『エッセンス 日韓辞典[엣센스일한사전] 第2改訂版(民衆辞林:2001)』の記述を挙げる。この辞書は、韓国内の大手書店で販売部数1位の辞書であることからわかるように、日本語のレベルを問わず幅広く使用されている辞書だと言える。総見出し語数11万5千語余りであり、他の日韓辞書と比べて収録数が多いと言える。

ゆく 【行く】 自5

①가다 [行く]

- ① 한 곳에서 딴 곳으로 움직여 가다.
[ある所から他の所へ動いていく]
道へいく人。一足先に～。買い物に～。～き着くところまで～。先端を～。知らせ(連絡)が～。死にに～ようなものだ。あっちへ～け。⇨来る

②떠나(가)다

- [離れる, 離れていく]
～雁の群れ。海に～。では～こうか。芝居を見に～。嫁に～。養子に～。～日を前にして。来年あたりに～かもしれない。やっと～気持ちになる。

③(일정한 곳을)다니다

[(一定の場所へ) 通う]

毎日会社へ～。学校へ～。

④(목적지로· 목표로)향하다=赴く

[(目的地へ·目標へ) 向かう]

戦地へ～。兵隊に～。

⑤때가 지나(가)다

[時が過ぎる. 過ぎていく]

～春を惜しむ。～年来る年。⇨来る・帰る

⑥(그 곳으로)통하다.

[(あるところを) 通る]

駅に～道。市場から駅へ～バス。

⑦바람직한 상태에 달하다

[望ましい状態に達する]

満足が～。合点が～。納得(得心)が～。心～ばかり語り合う。心～まで楽しむ。

⑧사람이 죽다

[人が死ぬ]

⑨바람·냄새 등이 가서 달다

[風・においなどが行き届く]

風が～かないように戸をしめる。

⑩되다 […になる]

⑪(일이) 잘 되어 나간다

[(事態が) よくなっていく]

うまく～。はかが～。計画通りに～。

⑫어떤 상태가 되다

[ある状態になる]

損が～。十分(失敗作)とまでは～かないが。

⑬나이가 되다

[(ある) 年齢になる]

年端も～かない子。もっと年の～った人。

⑭『そこへ～と』 그것에 비하면; 그 점에 있어서는; 그런 점에서 생각하면[본다면]

[それとくらべて; その点においては; そのような点を考えると(見ると)]

そこへ～と日本は狭い

⑮《 ‘～こう’ 의 꼴로》 동작을 시작하다

[動きはじめる]

この手で～こう。今日のはじめから～こう。

来る 自カ変

①오다. [来る]

②(거리, 시간적으로)이리로 오다; 다가오다

[(距離・時間的に) こちらに来る; 近づいてくる]

行く年～年。手紙が～。春が～。チャンスが～。

～者はこぼまない。かちんと～。ぴんと～。

彼ももう～ころだ。知らせがきた。順番がきた。

いつかきた街。出発の日がきた。

③(어떤 원인으로) 일어나다; 생기다

[(あることが原因となって) 起こる; 生じる]

過労から～病気。不注意からきた事故。

④…처럼 되다

[…のようになる]

そうこなくちやおもしろくない。

⑤【くる】

⑥《 ‘ときている’ ‘ときたものだ’ 의 형식으로》

…이다; …하다

[…だ; …する]

それが面白いときている。

彼が軽率ときたもんだから。

⑦《 ‘ときたら’ ‘ときては’ ‘とくと’ ‘ときた日’ には 의 형식으로》

…라면; …라고 하면; …의 경우는

[…ならば; …といえは; …の場合は]

野球とくとと飯より好きだ。あの人ときたら全く問題にならない。甘いものときたら目がない。

かえる 【帰る】 自5

돌아가다; 돌아오다 [帰っていく; 帰ってくる]

①분디 장소로 다시 가다(오다)
[本来の場所へ再び行く(来る)]
家に～。古巢(故国)に～。～空もなく。
②왔던 사람이 물러가다.
[来た人が去る(退く)]
客が～。

以上が日韓辞書における記述であるが、どちらの辞書も、「行く」には「가다」・「来る」には「오다」・「帰る」には「돌아가(오)다」という訳語を一番はじめに提示し、この訳語の下に注解を示すという形を採っていた。しかしながら、訳語が一番はじめに示されている場合、学習者は当該の語と母語で示されている訳語が一对一对応の関係であると考えてしまい、訳語のみで当該語を理解しようとしてしまうのではないだろうか。また『エッセンス日韓辞典』のほうは、訳語の後に詳しい注解が記載されており、訳語だけでは理解できない語の意味を記述していたが、国語辞書と同じく意味同士がどのような関係を持っているのかが分からない。このことに関連していることだが、『エッセンス日韓辞典』の「行く」の部分に[離れる、離れていく]という語義が示されていた。しかし、この語義とこれに続く用例を見ただけでは、一体どこを離れるのかということと、[ある所から他の所へ動いていく]という語義とどのような違いがあるのかという疑問が生じると考えられる。

そして、どちらの辞書にも「行く」の部分に「⇔来る」、『初めての日本語辞典』の「来る」の部分に「⇔行く」という記述があったが、このような記述は2語が反意語であるような印象を与えてしまう可能性がある。しかし「行く」と「来る」は表裏一体の関係にあるのであって、反意関係にあるのではない。3.1でも述べたことだが、日韓辞書においても視点という概念が援用されれば、「⇔」のような学習者の意味理解を妨げる記述を採ることなく、2語の違いを記述することができるであろう。

最後に『エッセンス日韓辞典』に限ったことであるが、「行く」は「いく」ではなく「ゆく」という形で提示されていた。日本語教育の現場では、一般的に「ゆく」ではなく「いく」で導入されていることを考えると、「ゆく」という辞書の規範に従うよりも、「いく」という形で提示すべきではないだろうか。

3.3 既存の辞書の問題点

ここでは、3章のまとめとして、国語辞書と日韓

辞書など従来の辞書の問題点について考えてみたい。

まずは、語義の配列に関してである。上述の通り、本研究で扱う3語のうち「行く」と「来る」は多義語であるために、数個の語義が提示されていた。一般の国語辞書では意味や用例に関連の強さに基づいて階層的に記述するという方法が試みられている(柏野他 1998)ものの、「関連の強さ」という基準が明確ではないために、意味の連続性を捉えにくい配列になっているものがほとんどであると言えるが、「行く」「来る」も意味の連続性が分かりにくい記述となっていた。このことは日韓辞書にも当てはまることである。したがって国語辞書も日韓辞書も、語義もしくは訳語と用例を列挙しているに過ぎないので、意味の体系化について再検討すべきだと言える。特に日本語学習者の場合、日本語母語話者が持っている意味の関係性に関する直感が働くとは考えにくいので、日韓辞書には中心的な意味から周辺的な意味へとどのように拡張し、また意味同士がどのように関係し合っているのか提示することが必要になる。

そして、本研究で扱う3語は視点などといった話し手の把握の仕方に関する記述を採用することによって理解を促進できると考えられるが、分析対象とした辞書にはこのような記述が見られなかった。したがって、この3語の新しい記述方法を考える際には、この点も考慮に入れて、十分に検討する必要がある。

そして最後は、用例についてである。田中(1990)で「辞典による用法の記述は網羅的ではなく、語義の可能性を記述し尽くしているとは限らない」と言われている通り、国語辞書と日韓辞書における用例は、絶対的なものとして扱うこともできないことも3語の記述から明らかになった。特に学習用辞書においては、用例は使用者が発信時に見出し語をどのように使用するかを知る上で大きな助けとなる(『応用言語学辞典』p.671)ということを見ると、学習者にとって有用な用例を提示する必要があるであろう。そのためには、コーパスなども基にして、用例を選定する必要があるが、大規模日本語コーパスと分野別特殊コーパス、学習者コーパスなどを活用した日本語学習用辞書は未だ開発されていない状況(投野 2006)である。このことから、既存の日韓辞書では、用例の重要性が軽視されていると言えるのではないだろうか。

以上のような問題点への打開案を模索するために、次の章では認知言語学的な観点を取り入れた数種の英和辞典の記述方法を検討していく。

4. 認知言語学的な観点を取り入れた辞書における意味記述

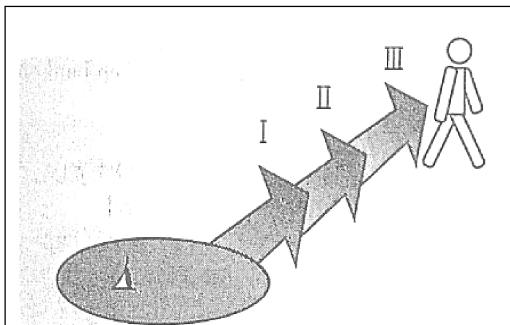
この章では、コア図式やメタファー、イメージなどといった認知言語学的な観点を取り入れた英語学習用辞書と参考書、及びコーパスを取り入れた英和辞典における意味記述を取り上げ、日本語学習用辞書への応用可能性について考えてみたい。ここでは、「行く」に相当する「go」、「来る」に相当する「come」そして「帰る」に相当する「return」の記述を中心に見ていく。

4.1 『Eゲイト英和辞典』における記述

『Eゲイト英和辞典』(以下、『Eゲイト』)とは、2003年にベネッセコーポレーションから出版された辞書で、編者は田中茂範をはじめとする認知意味論の専門家3名であり、収録語数は75000語。この辞書の特徴として第一に挙げられることは、認知意味論の研究成果を活かし、意味の連続性と全体像の回復を目指したことであり、その一つとして「コア(core meaning)」により意味展開や語の意味の全体像を示し、さらには用法や語法解説もコアに根差した発想で説明してあるという点である。これ以外にも、随所に「ネットワーク」を設け、類義語の意味の違いを示したことなども大きな特徴である。

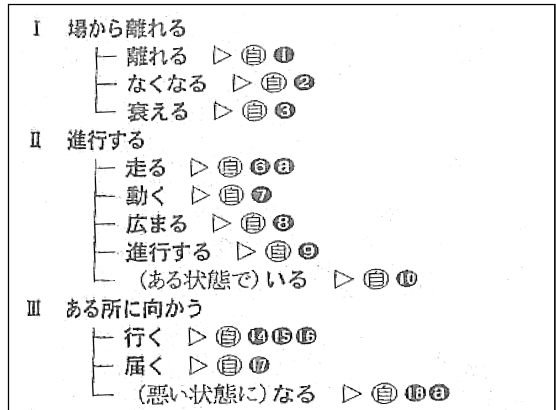
まず、「go」の意味記述方法を取り上げる。

「go」という見出し語の直下に「視点が置かれていることとそこから離れて行く」というコアと以下のようなコア図式が提示されている。

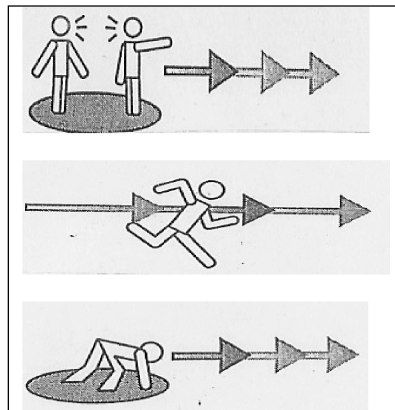


コア図式内のI～IIIであるが、「I 場から離れる、II 進行する、III あるところに向かう」という意味がある。そしてコア図式の下には、訳語を一覧できる「メニュー方式」によって語義が提示されている。

メニュー方式は英和辞典でよく採用されている方法であるが、この辞書の特徴は、以下に示す通り、上のI～III別に意味がどのように派生しているのかが提示されている点といえる。



そしてこのメニュー方式に続いて、それぞれの意義が、詳細に説明されている。訳語で語義を説明しようというスタンスではなく、用例を豊富に取り入れて説明しようというスタンスを採っている点、そして用例だけでなくイラストを用いて「go」のイメージを視覚的に捉えさせようとしている点が他の辞書とは異なる点であろう。



メニュー方式内に無い④⑤⑪⑫⑬⑯～⑳には、次のような語義が与えられている。

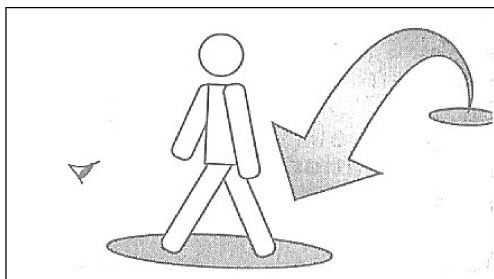
- I ④(競技などの開始を知らせて)(よい)ドン、スタート
- ⑤(音が)なる
- II ⑪a 通用する.b(やり方などが)まかり通る.c(商品などが)出回る、売れる.
- ⑫(…と)書いてある、(…と)言う.
- ⑬《進行形で》(…が)ある.
- III ⑯(あるべき場所に)しまう、置く.
- ⑰(所有権などが)移行する
- ⑱(金銭が)〈…に〉[…するのに] 費やされる

- ㊸ 〈…するのに〉 役立つ, 助けとなる.
- ㊹ (使えるお金などの限度を示して) 〈…までなら〉 出す
- ㊺ (制度, 方式などにおいて) 〈…に〉 変わる.

以上は、自動詞の用法として提示されていて、自動詞用法の下に他動詞用法が続く。そして、他動詞用法のあとには、「go about」をはじめとする句動詞が豊富にかつ詳細に提示されている。その後、熟語や慣用句、名詞用法、形容詞用法の順に記述されている。また[語法]についての解説も取り上げられている。「go」に記述されている語法には「go doing」と「go for+動詞」の「go to+場所+to+動詞」の違いを説明するものと、「go」の持つ意味合い(go には「主体から離れる」という意があるため、否定的な意味合いを伴う状態への go が使われる傾向がある(例; 「go mad」など))に関する説明が記述されている。

続いて「come」の記述を見ていく。

「go」と同じく見出し語の直下に「視点のあるところに移動する」というコアと以下のようなコア図式が提示されている。



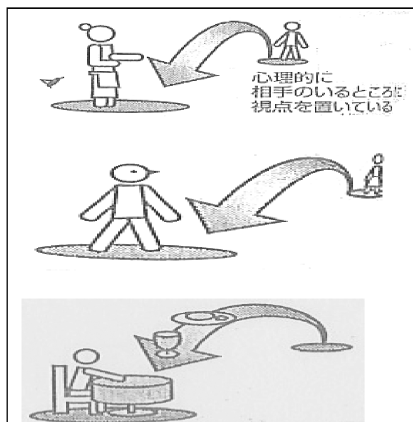
コア図式内の下に「通常は話し手の所へ「来る」こと。心理的視点が相手の所にある時は相手の所へ「行く」という注記が記してある。

「come」の訳語一覧もあげておく。

I	視点のあるところに移動する
	— (話し手の所へ) 来る ▷ ①③
	— (相手の所) 行く ▷ ①⑤
	— (場所に) 着く ▷ ②
II	時がやって来る
	— (時) やって来る ▷ ③
	— (時期) なる ▷ ④
III	状態がやってくる; 状態になる
	— (機会などが) やってくる ▷ ⑤
	— あられる ▷ ⑥
	— (ある状態) なる ▷ ⑦⑧
	— 達する ▷ ⑨

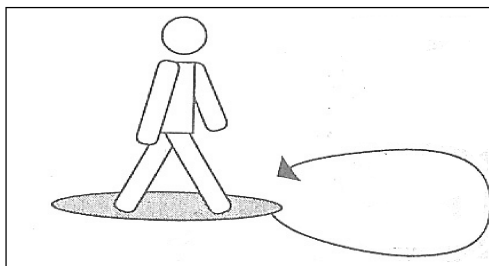
「go」にはコア図式内の矢印が I ~ III に分割されて

いて I ~ III 別の語義が提示されているが、「come」はコア図式内で I ~ III という分割が提示されていないものの、語義は I ~ III という 3 つの大項目に分けられており、大項目の下には 12 の語義が記されている。また「go」と同じく、用例が豊富でイラストも採用されている。



そして、そのあとに「come about」をはじめとする句動詞が非常に数多く提示されており、最後には熟語が纏められている。

最後に「return」の記述を見ていく。



上の 2 語と同じく、コア「(もとの所に) 戻ると」というコア図式が見出し語の直下に提示されており、コア図式内の下に「具体的な場所に「戻ること」から発展し、「仕事」「活動」などに戻ること、また、具体的なものを「返す」ことから発展し、「行い」「感情」「回答」「利益」などを返すことを表す。」という注記が記してある。

「return」の訳語一覧は以下の通りである。

(場所に)戻る, 帰る	▷ ㉑ ①
復帰する	▷ ㉑ ②③
(もとの話題などに)戻る	▷ ㉑ ②③
(症状などが)再び起こる	▷ ㉑ ③
(ある状況が)再び訪れる	▷ ㉑ ④
(物を)返す, 戻す	▷ ㉒ ①
(行いを)返す	▷ ㉒ ②③
戻ること	▷ ㉓ ①
復帰	▷ ㉓ ②
再来	▷ ㉓ ③
返却	▷ ㉓ ④⑤
返礼	▷ ㉓ ⑤
収益	▷ ㉓ ⑦

自動詞用法と他動詞用法の次に名詞用法そして形容詞用法が記述しており、名詞用法の後に、句動詞と熟語と慣用句が提示されている。上の2語のようなイラストは挿入されていない。

以上が、『E ゲイト』における3語の記述方法であるが、日本語学習用辞書へ応用可能な点は次の通りである。

まず、メニュー方式で訳語の一覧が提示されているために、意味の流れが分かりやすい点である。特に『E ゲイト』では、コアをもとにして大項目が立てられているため、訳語を羅列しているだけという印象は与えにくい。そして、このような方法は、認知言語学が主張するカテゴリー化に適した方法であり、学習者が意味の連続性を捉えやすいように配慮がなされていると言える。

そして、用例が豊富な点である。上述の通り、学習用辞書において用例が重要な役割を果たすということから、豊富な用例は学習者によって有益な情報であり、また用例にたくさん触れることによってボトムアップ効果を発揮することができるであろう。このボトムアップ効果とは、言語を実際に繰り返し運用または使用する中で、文法などの抽象的、スキーマ的な言語知識を習得できるようになることを指し、言語習得において何よりも重要なものである。認知言語学分野ではこのような習得のモデルを「使用基盤モデル」と呼んでおり、言語習得の基礎となるものと考えられている。したがって、外国語学習用辞書には用例を積極的に取り入れることが求められるが、この点において『E ゲイト』の記述方法は理にかなっていると言える。

次に、それぞれの語に関して特筆すべき点について触れる。まず、「go」である。一般的な英和辞典を見ると、自動詞用法においても他動詞用法においても、まず最初に出ている訳語が「行く」になっ

ている。しかし『E ゲイト』では、一般的な英和辞典とは異なり、第一語義を「行く」とはしていない。これはこの辞書が、「語彙力とは、基本語を使い分けつつ、使い切る力(田中他 2006)」というスタンスを取り、「和訳することによって分断されてしまう、意味の連続性と全体像の回復」を目指しているからである。日本人英語学習者の多くは「go=行く」で理解している傾向があるだろうが、「go」と「行く」では完全に対応しているとは言えないため、「行く」以外の様々な訳語の理解を阻害してしまい、またたとえ全ての訳語を覚えたとしても、「go」本来の意味とその全体像を理解できるわけではないのである。このことは、日本語の「行く」の記述にも当てはまるであろう。日韓辞書の多くは「行く=가다」と考えられる記述を採っているが、英語の場合と同様、「行く」が持つ意味の連続性の体得にはつながらないのではないだろうか。したがって『E ゲイト』のような語義の提示方法は、日韓辞書へ応用可能だと考えられる。

そして、「come」の語義記述の中で注目すべき部分は「I 視点のあるところに移動する」の記述方法である。

- | |
|---|
| ①a(話し手の所へ)来る。 |
| b[相手の所に視点を置いて]I(相手の所)に行く
(注意書きの部分に「話題の焦点が相手の居る場所にあるため心理的視点の移動が起きる」と記されている) |
| ②(物・人が)I(場所に)着く, 到着する, やって来る |

英語の「come」は日本語の「来る」と異なった使い方が多いため、理解しがたい語のひとつであるだろうが、心理的視点など「視点」という概念を取り入れた記述が辞書に記載してあれば、学習者にとって理解しやすくなると言える。認知言語学では人間を通して見た外界認知の現れとしての言語を研究対象にしており、言語で表わされる事態を人間から切り離された存在ではなく、個人々が数ある見方・切り取り方の1つを主体的に選び取ったものであると考えている(辻編 2002)。本稿で繰り返し述べている視点も人間の持つ認知的特性のひとつであり、話し手の視点によってそのものの解釈が相対的に決定されるのである。また視点は、人間の知覚にとって基礎的な認知能力である「図地分化」という概念とも関係の深いものである。しかしながら、外国語学習の場合、母語での視点の取り方が外国語での視点の取り方にそのまま対応するとは限らないので、

母語と外国語における視点の取り方の差異に関して学習する必要がある。特に、日本語は話者の視点を中心となる言語である(森田 2002)ことから、英語の意味記述以上に視点というものに関する記述を日本語学習用辞書に取り入れなくてはいけないと言える。この点で、『E ゲイト』における記述方法は日韓辞書にも応用すべきものであるといえる。

最後に「return」の記述について触れておく。自動詞用法の第一義は[具体的な位置へ戻る]と記述されており、一見漠然としているように思われるが、

- a 〈…から〉〈…へ〉戻る、帰る；もと居た場所へ行く
- b 〈ある活動(をして)から〉戻る、帰る

のように 2 つの語義に分類されている。a・b ともに「戻る、帰る」という訳語が与えられているものの、「戻る、帰る」という語義が含意する 2 つの意味が提示されている点は使用者にとって有益だと考えられる。というのも、このような記述はトップダウン効果をもたらしてくれるからである。トップダウン効果とは、言語に関するルールや文法知識を明示的に示すことによって教育効果を高めることであり、大人の第二言語習得ではボトムアップ的なプロセスと相補的な関係にあるものである。しかし、森山(2006)が言及している通り、トップダウン的なプロセスのみに依拠してしまうと言語習得を阻害してしまう可能性があるため、あくまでもボトムアップ的なプロセスを補強するためのものと考えなくてはならない。したがって、外国語学習辞書には、豊富な用例とともにこのような記述を取り入れることが求められる。

しかしながら、『E ゲイト』の記述全てを日本語学習用辞書へ応用できるとは言いがたい。まずは、「コア図式」の問題点である。田中(1988)では、コア及びコア図式は語の意味の全体的・ゲシュタルト的であり、複数の視点を含み得るものであるため、分析的なものだけでなく、絵画などを用いイメージ的にとらえることも必要になると述べている。またイメージ的なものは印象に残りやすく、さらには、一見異なった用例群を全体的イメージ(=コア)として集約できると主張されている。確かに、「go」と「come」のコア図式には、視点という概念を分かりやすくするために「目」のイラストが加えられていて、視点について理解容易な形で提示されているが、イメージにとらわれてしまい、かえって語の全

体像の理解できなくなってしまう学習者もいるのではないだろうか。また「go」のコア図式では I・II・III という 3 つの側面が提示されているが、常に I・II・III のうちのひとつに特定できるわけではないだろう。このコア図式は松田の一連の研究(2004、2006)でも採用されているが、コア図式だけでは、語のプロトタイプ的な意味を捉えることが難しいのではないだろうか。語彙習得がプロトタイプ的な意味を中心として拡張的な意味の習得へと進んでいくということを考えると、初級学習者の場合、語の全体像と捉えることよりもプロトタイプ的な意味の習得を優先すべきであろう。したがって初學者用の辞書にコア図式を取り入れるべきかどうかについては、十分に吟味する必要がある。

次は「コア」についてである。コアは「プロトタイプ」と類似した概念であるように感じられるが田中(1987)によると、「コア」は具体的な文脈を捨象して文脈に依存しない意味、つまりそれが規定するカテゴリーすべてのメンバーに完全に適合する抽象的なものであるのに対し、プロトタイプとは、あくまでもカテゴリー内で最も典型的なものであり、文脈を捨象するものでもなく、カテゴリーすべてのメンバーに完全に適合するものでもないという。しかし、本稿で分析対象とした 3 語のコアはプロトタイプと混同しているという印象を受けた。たとえば、「come」と「return」はコアと第一語義がまったく同じである点などである。このような記述では学習者を混乱させてしまう可能性が高いので、コアを記述するにしても、プロトタイプを記述するにしても、2 つが混同しないように注意しなくてはならない。もし初學者用の辞書ならば、コアよりも、プロトタイプが何なのかを提示しておくことが必要であると筆者は考える。それは、意味の習得はプロトタイプの意味の習得から始まるものであり、また今井(1993)で明らかにされているように、外国語学習者の場合、語の意味拡張がなかなか習得できないことから、プロトタイプ的な意味とその拡張関係に関する記述が求められるからであろう。

最後は、句動詞の提示方法についてである。英語の基本動詞には「動詞+副詞」で作る句動詞が非常に多く、これが英語という言語のひとつの特徴である。そして句動詞は、動詞の持つ意味と副詞の持つ意味とが融合し、新たな意味を生み出すため、学習者にとって理解困難なものの一つであると言われ

ている。そのため、英語学習用辞書では句動詞の重要性が指摘されるようになり、積極的に句動詞を記述しようという辞書が多い(投野 2006)。『E ゲイト』では語の意味記述自体には、コアを援用し説明をしているが、句動詞の記述は訳語と用例のみに留まっていて、一般的な辞書とほとんど変わらないような記述になっている。また句動詞の重要度表示がされていない点も検討の余地があると言えるだろう。日本語の動詞には、句動詞に値するものはほとんどないが、熟語などの記述においても認知言語学的な観点を生かせるように注意しなくてはならないと言えよう。

4.2 「多義ネットワーク辞典」における記述

『多義ネットワーク辞典(以下、『多義ネット』)』とは、2007年に小学館より出版された辞書で、編集主幹はメタファー研究の専門家である瀬戸賢一で、基本多義語約 1500 語が収録されている。この辞書の特徴は、認知言語学概念を導入して全く新しい多義語の包括的記述を行っている点、メタファーなどの意味展開パターンに基づいて意味ネットワーク全体を捉える画期的な手法が取られている点などで、従来の英和辞書の「意味区分が多すぎて単語の全貌が見えない」という多義語記述の問題点を根本から見直すというスタンスを取っている。

では、この辞書における 3 語の意味記述を見ていく。まずは、「go」である。見出し語の部分には「go v. 〈人・物が〉出て行く」と記されており、この下に次のような意義展開図が記されている。

- ④ 〈人・物が〉(話し手の場から)出て行く
 - ① [全体で部分] 人・物が話し手の場から出る
 - ② [種で類] 人・物が向こうに行く

この [全体で部分] といった意義展開パターンがこの辞書の大きな特徴であり、[全体で部分] はメトニミーによる展開であり、[種で類] はシネドキによる展開である。そして、「ネットワーク」という多義語の全体像に関する説明が続き、「go」のネットワークは、以下のように記述されている。

ネットワーク 「〈人・物が〉(話し手の場から)出て行く」が中心義。「話し手の場」とは、話し手がいる場所または話し手の視点がある場所を意味する。中心義は、「起点+経路」(話し手の場から出て、経路を行く、つまり、「出て行く」)を表わし、「起点」にのみに注目すると「〈人・物などが〉(話し手の場から)出る」「姿を消す」を意味する。また「話し手の場」とのつながりを外れると、「〈人・物が〉(話し手の場とは無関係に)向こうに行く」を意味する。それぞれの意義から、豊かな意義展開がある。

この下には、[語史] についても記載されている。そして、様々な語義の記述であるが、上の 0~2 に沿って、記述されている。以下にすべて記述しておく。

- 0 中心義 〈人・物が〉(話し手の場から)出て行く；(…に)出かける、向かう《to, for, on》；n. 出て行くこと
- 0-a **メタ** [特性類似 ◀ 0] 〈道などが〉(話し手の場から)出て行く(ように見える)：〈道路・線路・トンネル・フェンスなどが〉(ある所まで)伸びる、続く
- 0-b **メタ** [特性類似 ◀ 0] 〈時間・金などが〉(話し手の場から)出て行く：〈時間が〉過ぎる、〈人(の意識する時間)が〉(…に)行く、〈金が〉(…に)出て行く、〈物が〉(ある値段で)手元を離れる《for》
- 0-c **メタ** [特性類似 ◀ 0] 〈人・物事(の状態)が〉(異常状態に)出て行く(←話し手が属する通常状態から「出て行く」)：(悪い状態になる)
- 0-d **メト** [プロセスで原因 ◀ 0] n. (移動などについて)出て行くことの許可；[+機能類似] n. (行動・計画についての)ゴーサイン
- ① **メト** [全体で部分 ◀ 0] 〈人・物などが〉(話し手の場所から)出る：姿を消す、〈人などが〉いなくなる、〈物が〉なくなる、〈表情・火などが〉消える、〈人が〉(解雇などによって)出て行く、〈物が〉(処分などによって)廃棄される
- 1-a **メタ** [特性類似 ◀ 1] 〈感覚・命などが〉(話し手の場から)出る：なくなる、弱まる、(視力・聴力が)衰える、(声)が)かすれる、〈痛みなどが〉消える、〈人が〉逝く、〈電池・電球などが〉切れる
- 1-b **メタ** [特性類似 ◀ 1] 〈物事が〉(話し手の場から)出る：失せる、〈機会・自信などが〉消える、〈希望・夢・仕事などが〉なくなる
- 2 **シネ** [種で類 ◀ 0] 一般に 〈人・物などが〉(話し手の場とは無関係に)向こうに行く(◆特定の視点をとらない中立的な意義)：(ある場所を)進む、通る、移動する、〈物が〉(適切な場所に)納まる、〈物が〉(ある値段で)売れる(←売り手から買い手に移動する)《for》、〈金が〉(…に)使われる、(財産・賞が) (人に)渡る
- 2-a **メタ** [特性類似 ◀ 2] 〈物などが〉(話し手の場とは無関係に)向こうに行く(ように見える)：〈道路・山脈などが〉延びる、通じる、通る
- 2-b **メタ** [特性類似 ◀ 2] 〈人・物(の声・音)などが〉(話し手の場とは無関係に)向こうに行く：〈鐘・銃などが〉音を立てる、〈動物が〉鳴く、〈音が〉伝わる、〈話・噂・諺などが〉言う、〈議論・会話・曲などが〉(…ように)進行する、《口》〈人が〉(…と)言う
- 2-c **メタ** [特性類似 ◀ 2] 〈物事が〉(話し手の場とは無関係に)向こうに行く：〈時間・事態などが〉進む、〈物事が〉(…なように)進行する、運ぶ、通用する、〈機械・システムなどが〉動く、働く、〈物などが〉通用する；[+プロセスで原因] n. (物事を)進行させる原因、試み、(…を)やってみること《at》、順番
- 2-d **メタ** [特性類似 ◀ 2] 〈人・物事が〉(中立・通常状態に)行く(◆意義 0-c が異常状態への変化なのに対して中立的)：(…に)なる
- 2-e **メタ** [特性類似 ◀ 2] 〈人・物事が〉(おもに異常状態のまま)行く(◆条件が満たされない状態の継続を言う)：(…の)ままである

3 シネ [種で類 ◀ 0] 一般に〈人・物などが〉(…する方向)に行く(◆「行く」という身体的な動きの意味が希薄になり文法化):《be going to do の形で》…するつもり、…しそである(◆will と比べて気持ち・予定がすでに「進行している」)

この辞書の特徴のひとつである「0-a メタ [特性類似 ▶ 0]」といった意義展開パターンについて簡単に説明しておく。「メタ」は類似関係に基づくメタファー、「メト」は隣接関係に基づくメトニミー、「シネ」は包摂関係に基づくシネクドキを指し、意義展開のパターンは〔特性類似〕などで表示されている。「▶ 0」という記号は、意義展開元の意義番号を示す。たとえば、「0-a メタ [特性類似 ▶ 0]」は当該の意義 0-a が意味展開の元の意義 0 から「特性類似」の意味パターンによってメタファー展開したことを表わす。(なお、「特性類似」や「全体で部分」など意味展開パターンの詳細については、『多義ネット』の 6 ページを参照されたい。)また下線を引いた部分は「解説的意義」というもので、意義の全体を包括的に提示したものであり、それに続くのは、解説的意義に対応する語義である。

以上の記述以外にも、意義ごとに例句と例文とイディオム(日本語訳は無し)やコロケーション情報(頻度順に提示)や「Notes」という多義語の意味及び意義展開に関連した補足説明、そして「研究ノート」という見出し語に関連する多義語文獻情報が記載されている。ここで「Notes」と「研究ノート」の一例を挙げておく。まず 0-a の部分に記述されている「Notes」は以下のようなものである。

主語には物理的に移動する要素ではなく、道路などの「長く延びる物」が現れ、そこを「経路」として話し手の視線が起点から移動する。これを道などの動きと捉えて表現する主観的移動。

そして「研究ノート」のほうには、[deictic verb と状態変化用法]というトピックが表示されており、以下のような記述がされている。

go は、come, bring, take などとともに、話し手の場と直接関わる直動詞(deictic verb)である。空間移動用法においては、come には直示的な用法しかないのに対して、go は直示的・非直示的な二用法がある。中心義と意義 1 が直示用法、2 が非直示用法である。(後略)

次に「come」と「return」の記述であるが、紙面の関係上、「意義展開図」と「ネットワーク」のみを取り上げる(必要に応じて、その他の記述も取り上げていく)。

「come」の意義展開図とネットワークは、以下の通りである。

- ㉠ 〈人・物が〉(話し手の所に)移動して到達する
- ㉡ [全体で部分] 人・物が話し手の所に到達する
- ㉢ [全体で部分] 人・物が話し手の視野に出現する

ネットワーク 「〈人・物が〉(話し手の所に)移動して到達する」は中心義。ここから、移動のプロセスが背景化されて到達のみが際立つと、「〈人・物が〉(話し手の所に)到達する」を意味する。また、同じく移動プロセスが背景化され、何かが姿を現すという点に焦点が絞られると、「〈人・物が〉(話し手の視野に)出現する」という意義に展開する。両者は、それぞれ、中心義「移動+到達+出現」からおもに「到達」と「出現」が際立った意義展開である。比喩的には、人・物以外の抽象的なものを対象として、「移動+移動+出現」「到着」「出現」を表わす。

最後に「return」の意義展開図とネットワークを取り上げる。

- ㉣ 〈物・人を〉(元の場所に)返す
- ㉤ [プロセスで結果] n.元の場所に返された物
- ㉥ [原因で結果] 物・人が元の場所に返る
- ㉦ [機能類似] 応答を返す
- ㉧ [機能類似] 行為を返す
- ㉨ [機能類似] 利益を返す
- ㉩ [機能類似] 人・物を元の状態に返す

意義展開パターンの〔プロセスで結果〕と〔原因で結果〕はメトニミーであり、〔機能類似〕はメタファーである。

ネットワーク 「〈物・人を〉(元の場所に)返す」が中心義。名詞義「元の場所に返された物」は、この結果に当たるものである。同じく、結果を意味する自動動詞義「〈物・人が〉(元の場所に)返る」が派生する。コミュニケーションを物の移動と見立てることで、「(応答を) (相手の言葉に対して)返す」の意義に広がる。同様に、物のやりとりで見立てることで、「〈見返りとなる行為を〉(相手の行為に対して)返す」「〈利益を〉(労働・投資などに対して)返す」に意義展開する。また、状態変化を元の場所に見立てる認識に従って、「〈人・物を〉(元の状態に)返す」の意義にも拡張する。

この『多義ネット』における 3 語の記述から、日本語学習用辞書への応用可能性について考えてみたい。

まずは、この辞書の大きな特徴である「意義展開図」についてである。これは、辞書の巻頭でも述べられている通り、「意味への回帰」を辞書編集の歩むべき道とし、意味の全体を有機的に記述することを目指した非常に新しい記述方法であり、認知言語学の研究の知見を十分に生かされた記述方法であると言えよう。認知言語学において、メタファー⁶に関する研究は Lakoff & Johnson(1980)の研究を皮切りに近年盛んになってきている。それ以前は Lakoff & Johnson(1980)が述べているように、メタファーと言え、たいいていの人にとっては詩的空想力が生み出す言葉の綾のことであり、メタファーは言

葉だけに特有なものであって、思考や行動の問題とは無関係なものだと考えられていた。しかし、認知言語学において比喩の研究が積極的に取り組まれるようになり、日常用いられている概念体系の大部分が本質的にメタファーから成り立っており、メタファーが人間の知覚や思考や行動の仕組み構造を与えていることが分かってきた。最近では、意味変化や多義語の構成、文法化などにおいてもメタファーが重要な役割を果たしていることが明らかにされている(辻編 2002)。また認知言語学の分野だけでなく、外国語教育の分野においてもメタファーの重要性が主張されるようになってきた。

上野他(2006)では、メタファーは多義語や連語・イディオムと深く関与しているので、メタファーという考え方を外国語の指導に有効に活用することで、第二言語学習者にとって理解困難なものの一つである抽象的な意味を学習する際の大きな助けとなり得ると述べられている。また外国語教育にメタファーの指導を取り入れることの重要性について言及したBoers(2003)によると、メタファーの指導において一番重要なことは、学習者の「メタファー意識(比喩的な用法の根底に存在するメタファーに気づくこと)の強化」であると言う。日本語教育においては、管見の限り、小浦方(2006)のみであるが、小浦方(2006)がメタファー意識を強化することで、多くの比喩表現を恣意的なものではなく、身体的経験に動機づけられたものとして認識できるようになると述べていることから、『多義ネット』のようにメタファーによる意味区分と意義展開を辞書に取り入れることで、メタファー意識を高めることが可能になり、その結果、多義語の仕組みが理解でき、多義語の習得を促進することができるかと推察される。複数の意義の関連性が明示されているためカテゴリー化を促進しやすくなる点、また「go」の記述方法を見ても分かることだが、他の辞書と比較して、語義が少なく、使用者に「意味が多すぎて分かりにくい」という印象を与える可能性が少ない点も日本語学習用辞書の開発において参考すべき点である。

そして次は中心義である。中心義については辞書の巻頭で以下のように述べられている。

中心義とは多義ネットワークの中心に位置する意義であり、その出発点となる意義である。中心義は、(i)文字通りの意義であり、(ii)関連する他の意義を理解する上で

前提となり、(iii)具体性(身体性)が高く、(iv)認知されやすく、(v)想起されやすい。また、(vi)用法上の制約を受けにくく、それゆえ、(vii)意義展開の起点(接点)となることが最も多い意義である。(後略)

この説明からも分かるように、『多義ネット』の中心義とは、認知言語学でいう「プロトタイプの意味」と考えられるであろう。プロトタイプに関する研究も、認知言語学の研究分野で盛んに行われおり、語彙習得と関係が深いことが明らかになっている。例えば、我々が語の意味を習得する際、プロトタイプの用例から習得し、プロトタイプの語義を中心として他の用例の語義を学んでいく(松田 2004)ことやプロトタイプがどのようなものか知らなければ、類義語間の違いを認識することはできないなどがある。また知識の乏しいカテゴリーの場合、このプロトタイプを挙げてもらうことで即座に理解が進むとも言われている。また『E ゲイト』の「コア」が抽象的で曖昧なものであるのに対し、『多義ネット』の中心義は具体的に理解しやすいと言える。本稿で取り上げた「go」と「come」の中心義により、学習者は二つの語にどのような違いがあるのかを捉えることができるであろう。またプロトタイプは言語習得の早い段階で習得できることを考えても、中心義のようなプロトタイプの意味の記述は外国語学習辞書に取り入れるべき項目であると言える。

また単なる訳語とは異なる「解説的意義」も、これを読むことによって、どのような語義を持ち、またその語義同士がどのように関係しあっているのかを辞書の使用者自身で整理することができるような記述であると考えられる。たとえば「come」の□には、「〈人・物が〉(話し手の(視点がある)所に)到達する(◆到達点に焦点が絞られた意義)」と書かれているが、『E ゲイト』と同じく「視点」という概念が用いられており、このような記述があれば、上述の日本語学習者の誤用(「来る」が適切な状況において「行く」を使用する)にも有効に作用すると思われる。

しかしながら、『多義ネット』の記述を日本語学習辞書にすべて応用できるとは言えない。それは、この辞書が学習者向けではなく、研究者(専門家)向けと感じられる部分が多いからである。まずは、この辞書の特徴のひとつである「ネットワーク」である。編者が主張するように、多義語の全体像を知る

ためには有効な記述であろうが、学習者にとっては詳細すぎるとい印象を与えてしまうのではないだろうか。また語の全体像を理解することは、スキーマの形成にもつながることであろうが、スキーマは、日常的心的・身体的経験の繰り返しから生まれた認知的特性(吉村 2004)であることから、様々な用例に触れることによって初めて形成できるようなボトムアップ的なプロセスが必要なのである。このことを考慮に入ると、ネットワークのような詳細な記述を学習の初期の段階からトップダウン的に提示してしまうことには疑問の余地が残る。もしこのネットワークのような記述を辞書に取り入れるのなら、どこまで記述すべきかを十分に検討しなくてはならない。そして、これ以外に研究者向けと考えられる記述方法は「品詞一対記述」である。学習用辞書は品詞を分離して記述するのが一般的であるが、この辞書では品詞の壁を取り払って意味的なまとまりを最優先に記述する方針を採っているため、品詞を区別することなく記述している(例; 「go」の 0-d)。どちらの記述方法が適切かどうかについては、学習者の認知スタイルと大きく関わるものであるので、一概にどちらか一方が適切であるとは言えないのであるが、学習用辞書には、品詞を分離して記述するほうが先決であると思われる。というのは、品詞が一体になっていると自分の探している意味がどれなのか探し当てることができない場合もあるだろうし、また学習者にとって辞書を引くこと自体が文法学習になり得ることを考えられるからである(池田 2006)。本稿で取り上げる 3 語は日本語ではすべて自動詞であり、また日本語は英語に比べ、異なる品詞を持つ語が多くないので、あまり問題にはならないが、異なる品詞を持つ語や自・他動詞の 2 つの用法を持つ語などを研究対象とする際には考慮すべき点だと言える。

これ以外にも、例句、例文に日本語訳がつけられていない点や意義展開パタンの数が非常に多い点も検討の余地がある。特に、意義展開パタンのほうは、辞書を引きながら、この一覧を何度も確認しなくてはならず、この意義展開パターンに慣れるまでは非常に骨の折れる作業になってしまい、意味の理解を阻害してしまうという結果に終わることもあるだろう。

以上のことから、この辞書は学習者自身が使うこと想定して作られたものではなく、教師が授業を

行う際に参考にすべき記述が豊富に取り入れられた辞書であると言えるだろう。

4.3 『ロングマン英和辞典』における記述

『ロングマン英和辞典(以下、『ロングマン』)』とは、2007 年に桐原書店より出版された辞書で、監修者は G. Leech をはじめとする『ロングマン現代英英辞典』の編集者たち及び池上嘉彦をはじめとする辞書編集や英語教育の専門家たちであり、高頻度語 3000 語を含む 100000 以上の語と句が取り上げられている。この辞書の基本方針は、①英語と日本語の両方において、現在使われている言葉の姿を示すこと (= 「natural English」と「natural Japanese」の提供)、②広範囲の使用者にとって明快で理解しやすい内容であることの 2 つである。そしてこの辞書の最大の特徴は、約 3 億 3000 万語の英語コーパスの分析によって意味が頻度順に配列されていることと、学習者の英語を集めた特別なコーパスと日本語コーパスも使用し、例文の自然さと真正さが 100%保証されていることである。

まず「go」の記述を見ていく。

見出し語の部分には、見出し語そして S1・W1・J1 という語の重要度が提示されており(S1 は「話し言葉」で最も頻度の高い 1000 語、W1 は「書き言葉」で最も頻度の高い 1000 語、J1 は JACET(大学英語教育学会)の分類による、英語で頻度が高い 1000 語を意味する)、これに発音、品詞情報、活用形が続いている。そして見出し語の直下には、メニュー方式で次のような語義の一覧が提示されている。

- | | |
|----|-------------------------|
| 1 | 行く 自 |
| 2 | 出かける 自 |
| 3 | 訪れる 自 |
| 4 | 出席する 自 |
| 5 | 散歩[泳ぎ、飲み]に行く 自 |
| 6 | …しながら行く 他 |
| 7 | うまくいく 自 |
| 8 | …になる 《連結動詞》 |
| 9 | …の状態である 《連結動詞》 |
| 10 | 〈道が〉〈…〉まで[通って、に添って行く] 自 |
| 11 | 〈…〉を回る 自 |
| 12 | (びったり)はまる |
| 13 | (いつもの場所に)置かれる 自 |
| 14 | 合う 自 |
| 15 | 〈情報などが〉伝わる、〈手紙などが〉届く 自 |
| 16 | 消える 自 |
| 17 | 〈金が〉使われる 自 |
| 18 | あつという間に[ゆっくり]過ぎる 自 |
| 19 | 処分される 自 |
| 20 | こんなふうにする 自他 |

- 21 …のようである 自
- 22 〈ベル・アラームなどが〉鳴る自
- 23 (音)を立てる他
- 24 …と言う 他
- 25 〈機械などが〉動く自
- 26 〈装置が〉動かなくなる、〈視力などが〉衰える自
- 27 始める 自
- 28 〈賞・遺産などが〉与えられる 自
- 29 売られる 自
- 30 (金)払える[出せる] 自
- 31 死ぬ 自
- 32 おしっこ[トイレ]に行く自

そしてこの下には、語義ごとに用例やコロケーション情報が提示されており、32 の語義の後には、成句と句動詞の記述へと続く。これ以外にも、「！」マークで以下のような注意書きが記されている箇所もある。

there, abroad, home は副詞なので「そこ[海外,家]へ」の意味で直前に to を伴わない。: Have you been to Disneyland? I went there(×went to there) on Sunday with my friends. ディズニーランドに行ったことがありますか。私は日曜日に友達と行きました。| I have never been abroad(×been to abroad). 海外に行ったことがない| I went home(×I went to home)at nine o'clock.家に9時に帰った。

そして、英語に訳しにくい日本語などについての解説(=訳)というマークで表示も次のように記述されている。

訳 go と come
go は自分のことを中心にして、自分がいる場所からよそへ行くことを言う。
come はふつうは話し手のところへ「来る」だが、心の中の視点が相手のところにあるときは「行く」になる。また、話し手と聞き手の動作が一緒になる場合にも「行く」の意味になる。: Would you like to come to the concert with me?一緒にコンサートに行きませんか?

これ以外に語法(go の過去分詞)に関する記述もある。

次は、「come」の記述である。「come」にも「go」と同じく、見出し語の横に S1・W1・J1 という語の重要度がすべて提示されている。そして、come の語義一覧は以下のとおりである。

- 1 (話し手のほうへ)来る 自
- 2 (場所を)訪れる、出席する 自
- 3 到着する 自
- 4 a) (ある経路・距離を)やって来る自
- b) …をやって来る 他
- 5 (ある場所へ)行く自
- 6 〈時間・出来事などが〉到来する 自
- 7 〈商品などが〉(…)で売られる 自
- 8 (順序のある位置)にくる 自
- 9 (ある長さ・高さなどに)達する 自
- 10 オルガズムに達する 自

その他の記述は「go」と同様であるが、「go」の部

分に記述されていた「！」や訳に関する記述はない。

最後に「return」の記述を記す。「return」にも見出し語の横に語の重要度がすべて提示されているが、上の2語とは異なり、S2・W1・J1 であり、S2 とは話し言葉で頻度の高い 2000 語を表わす。語義一覧は以下の通りである。

- 1 戻る 自
- 2 …を返す 他
- 3 (…)を(…)に戻す 他
- 4 …を返品する 他
- 5 ぶり返す 自
- 6 〈仕事〉に戻る 自
- 7 a) 〈元の状態に〉戻る 自
- b) 〈…〉を〈…〉に戻す 他
- 8 〈あいさつなど〉にこたえる 他
- 9 質問[考え,問題]に立ち返る 他
- 10 〈ボール〉をリターンする 他
- 11 評価を下す 他
- 12 〈利益〉を生む 他
- 13 〈人〉に当選させる 他
- 14 …と答える 他

コロケーション情報はあがるが、成句や句動詞の情報はない。そして「go」と同じく、「！」マークによる注意書きが3箇所記されている。以下に、そのうちのひとつ(語義 1 の部分に記載されているもの)を提示しておく。

「戻る」「返る」の意味では go back や come back のほうが日常よく用いられる。: It's time we went back home. もう家に返る時間ですよ。| what time do you think she will come back?彼女は何時に戻って来るとおもいますか。

以上は「return」の動詞的用法であるが、この下には「return」2として名詞的用法、「return」3として形容詞情報が続いている。

以上 3 語の記述内容から、『ロングマン』の特徴と日本語学習用辞書への応用可能性を考えてみる。

この辞書の大きな特徴であるコーパスベースによる語義の記述について考える。投野(1997)で、コーパス準拠の辞書は、語義配列や用法提示の基準を変える可能性をひめていると述べられているように、英和辞典の編纂においては 1990 年代からその必要性が叫ばれており、現在ではコーパスをもとにした英和辞典の辞書は一般的な方法になってきている。コーパス準拠の辞書を編纂する必要性が叫ばれるようになったことには、以下のような根拠がある。1 つ目は、コーパスの頻度データに基づき、用例を作ると、日常頻繁に出くわす典型的で自然な例文を提示することが出来るからである(赤野 2000)。2 点目は、コーパスベースの辞書は、発信型辞書⁷として

機能できると言われているからである。そして3点目であるが、Langacker (1989)によって提唱された「使用基盤モデル」に依拠しており、言語使用者が意識していないような意味や用法までも把握でき、また研究者による直観的な分析よりも信頼性が高い、つまり認知言語学の多くの研究に欠如している実験的かつ記述的な研究技法をコーパスが提供してくれる可能性が非常に高いからである(Tummers, J. et al 2005)。

『ロングマン』が他のコーパス準拠の辞書と異なる点は、上にも述べた通り「natural English」と「natural Japanese」の提供ということの基本方針として用例に細心の注意を払っている点である。この辞書の「natural English」の実現はコーパスに準拠しているだけでなく、『ロングマン英英辞典』の編集者(英語母語話者)たちにより、一つ一つの用例が吟味されたことによる。というのも、編者の一人である池上氏が辞書の巻頭で述べているように、コーパスに出てくるからといって、全て適切、かつまともな英語の使用例ばかりという保証がないからである。また島山(2005)が「辞書の記述上は膨大であるため、必ずしもすべての記述がコーパスによって照査されているとは限らない」と述べているとおり、コーパス準拠としている辞書でもコーパスが細部まで利用されていない場合もあるのである。日本語教育のためのコーパスというのは残念ながらまだ開発途上であるが、コーパス準拠の日本語学習用辞書を編纂する際には、是非、取り入れなくてはならない方針である。また英和辞典において、なぜ「natural Japanese」という考えが必要なのかというと、日本語母語話者のための英語学習用辞書の用例には不自然な日本語、言わば直訳調の日本語がしばしば見られるからである。このことは、森口(2005)でも指摘されている通り、英語学習用辞書の編纂に日本語コーパスの利用が意識されてこなかったからであろう。しかしながら『ロングマン』では、用例の日本語訳すべてが日本語コーパスに基づき編集されていて、語義の日本語訳も、英語の意味に最も近いものを厳選して記述しているのである。

またこの辞書は、学習者の英語を集めた特別なコーパスと日本語コーパスも使用しているのも、日本人英語学習者が間違えやすい英語についてデータも豊富であり、これによって、上に紹介した「！」や「訳」など、学習の過程で意識化させるべき情報

を提供できる点も、日本語学習用辞書に応用すべき点であろう。

しかし、コーパス準拠のみで辞書を編纂することには慎重にならなくてはならない。それは、コーパスで多義を有機的に記述できるかどうか、つまり多義語が持つ意味の連続性が分断してしまわないかという点である。国広(1997)で「頻度順は、語義の意味・用法上の関連性をぶち壊しにしようという大きなマイナス面を持っている」と指摘されているように、どこまでコーパスに依拠して意味を記述するかは、非常に大きな問題であろう。『ロングマン』の訳語一覧を見て、語義が多すぎて分かりにくいと感じる学習者もいるのではないだろうか。上述の通り、コーパスによって言語使用者が意識していないものまでも知ることが出来るという利点があるものの、多義であればあるほど、コーパス準拠による記述は、語義を列挙しているに過ぎないという印象を与えかねない。しかしコーパスで一番使用頻度の高い語義ならば、母語話者にとってプロトタイプ的なものである場合が多く、それゆえに学習者に早い段階で習得させるべき語義が確定できるというメリットがあることは否定できない。したがって、コーパス準拠で意味を記述する方法を採用する場合には、意味の連続性に関する記述も取り入れて、語を体系的に記述することが望ましい方法であると言えよう。

4.4 『英語語義イメージ辞典』における記述

『英語語義イメージ辞典』(以下『イメージ』)は、2002年に大修館書店より出版された辞書で、筆者は政村秀実、収録語数は約7000語(見出し語約3000語、派生語・関連語約4000語)である。「意味の真の理解はイメージに尽きる。」という信念をもとに Native speakerの持つイメージに近づけることを目的に作成された辞書で、訳語と用例だけでなく、原義そして原義を読み解いたイメージ(言葉(日本語)によるもの)の提供が記載されている点がこの辞書の特徴であると言える。

まず「go」の記述である。見出し語の横には発音記号が記されており、見出し語の後は、次のように記述されている。

行く、～に至る、消え去る
原 行く
イメージ (その動きを追うと)進む/(出発地点に注目すると)⇒姿が消える
解 「行く」は日本語でも同じように〈行く〉と〈逝く〉の意味合いがある。

これに例文とその訳が続くが、例文ごとに◇マークで「物事の進行・逝く・姿が消える・解放する」という解説が付されている。

次は「come」である。

	来る、現れる
原	来る
イメージ	来る⇒姿を現わす⇒ことが起こる
解	comeは〈姿の出現〉、goは〈姿の消失〉◇「できる」を「出来る」と書く時、英語と同じ発想(来る⇒発現)をしている。

「go」と同じくこれに例文とその訳が続き、各例文ごとに◇マークで「姿を現す・ことが起こる・起こる」という解説が付されている。

最後に「return」の記述を取り上げる。

	返す；返却
原	元(に)(re)戻す(turn)
イメージ	元のところへ返す、帰る
関	turn 回る

「return」には、例文とその訳が記されているものの、例文の中に解説(◇)は記されていない。

以上が3語の記述であるが、ここで、この辞書の構成について簡単に説明しておく。

【原】は、語を構成する原義を提示するものであり、【イメージ】は、原義になぞってイメージを描くことを原則としており、これがこの辞書の大きな特徴である「原義を読み解いたイメージの提供」である。そして、【解】はイメージを描くための補強的情報で、【関】は関連語のことを指す。

『イメージ』の記述は他の辞書に比べ、非常に簡略化されており、辞書という形態に適した記述であると考えられる。特に、【イメージ】と例文の配列は、中心的な意味がどのように拡張しているのかを理解するヒントとなる記述であり、意味の連続性を捉えやすい記述になっていると言える。しかしながら、【原】はプロトタイプ的な意味と考えられるものの、単に訳語を提示しているに過ぎないと感じられる記述となっており、学習者が、母語と目標言語は一対一対応を関係であると考えてしまう可能性があることは否めない。また他の辞書と異なり、「視点」など3語の理解を促進させるような解説的記述がない点やコロケーションに関する記述がない点、そして関連語など類義語との違いに関する記述がない点など、学習用辞書として十分に機能できるかどうか疑問が残る。

4.5 認知言語学的な観点を取り入れた辞書の応用

可能性について

以上、認知言語学的な観点を取り入れた英和辞典4冊における go, come, return の記述を検討してみたが、この節では、4冊の辞書の日本語学習用辞書(本稿では日韓辞書)への応用可能性をまとめる。

まず日本語学習辞書に應用すべき点は、意味の連続性を体系的に示す方法である。『E ゲイト』の訳語一覧(メニュー方式)がこれに当たるが、日韓辞書には未だ取り入れられていない記述方法である。この方法は投野(1997)の「現場主義」すわなち「ユーザーがその場で見てわかること」であるが、特に『E ゲイト』の方法は、自分が探している意味が一体どれなのかを訳語一覧を見るだけで探し当てることができる記述だと考えられる。Nation (2001)で外国語学習者が辞書を引く場合、複雑なプロセスを経なければならないため、認知的負荷がかかると言われているが、訳語の一覧によりこの認知的負荷を軽減できると考えられるだろう。またこのような記述は、その他の意味とどのように関連しているのかも知ることができる方法だと考えられる。『多義ネット』の意義展開図も意味の関連性を体系的に示しており、多義語の意義を押しさえ込み少数の意義にまとめている点は参考にするべきであるが、日本語学習を始めたばかりの学習者を考慮に入れると、少数の意義にまとまっていることで、かえって理解困難になる可能性があるだろう。

そして、用例を豊富に取り入れる方法も日韓辞書に應用すべき方法である。3章に取り上げた日韓辞書における記述の実際を見ても分かることであるが、既存の日韓辞書に記載されている用例の多くは、国語辞書の用例をそのまま採用したものであり、文学作品からの引用などもある。したがって、用例数が多くても、学習者が当該語を言語使用場面においてどのように使えばいいのかを理解できるような用例とは言い難いものが多いのが現状である。この問題点に対しては、『ロングマン』を参考にすべきであろう。上でも触れたことであるが、たくさんの用例に触れることによってスキーマが形成されるようになり、語の全体像を学習者自らで体得できるという使用基盤モデルに適ったプロセスを踏むことができるのである。特に海外で日本語を学ぶ学習者は当該語の使用場面に接する機会が少ないので、辞書の用例はその語の使い方に関する理解を助けるもの

でなければならない。このことから学習者がその語をどのように使うべきかがわかる明快な用例を豊富に提示することを、日本語学習用辞書にも応用することが求められる。

最後は、トップダウン的なプロセスを促すことができるような記述を補助的に取り入れることである。これは、『E ゲイト』の「ネットワーク」、『多義ネット』の「ネットワーク」そして『ロングマン』の「!」や「**訳**」のことを指す。まず『E ゲイト』の「ネットワーク」は、本稿で取り上げた go, come, return にはなかったが、似た意味の語との比較をまとめたものであり、深谷他(1996)が提案している差異化(他の語との意味境界を保持する)を図るための有益な記述であり、また学習者にも理解しやすい記述になっている。そして、『多義ネット』の「ネットワーク」であるが、詳細すぎるために学習者辞書へそのまま記述することはできないものの、内容をもっと簡略化し記述することで学習用辞書にも応用可能になるであろう。最後は『ロングマン』の「!」や「**訳**」であるが、この記述例を見ても分かるように、日本語を母語とする学習者に焦点を合わせた記述になっている。このような記述を日韓辞書に取り入れることで、訳語や用例だけでは理解しにくい部分を意識化させることが可能になるであろう。

以上を踏まえ、次章では、日韓辞書における「行く」「来る」「帰る」の意味記述に関して、一試案を提示する。

5. 「行く」「来る」「帰る」の意味記述の一試案

5.1 本稿が目指す辞書について

この節では、本稿のまとめとして、意味記述の一試案を提示することを目的とする。まず、本稿が目指す辞書について触れておく。

まず、本稿が目指す辞書の対象者は、日本語の学習を始めたばかりの学習者である。対象者を限定する理由は佐竹(2000:47)が「日本語学習者、特に初級、中級の人のためにはその人たちのための別の辞書があるべきだ」と述べているように、全ての人にとって使いやすい辞書を考案することは不可能に近いことなので、使用対象者を限定するほうが使いやすい辞書を考案できると考えられるからである。そして日本語の学習を始めたばかりの学習者を対象とする

理由は、プロトタイプ的な意味を身につけ、またプロトタイプ的な意味からどのように意味が拡張しているかを初級の段階から意識化させることが必要であると Csabi(2003)などの先行研究で述べられていることによる。井上他(2006:29)では「用途に合わせて別々の辞書を作るよりは、一つの辞書の中にレベル別、目的別、四技能別の情報や用例が含まれており、それらが必要に応じて取捨選択できるという方がよい。」と主張されているが、情報を多くすればするほど、学習者に「使いにくい」と感じさせてしまう可能性があり、また 訳語の部分だけを見て、その他の部分には目を通さない学習者が多いため、多様なレベルの学習者のために情報量を多くした辞書を作成することよりも、使用対象者を限定するほうが理に適っていると考えられる。現に、上に取り上げた『初めての日本語辞典』という初学者のために編纂された日韓辞書が、非常に数多くある日本語関連の辞書の中で出版部数上位 10 位に挙げられているが、このことから、市場で初学者のための辞書が求められていると推測される。

以上を受け、本稿では『初めての日本語辞典』の記述をベースとしながら、認知言語学的観点を取り入れた意味の記述方法を考えてみる。

5.2 「いく」「くる」「かえる」の意味記述の一試案

4 章の英和辞典の分析から「行く」「来る」「帰る」の意味記述には、以下の 3 点を取り入れる必要性が示唆された。

1. メニュー方式による訳語一覧を提示し、意味の拡張関係を一目で分かるように示す。
2. 学習者がその語をどのように使うべきかがわかるような用例を豊富に取り入れる。用例は出来る限りコーパスに依拠して選定する。
3. 視点や学習者の誤用例に関する明示的に説明など、トップダウン的なプロセスを促すような記述を取り入れる。

2 のコーパスに関してであるが、上でも述べた通り、日本語教育のためのコーパスはまだ開発途上であり、現段階では、google などウェブ上で提供されている検索エンジンを利用するという方法しかない。検索エンジンをコーパスとして利用することに関し、先行研究では、利用可能だという見解(杉村 2007, 滝沢 2007 など)と問題ありという見解(荻野 2004, 荻野・田中 2005 など)に分かれているのが現況である。

利用可能だとする研究では、「用例を効率的に収集できる」や「日常的な言葉遣いを調査できる」や「幅広いジャンルを対象とできる」などを挙げている。そして問題ありとする研究では、「資料自体の非永久性(データを再現することができない)」や「検索エンジン自体の信頼性の欠如(検索エンジンによって異なる結果が出る)」や「データの信頼性の欠如(誤植つまりデータの誤りの可能性が高い)」などが挙げられている。しかし、服部(2004:7-8)が「WWWの検索で得られたデータをそのまま厳密な計量的分析(頻度比較等)に利用することはできない。しかし、そこで知られた事実をヒントとして何らかの仮説を立て、他のより確実な方法で実証しようとすることはできる。また、ある種の用例が(無視できない量だけ、または、一つでも)存在することを証明したい、という場合には比較的問題なく利用できるであろう。」と述べている通り、検索エンジンはコーパスとして利用するよりも、用例の存在を確認したり、母語話者の内省だけでは見えてこない使用傾向を把握したりするために利用すべきであると推される。したがって本稿では、コーパスに依拠して用例を選定するということは今後の課題とし、1と3に関する試案を提示していくことにする。

5.2.1 「行く」について

「行く」の記述方法から考えていく。まずは、中心的な意味、つまりプロトタイプの意味の設定である。

『大辞林』をはじめとする国語辞典で「移動する」が第一義になっている場合が多いが、これではどこからどこへと移動するかが明確ではないので、移動元と移動先を明示する必要がある。このことは、3.2に挙げた日韓辞書2冊においても同様である。

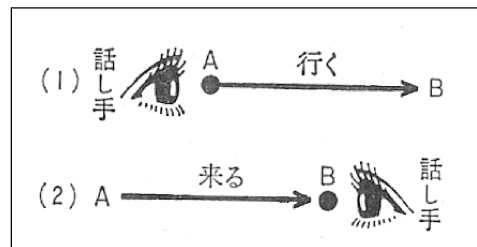
森田(1989)の記述をもとにすると、「行く」のプロトタイプの意味を「今いる場所から、他の場所に移動する」と設定でき、これは「行く」が持つ「移動」という意義に相当するものである。そしてこの「移動」の意義には、下位区分があり、以下の二つに分けられるだろう。一つ目は、「出発」、「通行・前進」そして「通学(通勤など)」という意義で、二つ目は「自力では移動できないものが、話し手のところから他の場所へ届く」という意義である。そして、第2義は、認知言語学で言う「走査(scanning)」を伴う「行く」である。「走査

(scanning)」とは、「把握」の問題の一つで、とりわけある種の方向性のあるものを捉える認知能力のことであり(篠原 1998)、「行く」の場合には「実際には移動しない、または移動先が明らかではなく抽象的な何かが、概念的に移動する」と考えることが出来るだろう。この第2義は「開通・通じる」(何かがA地点からB地点へと移動するのではない)と「通行・往来する」(特定方向への具体的移動動作を表わさない)と「到達」(事柄がある状態や程度・度合いにまで達する)という3つの意義に分類される。以上をメニュー方式で表わすとしたら、以下のようになる。

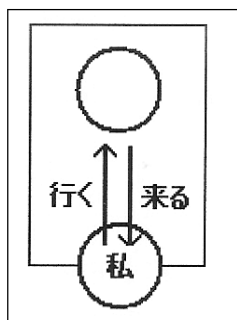
中心的意味(①) 「今いる場所から、他の場所に移動する」 1 A 出発 B 進行・前進 C 通学・通勤 2(手紙など、自力では移動できないものが)話し手のところから他の場所へ届く ②「実際には移動しない、または移動先が明らかではない何かが、概念的に移動する」 A 開通する・通じる B 通行・往来する C 到達

そしてこの訳語一覧の下には用例を提示(韓国語訳をつけて)していく。用例は英和辞典を見習い、句例だけでなく文例もなるべく提示し「行く」がどのような状況で使用できるのかを理解できるような用例を選定すること、また文型情報(例:「…ガ…カラ…ヘ(マデ)…ヲ行く」)や文法情報(活用など)も提示できるような用例にする。

用例の後には、トップダウン的なプロセスを促すような記述を取り入れる。特に「行く」は「来る」とどのような違いと共通点があるかを明示的に示す必要があると上でも述べたが、初級レベルの学習者にとっては、森田(1989:115)と森山(2007:8)で提示されているようなイラストや図式も有効に働くと考えられる。



森田(1989:115)



森山(2007:8)

これ以外にも、以下のような「行く」と「来る」の両方が使える文を提示し、視点の取り方の違いなどどのような差があるのかの解説(韓国語による)を取り入れる。

1 A 私は、今朝9時に学校に行きました。

B 私は、今朝9時に学校に来ました。

2 A 明日、学校へ行きますか。

B 明日、学校へ来ますか。

1A=私(話し手)の視点は、家などの出発点もしくは到達点である学校以外のところ。今朝9時に家などの出発点から、到達点である学校へと移動したことを表現。

B=私(話し手)の視点は、到達点である学校。今朝9時に学校へ到着したことを表現。

2A=話し手が、聞き手の出発点(家など)から到達点(学校)への移動を客観的に捉える場合や話し手の視点が出発点側にある場合の表現。

B=話し手が今、到達点(学校)にいる場合や話し手の視点が学校のほうにある場合の表現。また、話し手の現在位置に関係なく、聞き手の現在位置が学校である場合にも用いられる。

5.2.2 「来る」について

次に、「来る」の記述方法を考えていく。「来る」も「移動」を表わす語であるが、森田(1989)の記述をもとにすると、「来る」のプロトタイプ的意味は「離れた場所にあったものが話し手側へと近づく・到着する」と設定でき、このプロトタイプ的意味により「行く」との違いを明確に提示することができると言える。この中心義の下位区分は、以下の二つに分けられるだろう。一つ目は「到着」、「通勤、通学」で、二つ目は「自力では移動できないものが、話し手のほうに届く」となる。第2義は「行く」と同様「走査(scanning)」を伴う意義で、「来る」の場合、「実際には移動しない、または抽象的な何かが、概念的に(時間的に)話し手の方に移動する」と考えることが出来るだろう。この第2義

の下位分類は、「開通・通じる」(何かがA地点からB地点へと移動するのではない)と「到達」(事柄がある状態や程度・度合いにまで達する)という2つの意義に分類される。また第2義は、時間的に話し手のほうへと移動する「到来」という意義も含んでいる。この意義は「空間的」から「時間的」というメタファーによるものと考えられる。

そして「行く」にはない第3義であるが、「ある事象(たいていは好ましくない事象)が話し手の方に近づく」で、下位分類には「出現、生起」と「由来、原因」という2つに分類される。

以上をメニュー方式で表わすとしたら、以下のようになる。

中心的意味(①)

「離れた場所にあったものが話し手側へと近づく・到着する」

1

A 到着

B 通学・通勤

2 自力では移動できないものが、話し手の方に届く

②実際には移動しない、または抽象的な何かが、概念的に(時間的に)話し手の方に移動する

A 開通する・通じる

B 到達

C (時間的に) 到来

③ある事象(たいていは好ましくない事象)が話し手の方に近づく

A 出現、生起

B 由来、原因

「行く」の部分に挙げた「行く」と「来る」の違いに関する記述に関しては、「行く」の部分を参照するように記しておく。また①1A「到着」については、「話し手の視点が到着地点に移っていて、その到着地点に他者が移動している場合にも「来る」が使われる。これは、到達地点を「自己の側に属するもの」と考えるためである。」という記述も取り入れることにより、「来る」を用いる話し手の意識」に関する理解を促すことができるであろう。

5.2.3 「帰る」について

最後に「帰る」である。「帰る」は「行く/来る」ほど複雑な語ではないものの、2語と同じく、話し手の視点や領域を知ることが「帰る」の理解につながると考えられる。また日本語では「行く」「来る」「帰る」という3語が基本で、それぞれが意味を担っているに対し、韓国語では「行く」「来る」という2語が基本であり、「帰る」に相当する「돌아가다(돌아오다)」はいわゆる複合語(「돌다+가다(오다)」)である。そのため、韓国語では

「돌아가다(돌아오다)」ではなく「가다(行く)」もしくは「오다(来る)」で表現可能な場合が多いのである。したがって、このような日本語と韓国語の違いについても記述しておくことが必要であろう。

まずは、2語と同じくプロトタイプ的な意味の設定であるが、「人や物が、家などの本来の場所・本来いるべき場所へ移動する」と設定できるであろう。この中心義には「話し手の領域へ訪れた人が去り、自己の領域へと移動する」という意味も含めることができる。

そして、第2義は「話し手(話し手と同じ領域にいる人)がしたことに対して、相手側が反応する」という「反応・応答」の意味である。厳密に言うと、この第2義も「反応など目に見えない事象がもとの場所(話し手のほう)へ移動する」という意味なので、中心的意味の下位分類とすることができるであろう。しかし、日本語を始めたばかりの学習者のための辞書ということを考慮に入れると、具体的なものの移動と抽象的なものの移動は、個別に記述するほうが効果的であると考えられる。

以上をメニュー方式で表わすとしたら、以下のようになる。

中心的意味(①) 「人や物が、家などの本来の場所・本来いるべき場所へ移動する」 1 話し手自身、または話し手の領域に属する人や物の移動 2 話し手や話し手の領域に属する人(物)以外の場合、話し手の領域から自己の領域へ移動 ②話し手(話し手と同じ領域にいる人)がしたことに対して、相手側が反応する[反応・応答など]
--

語義の一覧と用例に続き、森田(1989;116)を参考に、韓国人日本語学習者が間違えやすい「行く」と「帰る」の違い、そして「帰る」に関する日本語と韓国語の違いに関して以下のような記述を採用する。

「行く」を使って、話し手自身の移動を表わす場合は、ふつう自分の居場所(家・会社など)以外のところへ移動する時。 家(自宅)への移動は「帰る」である。 また日本語は、韓国語と異なり、「行く」「来る」「帰る」という3語が基本をなす。したがって、韓国語では「行く」「来る」で表現することができても、日本語では「帰る」を使用しなくてはいけない場合が多い。 ×毎日、6時に家へ行きます。 ○毎日、6時に家へ帰ります。

日韓辞書の多くが「帰る=돌아가다(돌아오다)」という記述に留まるっているのに対し、本稿で提案した記述方法は、「帰る」に関わる話し手の視点や

領域に加え、「行く」とどのような違いがあるのかを、学習者に伝えることができると言えよう。

6. まとめと今後の課題

本稿では、日本語の学習を始めたばかりの韓国人日本語学習者にとって「行く」「来る」「帰る」という3つの移動動詞を取り上げ、教科書や既存の辞書(国語辞書、日韓辞書)などにおける記述を検討した後、認知言語学的な観点を取り入れている英和辞典における意味記述を取り上げ、日本語学習用辞書への応用可能性について分析を試みた。そして最後に、この3語の意味記述方法に関する試案を提示した。

しかし、本稿の5章で提案した意味記述方法が、学習者の語の理解及び習得に有効に作用すると考えるのは時期尚早である。というのも、本稿の記述方法は、敢えて訳語を提示せず、解釈的な意義を採用したのであるが、訳語の提示は常に意味の理解を阻害してしまうものではなく、意味の理解を助ける働きもある(玉村 1995)と考えられるからである。したがって、訳語と解釈的な意義をどのように併記することが学習者の理解を促進するのかについて、また本稿で提案した記述方法が意味の連続性の理解をも可能にするのかに関し、学習者を対象にした調査によって明らかにしていかなければならない。

「行く」「来る」「帰る」の3語を理解するためには「視点の位置」や「話し手の把握の仕方」を知ることが重要であることを本稿で何度も触れたが、これは日本語の言語類型論的特徴のひとつなのである。認知言語学的な観点から日本語の言語類型論的特徴を言及した池上(2000)は、日本語は主観的把握⁸(subjective construal)が相対的に広い範囲で許容される言語であり、「行く/来る」の使い方の制約について「日本語における一人称(あるいは、話し手中心)への拘わりの一つの指標であると考えるのがもっとも納得できるのではないのではないであろうか。(p.283)」と言及している。また同じく、日本語の言語類型論的特徴について論じている森山(2007)では、授受表現や受身表現など日本語学習者にとって理解困難な項目の根底に言語類型論的な日本語の特徴があり、それが日本語の個々の特徴を生み出しているのだとすれば、学習者が覚えなければならないことはそうした日本語の類型論的な特徴だけで済み、学習負担が軽減されるだけでなく、さまざまな日本語

の特徴的表現や用法に出くわしたときにそれを理解し、使えるようになり、習得していくヒントとなる可能性も期待できると示唆している。これらの先行研究での言及を考慮に入れると、日本語学習用辞書にも日本語の言語類型論的特徴に関する記述を学習者に理解しやすいような平易な形で示すことが求められるのではないだろうか。しかし、辞書という形態に、こうした日本語の特徴を記述することは妥当なのか、もし妥当だとしたら、どのような方法で記述するのが適切なのか(辞書の巻頭部分に記述するか、それとも各語の記述部分で必要に応じて提示するかなど)について、十分に検討をする必要がある。

日韓辞書などの日本語学習用辞書に認知言語学的な観点を取り入れて記述していくという試みはまだ始まったばかりである。田中(2007:562)が「「なぜそうなのか」という attention を向け、「なるほどそうなのか」という awareness-raising を高める、そして、「そういえばあれも同じだ」という networking を促すという流れを実行することが認知的スタンスを採用することで可能となる」と主張しているように、まずは、どのようにすればこのような流れを日本語学習用辞書で実現できるのかどうか、またこのような流れは、学習者の意味理解という点において従来の辞書とどう異なるのかについて追究すると同時に、認知言語学の研究に欠如しがちな実験的かつ記述的な研究技法を提供してくれるコーパス利用についても検討を重ね、どのような方法で用例を選定していくことが望ましいのかについて、本稿で取り上げた3語以外に関しても今後の課題として考えていきたい。

注

1. 森山(2000)の調査方法は、動詞の絵カード(70枚)を一枚ずつ見せ、5秒以内で該当する動詞を日本語で答えてもらうという方法である。
2. 一般系列高校には、放送通信高校も含まれている。一般系列高校以外に、外国語系列高校、国際系列高校(主に帰国子女が教育対象)、家事・実業系列高校がある。
3. 一般系列高校の「日本語I」の目標は、「日常生活で使われるやさしい日本語を理解し、やさしい日本語で意思疎通ができる基礎的能力を養う。会話能力の向上と日本語のための情報の収集に積極的に取り組み、日常言語の生活と文化に関する関心と理解を深め、日本人と能動的に意思疎通が行えるほどの能力を養成することである。
4. 「いく」「くる」には、補助動詞(「～ていく」「～てくる」)に関する記述もあるが、本研究では、本動詞に限

定したために、補助動詞に関する記述は省略した。

5. 紙面の関係上、『大辞林』における慣用句を省略し、また例文も1例に限った。
6. 辻編(2002:209)で「比喩の下位区分である隠喩を指す「メタファー」という用語が、比喩一般を指すために用いられることが往々にしてある点は初学者には注意を要する。隠喩は、類推と同様に類似性が背景にある比喩であるために、創造的思考に目立って寄与することが多く、一般に最も脚光を浴びやすい。このことからメタファーを比喩の代名詞として使う場合が多い原因と一つと考えられる」と説明されている。本稿でも、「メタファー」という用語を、比喩全般を指すものとして使用する。
7. 発信型辞書とは、狭義では「二言語辞書のうち、想定される辞書使用者によって既知の言語(通例母語)を見出し語とし、未知の言語の相当語句を提示する辞書」で、広義では「主に発表(典型的には文章作成)の際に使用されることを前提に編集された辞書」を指す。
8. 「主観的把握」とは、言語化する話し手が自らを認識し、言語化する状況の中に身を置いて状況を認識し、言語化するという構図が成立している場合を指し、「主観化」とも呼ばれる(池上2000:273)。

参考文献

- 赤野一郎(2000)「データ収集をめぐる闘い」『月刊言語』29(5), 50-58.
- 池上義彦(2000)『日本語論への招待』講談社
- (2006)「〈主観的把握〉とは何か - 日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『月刊言語』36(5), 20-29.
- 池田真澄(2006)「最初に教えておきたい辞書の読み方」『英語教師』3月号, 14.
- 李徳奉(2004)「韓国の新学習指導要領に見る日本語教育の新しい動き」『世界の日本語教育(日本語教育事情報告編)』7, 11-27.
- 井上優・有賀千佳子(2006)「これからの学習者用日本語辞書」『日本語学』25-7, 22-29.
- 李漢燮(2006)「韓国における日本語辞書について」『日本語辞書学の構築』255-276
- 今井むつみ(1993)「外国語学習者の語彙学習における問題点—意味表象の見地から—」『教育心理学研究』41, 243-253.
- 上野義和編(2006)『英語教師のための効果的語彙指導法—認知言語学的アプローチ—』英宝社
- 荻野綱男(2004)「各種検索エンジンの実態と特徴」『日本語学』23-2, 18-33.
- ・田中ゆかり(2005)「インターネットは言語研究のツールになるか」『日本語学』34-2, 9-15.
- 柏野和佳子・本多啓(1998)「IPAL 名詞辞書における多義構造の記述」『情報処理学会論文誌』39(9), 2603-2612.
- 国広哲弥(1997)『理想の国語辞典』大修館書店

- 小浦方理恵(2006)「メタファー意識の日本語教育への応用可能性」『認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究1年次報告書』108-111
- 小池生夫監編(2003)『応用言語学辞典』研究社
- 佐竹秀雄(2000)「使いやすさをめぐる闘い - 国語辞書編」『月刊言語』29(5), 42-47.
- 篠原俊吾他(1998)「認知言語学を知るためのキーワード」『月刊言語』27(1), 71-87.
- 杉原泰(2007)「インターネットを利用した日本語の類語分析」『月刊言語』36(7), 42-49.
- 滝沢直宏(2007)「巨大データの必要性 - 言語の周地的・慣習的側面を探るために」『月刊言語』36(7), 34-41.
- 田中茂範(1987)「多義語の分析: コアとプロトタイプ」『茨城大学教養部紀要』19, 123-158.
- _____ (1988)「認知意味論: 多義の構造」『茨城大学教養部紀要』20, 234-257.
- _____ (1990)『認知意味論: 英語動詞の多義の構造』三友社出版
- _____・水野邦太郎(2006)「英語コミュニケーション能力を養成する言語リソースの研究」『認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究1年次報告書』6-14
- _____ (2007)「認知的スタンスと英語教育」『日本認知言語学会論文集』7, 552-564
- 谷誠司(2002)「第7次学習指導要領高校日本語I教科書における『学習達成度を測定する問題』の分析」『日本学報』53, 53-61
- 玉村文郎(1995)「外国人のための日本語辞書構想」『月刊言語』24-6, 54-61.
- 辻幸夫編(2002)『認知言語学キーワード事典』研究社
- 投野由紀夫(1997)「「定番」英和辞典の過去・現在・未来」『英語教師』10月号, 23-25.
- _____ (2006)「Learner's dictionary 概観」『日本語学』25-7, 6-21.
- 服部匡(2004)「WWW 検索と日本語研究への応用」『日本語学』23-2, 6-16.
- 島山利一(2005)「英和辞典と語法」『英語教師』9月号, 48-49.
- 深谷昌弘・田中茂範 (1996)『コトバの意味づけ論: 日常言語の生の営み』紀伊国屋書店
- 松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究』ひつじ書房
- _____ (2006)「コア図式を用いた多義動詞「とる」の認知意味論的説明」『日本語科学』19, 119-132
- 水口里香(2006)「学習者用辞書における多義動詞「とる」の記述について - 日韓辞典を中心に -」『韓国日本学会第72回学術大会 Proceedings』105-109.
- 森口稔(2005)「和英辞典と日本語コーパス」『英語教師』12月号, 50-51.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- _____ (2002)『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 森山新(2000)『認知と第二言語習得』図書出版啓明
- _____ (2006)「認知言語学からの日本語教育への提言」『認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究1年次報告書』56-63
- _____ (2007)「応用認知言語学的な日本語教育の試み」『日本認知言語学会論文集』7, 1-11
- 吉村公宏(2004)『はじめての認知言語学』研究者出版
- Boers, F.(2003)Expanding Learner's Vocabulary Through Metaphor Awareness: What Expansions, What Learners, What Vocabulary? In Michel, A.and Susanne.N. (Ed.), *Cognitive Linguistics, Second Language Acquisitions, and Foreign Language Teaching*. Mounton. 211-232
- Csabi, S.(2003)A cognitive Linguistics View of Polysemy in English and its Implication for Teaching. In Michel, A.and Susanne.N. (Ed.), *Cognitive Linguistics, Second Language Acquisitions, and Foreign Language Teaching*. Mounton., 232-256
- Lakoff, G. & Johnson, M.(1980)*Metaphors We Live By*. The university of Chicago Press (渡部昇一他(訳)1986『レトリックと人生』大修館書店)
- Langacker, Ronald W.(1988)"A usage-based model". In B.Rudzka-Ostyn(ed.) *Topics in Cognitive Linguistics, Linguistics*, 127-161. John Benjamins
- Nation, P.(2001) *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press
- Tummers, J., Heylen, K. and D. Geeraertsm (2005)*Usage-based Approaches in Cognitive Linguistics: A Technical state of the art*. Corpus Linguistics and Linguistic Theory 1(2), 225-261.

みずくち りか/弘益大学校 (韓国) 専任講師
mizurika@hotmail.com

A new idea about a method of description of meanings in Japanese-Korean dictionaries —about 「iku」 「kuru」 「kaeru」 —

MIZUKUCHI Rika

Abstract

This paper focuses on motion verbs ("*iku*", "*kuru*", "*kaeru*") which are difficult to acquire by Korean beginner learners of Japanese and tries to find a good method of description of these meanings in Japanese-Korean dictionaries from a point of view of Cognitive Linguistics .

In particular, I looked at descriptions of 3 words in existing dictionaries (a Japanese , a synonym and a Japanese-Korean dictionary) and Japanese textbooks for beginners and I analyzed four Japanese-English dictionaries that are based in Cognitive Linguistics. Furthermore, I discussed the possibility of applying Cognitive Linguistics to dictionaries for Japanese learners and I presented a new idea of a method of description.

Based on my analysis, I suggest it is very important to know a way of the construal of the speaker like perspective for understanding 3 words. Therefore dictionaries must take this into account and be arranged wherein learners can grasp the continuity of their meanings.

【Keywords】 Japanese-Korean Dictionaries, perspective, description of meanings, motion verbs, beginner learners of Japanese

(College of Cultural Foreign Languages, Hong-ik University)